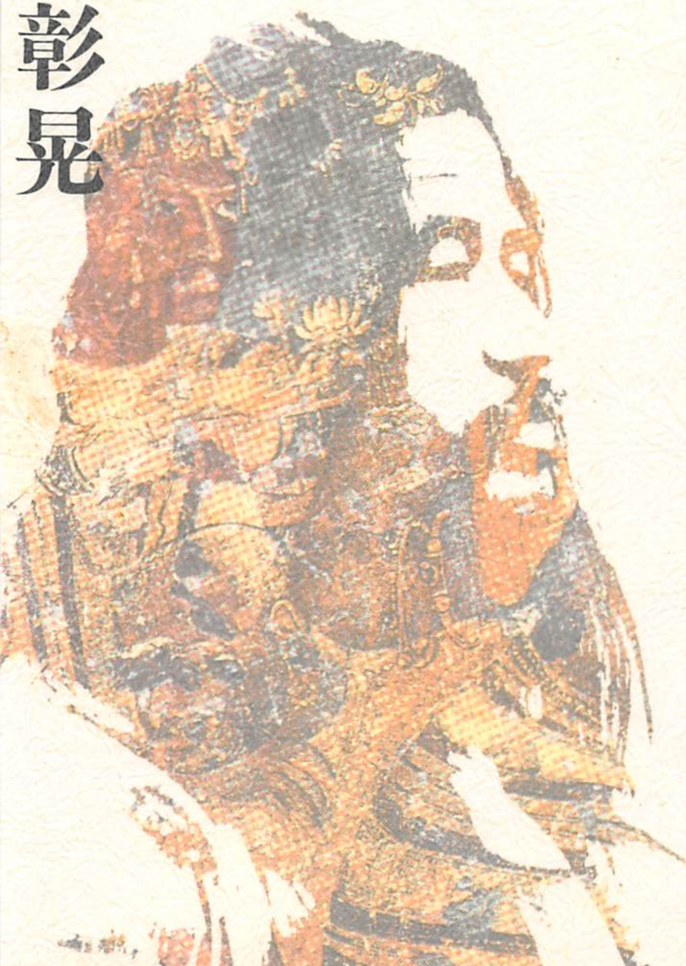
麻原彰晃の世界

第一巻

麻原彰晃



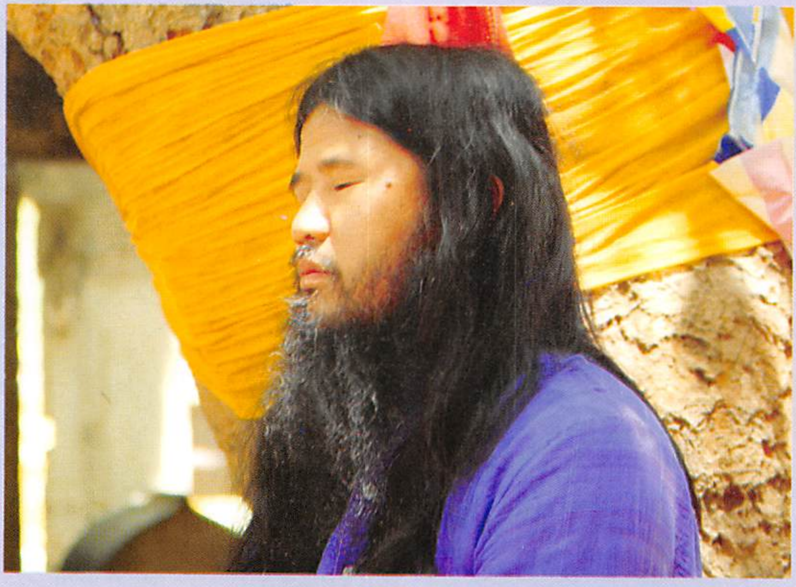
麻原彰晃の世界

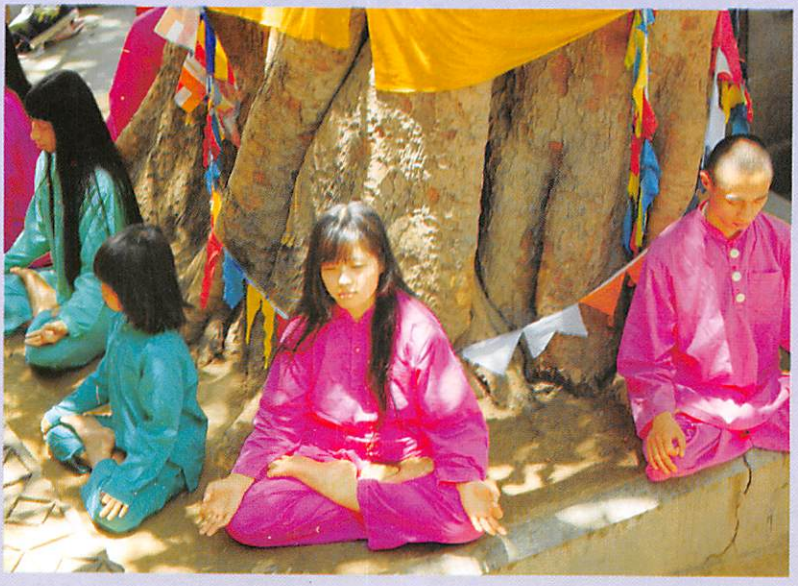
第一巻

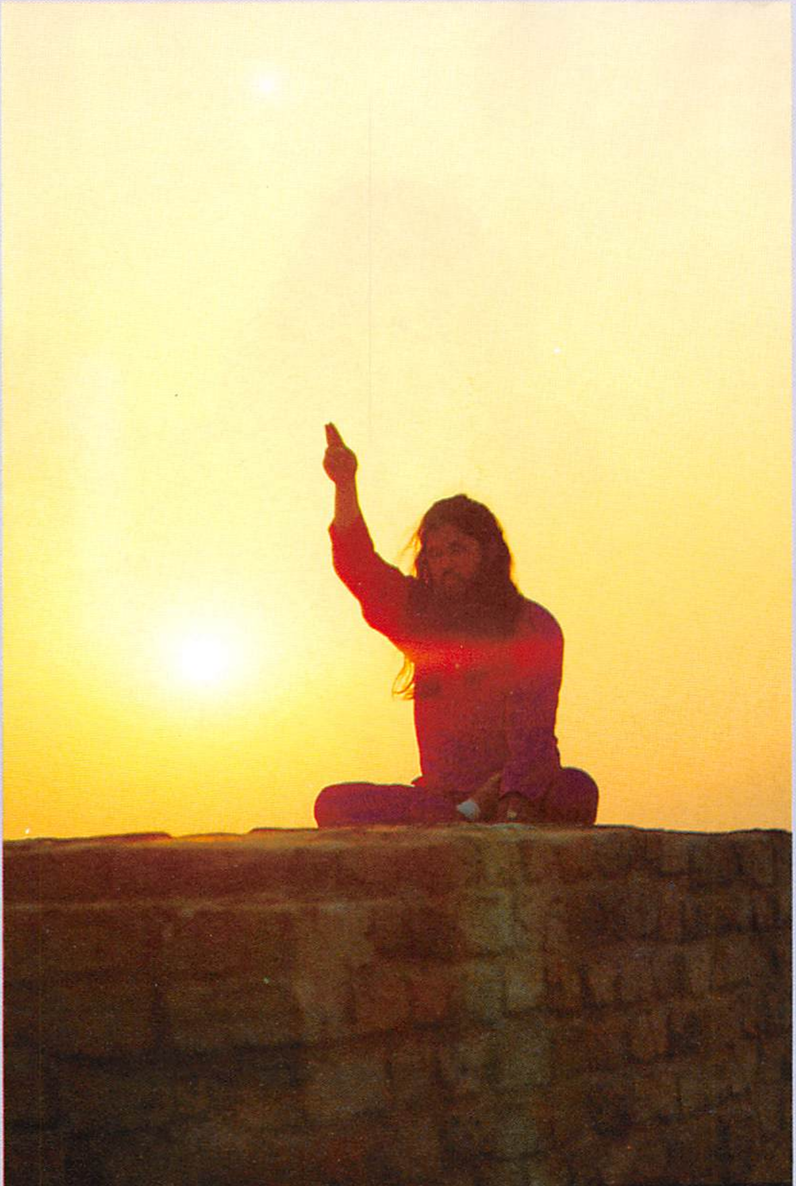


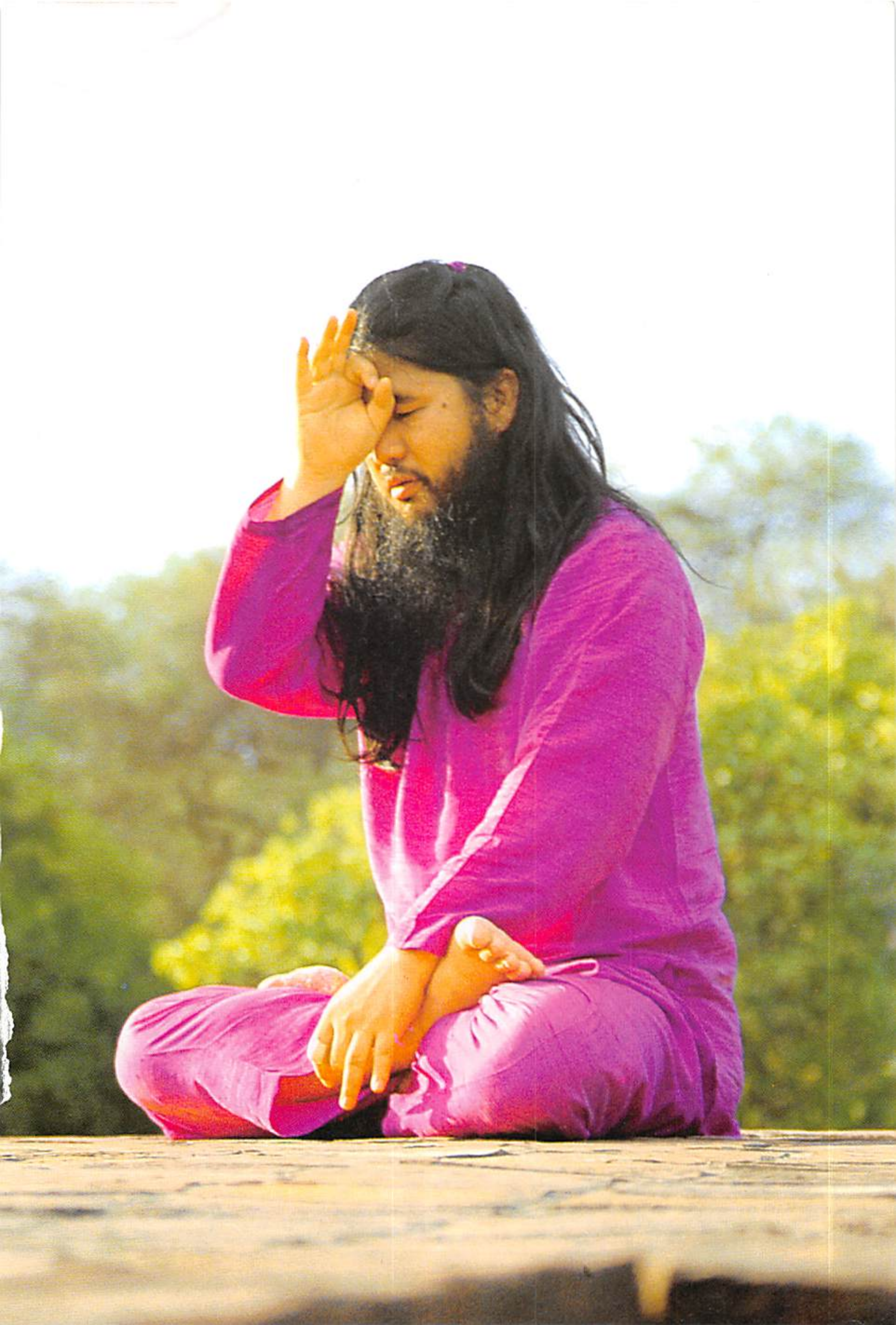
オウム出版











はじめに

日本には多くの宗教が存在している。そして、その宗教の中で、仏教も多くの宗派を掲げている。ところで、この宗派というものは大変なくせ者である。というのは、仏教の教え、つまり真理の体系の一部をとって、「これが仏教である」といっているからである。

例えば、ここに一台の自動車があるとして、そ

のタイヤの一つをとって「これが車である」ということができるであろうか。また、ここに一頭の象がいたとして盲目の人がその足だけを触り、「これが象である」ということができるのだろうか。ところが、これが宗派なのである。

わたしは真の仏教にしろ真のヨーガにしろ、そのすべての体系を日本に持ち込み、そしてできるだけ多くの人にその体系を知って経験していただくことが、わたしの役割であると考えている。そして、この『麻原彰晃の世界』シリーズが、その目的を達成するための一助となることを確信している。

このわたしの心の働き、書籍の内容、そして出版をするという行為がシヴァ大神および諸々の覚者方の大いなる慈愛に満ちた救済計画の手助けとならんことを祈りたいと思う。

ヴァジラ　ナマ　シヴァ　ヤ
ヴァジラ　ナマ　ブッダ　ヤ

麻原彰晃

麻原彰晃の世界

❖第一巻

目次

第一話　煩悩滅尽と〝悲しみ〟の大陸





九一年二月十五日　高知支部

◉批判に揺るがない本物の価値

ここに大変うまい手作りのバッグ屋がいた。この手作りのバッグ屋が作ったバッグは、なかなか壊れることなく、そしてその品格は持つ者のみが理解できる、そういう大変重みのあるバッグであった。このバッグに対して、周りが、

「お前の持っているバッグは偽物だ。お前の持っているバッグは価値がない。」

と批判をしたと。

同じように、ここに大変優秀な腕を持った医者がいた。この医者は、来た患者を安らがせ、そして病を治すことができた。この医者を周りが誹謗（ひぼう）し、

「あそこの病院に行っても、病気は治らない。あそこの病院に行っても、

悪くなるだけだ。あいつはインチキだ。」

と批判をした。

このバッグ屋にしろ、あるいは医者にしろ、その価値のある者にとっては、その価値を理解できる者にとっては、いかに周りが非難しようとも、全く価値が変わるものではない。

同じように、このオウム真理教の価値も、いかに権力が叩こうとも、その価値に変化が出るものではない。実際のところ、一九九一年に入り、救済活動を本格的に復活したオウム真理教に集った新しい信徒さんは、二百六十名。そして、二月になり、その数字は四百名に向かって、つまり月の入信者数が四百名に向かって、どんどんどんどん拡大の傾向にある。これは、オウム真理教の教義が、現代の人の心を本当の意味で安らがせる、ただ一つの煩悩滅尽の教えであるからであるといえる。

本来、価値というものは、関係のない第三者が、その価値がわからず批判できるものではない。現に、マスコミもオウム真理教の教義を叩いたことは一度もない。これは、なぜ叩けないかというと、オウム真理教の教えが、真の仏教、つまり真理に根付いているからである。

◉真我への道筋を持つ唯一の宗教

では、なぜオウム真理教が、この日本で大きくなっては困るんだろうか。それはそうである。現体制の権力は、要するに物質、お金といったもので国民を縛り、そしてがんじがらめにし、自分たちのしもべとして、手足として使いたがっている。しかし、国民一人一人は、本来、心に備わっている、自由・幸福・歓喜をどこかで求めている。この間には、大きなギャップがある。



ところが、オウム真理教の教えは、その絶対的な自由・絶対的な幸福・絶対的な歓喜、つまり真我へと帰る道筋、これを教える日本における唯一の宗教だから、この教えに傾倒し、本当に実践を始めるならば、心が洗われ、そして現権力からの脱却を図ろうと心がそれに向かい、現代の価値観を超越した意識状態へと導かれるから、権力にとっては大変「怖い」ものなのである。

もともと宗教というものは、権力に対して迎合する必要もないし、あるいは権力に依拠する必要もない。つまり、全く独立の関係で宗教は成立しているはずなのである。

ところで、この価値観は、つまり皆さんを絶対的に幸福・自由・歓喜へと導くこの価値観は、わたしの生きている限り、絶対にねじ曲げること——たとえオウム真理教がつぶされたとしても——絶対にねじ曲げることは

しないと考えています。

◉多岐にわたる真理の証明を

それよりも、絶対的な真理を皆さんに実践していただくために、多くの証明――オウム真理教の証明というのは要するに、経典群をね、例えば翻訳し、そしてその経典が、今わたしの説いている法、あるいは正悟師や正大師の説いている法と矛盾が全くないと。いや、それどころか、オウム真理教の教えは、同じ光のソースから出てるんだということを証明していこうとし続けることであろう。そして、これは、皆さんに煩悩の滅尽を与え、不死を与え、そして絶対的な平安の境地を与えます。

まず、煩悩滅尽はどのようにしたら生じるのかというと、これは心の本性と、それにまとわり付く煩悩とがあって、その煩悩がちょうど餅をね、

引きちぎるように、ちぎれていく形でヴィジュアル的に切れます。そして、それを離解脱といいます。

では、不死とはどのようにして得られるのかというと、わたしたちの知らない、もう一つのボディー、あるいはもう四つのボディー、あるいはもう五つのボディー、このボディーを理解できるようになり、そしてそれを自由に操れるようになることによって、不死へと至ります。

では、絶対的な平安とはどのようにして生じるのかというと、修行を続けていく段階で、先程言った離解脱が生じ、そしていかなる要素も、その人の心に影響を与えなくなります。この段階で絶対的な平安が生じるのです。なぜならば、わたしたちの苦楽は、外的要因と心とがつくり出した幻影にすぎないからなのです。

オウム真理教では、多くの証明をしていきたいと考えています。例えば、

三月の二十八日、「死と転生」というタイトルのもと、大阪にて公演を開きます。ここでの題材は何かというと、人間がどのような形で死んでいくのかと。そして、バルドーへと入り、まずコーザルのバルドー、アストラルのバルドー、そして現象界のバルドーへとどのようにして移行していくのかと。そのときどういう現象が現われるのかということを、実際に舞踏と、つまり踊りや舞と、そしてアストラル音楽によって、そしてわたしのマントラと詞章によって、それを表現したいと考えています。あるいは、あと一週間ぐらいのうちに、アニメーションによってね、つまり『真理相応』、あるいは『超越神力』、あるいは『ガティーカーラ経』といったお経や、わたしの体験、これを動く経典として皆さんに見ていただき、感じていただきたいと考えています。

これらの試みは、皆さんに現代の価値観、この現代のデータの源を使い

ながら、真理のデータを入れていただきたいなと願う、わたしと、それから教団の愛が、やっと現象化してきたものだと考えています。

◉四つの預流支――覚醒、そして不死へ

では、皆さんは何を実践したら幸福になるのかと。何を実践したら、煩悩滅尽、不死、そして絶対的平安に到達できるのかと。それは「四つの預流支」です。

では、四つの預流支とは何かというと、まず第一は、三宝に対する帰依です。この三宝は、皆さんに今生の幸せだけではなく、来世以降の幸福を約束するものです。

では、三宝とは何かというと、一般に仏・法・僧といわれているもの。これを正しくいうならば、仏とは、真理を悟った者、つまり意識の、人間

以上にはっきりし、神々の状態に到達している意識の者と。オウム真理教では、当然これはグルがそのパートを担当します。では、法、ダンマ、これは何だと。これは、オウム真理教の例えば教義、パーリ五部、あるいは悟り得た大師方の体験、悟り得た正悟師の体験、正大師の体験、そしてわたしの体験と。この部分が真理ということになります。では、僧とは何かと。僧とはお坊さんのことだよ。オウム真理教にお坊さんいないじゃないかと。実際、これはね、正確なサンスクリット語の発音をするならば、サンガ、これが中国へ渡り、ソウギャという言葉になり、そしてギャが取れて、ソウとなりましたと。このソウギャ、サンガとは何かというと、これは〝真理に集う者〟の意味です。つまり、教団ということになります。

つまり、皆さんにとっての三宝とは、グル、そして真理、そして教団ということになります。これに対して帰依をすること。帰依とは何かという

と、奉仕や布施の実践を行なうこと。これが第一の預流支です。

では、第二の預流支は何でしょうか。これは、多くの真理のデータを入れるということです。例えば、こういう説法会に参加する。あるいは、勉強会に参加する。あるいは、説法テープを聴く。あるいは、アニメーションを見、それを聴くと。あるいは、その他のイベントに参加し、実際に見、聴くと。あるいは、『マハーヤーナ』を読むと。このような形で、多くの真理のデータを入れ、何度も何度も繰り返し繰り返し記憶すると。これが、第二番目の預流支です。

では、第三番目の預流支とは、何でしょうか。これは、その入れたデータをもとに、自分自身の身・口・意の統御、つまりコントロールに入ると。このコントロールに入るのは、あくまでも現世的な観念ではなく、先程述べた真理、これを土台として思索し、いい部分は、これはよしと、もっと



増大させようと。悪い部分は、これは駄目だと、そしてやめようと、減少させてやめると。それを瞑想すること、熟考すること、これが第三番目の預流支です。

では、第四番目の預流支とは何かというと、その熟考したものを実際行動に移すと。例えば、身においては、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れると。言葉においては、妄語を離れ、綺語を離れ、悪口を離れ、両舌を離れると。心においては、貪りを離れ、嫌悪を離れ、邪見解を離れると、無智を離れると。これが四預流支の四番目。

では、預流支とは何かというと、これは四つの預流支とは何かというと、流れに乗っかる土台と。では、何の流れに乗っかるんだといったら、この欲界から色界、そして無色界、マハー・ニルヴァーナへと至る流れに乗っかる土台。つまり、この四つの預流支の実践をなすことによって、必ずや

その流れへ乗っかり、いずれ等覚、つまり覚醒をしますよと。そして、平安な境地に到達しますよと、そして不死へと至りますよと。これが預流支です。

そして、この一、二、三、四のまずは三宝帰依から入り、次に多くの法を学び、次に思索し、そして実践するという四つをなす者は、必ずや仏陀として未来に登場することになるでしょう。

◉幸福を与える〝悲しみ〟の大陸

いろいろな仏典を調べると、面白いことが書かれています。本来、人間の住んでいる大陸は四つあると。その住んでる大陸の最も貴重な大陸、これをジャンブ州というと。ジャンブ大陸という。その他、三つの大陸に比べて、このジャンブ大陸が優れている要因は、そのジャンブ大陸には、

悲しみがあるからであると。他の三つの大陸は、喜びしか追い求めない大陸であると。

ではなぜ、悲しみのある、このジャンブ大陸がわたしたちに本当の意味での幸福を与えてくれるのかというと、それは悲しみという苦をわたしたちが経験することにより、それを乗り越えよう、取り除こうとすると。そこで、布施功徳を積んだり、あるいは十の戒めを守ったりすると。ところが、他の三つの大陸は、前生の幸福の果報によって楽しんでいるだけであって、そこで功徳を積まないから、次の生は悲惨な目に遭うんだと。

つまり、今苦しいと感じている人、今悲しいと感じている人が、一概に不幸とはいえないんだよと。わたしも、まさにそれと同じ境地を経験しました。そして、この言葉こそ、仏教の本義であるなと、真実だなと考えています。

今ここに集っている人の中で、絶対的な幸福を経験している人は、それでよろしい。それは、もっともっと修行することにより、深い深い喜びを経験しなさい。逆に今ここで、悲しみや苦しみを経験してる人は、それはあなた方が、自分自身の心の本質を理解するための、ジャンプの土台であるということを認識し、そして先程述べた四つの預流支の実践によって、ぜひとも幸福になっていただきたいと思います。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。どんなに大金持ちであっても、どんなに権力を有していても、どんなに周りから称賛されていても、どんなに愛する対象と一緒に生活していたとしても、人は必ず死にます。そして、死を前にした場合、どんな大国の王でも、あるいは多くの者を支配している者でも、あるいはどんな大金持ちでも、その死に対しては、その権力やお金は一切無効です。

では、死を超えるためには何があるのかと。それは、四つの預流支しかありません。しっかりと、四つの預流支を実践していただきたいものです。



第二話 四預流支と五蘊無我



九一年二月二十八日　新東京本部

◉修習と成就

バケツに透明な水を入れる。そして、その透明な水に墨汁を一滴、二滴、三滴と落としていく。一体これは、どうなっていくだろうか。

この水の色は、薄い黒から徐々に徐々に濃い黒へと至っていく。逆に、ここに透明な水があり、その透明な水がバケツに入っていると。この透明な水に牛乳を一滴、二滴、三滴と入れていくと。一体これはどうなるだろうかと。薄い白から、徐々に徐々に濃い白へと移行していく。そして、これが修習であり、成就なのである。

もし、わたしたちが悪法を日々の糧とし、食らい、生活するならば、それはちょうど墨汁が透明な水に溶け込んでいくのと同じように、少しずつ少しずつ、その黒味を増し、そして気付いたときには、墨汁とほとんど変わらないぐらいの濃度の黒い色を呈している。

逆に、わたしたちが善法を牛乳と同じように一滴、二滴、三滴、つまり一回、二回、三回と修習を続けていくうちに、バケツの水は、徐々に徐々に牛乳と同じぐらい濃い白を呈するのと同じように、わたしたちの心も善法に完全に浸されることになる。

◉悪法を取り除くには

では、この悪法はどのようにしたら取り除くことができるのだろうかと。それは、ろ過する以外に方法がない。しかも、そのろ過する方法は、水分子を通し、それでいて墨汁の分子を通さないと、このようなものが存在し、そして、それによって漉すことができるならば、またもとの透明な水と、そして墨汁とに分かれることができるだろう。

つまり、純粋な心と、そして悪業とに分離できるはずである。このろ過

紙とは何かというと、これはわたしたちの微細な意識状態におけるザンゲであり、そして透明な水は、わたしたちの純粋な心を表わしている。もちろん、墨汁は悪業を表わしていることはいうまでもない。

この状態で、つまり透明な状態で、わたしたちが白い水になっていくこと。つまり、善法を何度も何度も繰り返し修行すること。これによってのみ、わたしたちは純粋に白、純粋に功徳の状態を顕現化することができるのである。

では、一体、悪法とはいかなるものがあるのだろうかと。それは、わたしたちの煩悩を増大させるものである。では、なぜ煩悩を増大させてはならないのだろうかと。

これは、わたしたちが、もし煩悩を増大させ、その煩悩に限りがあるならば、それは増大させたとしてもわたしたちに苦しみというものは、生起

しないはずである。しかし、煩悩には際限がない。そして、その際限ない煩悩なるがゆえに、わたしたちは苦しまなければならない。よって、煩悩を増大させるようなすべての行為、すべての言葉、そしてすべての心の働きを止滅するべきなのである。

では、善法とは何であろうか。これは、煩悩を弱め、少なくし、そして最終的には滅尽すると。そして、心を広大に、無辺に、そして深遠に、上と下のないぐらいの大きな心を作り上げていくこと、これが最高の善法である。

◉苦しみの因――五蘊における修習

では、煩悩を増大させるものには、一体何があるのだろうか。それは、「五蘊」における修習である。五蘊における修習とは何であろうかと。

まず、我が身、我なりと。この肉体を我と感じ、そしてその肉体に多大な期待と、多大な投資を行なうと。これがまず、第一に、わたしたちがなしてはならないことである。なぜならば、この色、肉体というものは、無常を根本とし、この無常を根本とするということは、わたしたちがそれにとらわれればとらわれるほど、この肉体が止滅するときに、大きな苦しみを味わわなければならないからである。

では、第二の悪魔、第二の悪業とは何であろうかと。これは感覚を増大させることである。

例えば、わたしたちが美しさに対して執着するならば、その反対の嫌悪も当然増大する。例えば、わたしたちが快楽に対して心を向けるなら、当然、その反対側の苦痛というものにも敏感になり、苦しまなければならない。例えば、わたしたちが素晴らしい音に対して執着をするならば、わた

したちの心を乱す音に対して、当然苦しまなければならない。
このような形で感覚を増大させること、イコール苦しみなのである。よって、仏教やヨーガの修行においては、制感、つまり感覚を制するプラティヤハラをね、最もいいステージの一つと、素晴らしいステージの一つに数え上げているわけである。

◉五蘊の統御を

では、イメージについては、一体何がいえるだろうかと。
このイメージは、わたしたちに肉体的悪業を積ませないで、いろんな経験をさしてくれる。例えば暴力のシーン、例えばセックスのシーン、例えばグルメのシーンと。これは、目で見る喜びという形で、この現代の日本では、大いに称賛をされている。

しかし、このけがれなるがゆえに、わたしたちは、心の傾向というものを一つの方向に向けられてしまう。それはちょうど、動物における学習と同じである。この動物における学習とは何かというと、ここに犬を用意してね、その犬に食事を出すと。そのとき必ずベルを鳴らすと。しまいには食事を出さなくても、ベルを鳴らすだけでよだれが出てくると。

これと同じように、例えば異性を見たら、心をお互いに磨き上げる対象として見るのではなく、性的な対象としか見れなくなると。例えば、お金イコール美しい衣服を買う、あるいはおいしい食べ物を食べるといったパターン的な、パターン化された心しか持てなくなってしまうと。これは表象のけがれなるがゆえに起きる現象である。よって、表象については十分に注意しなければならない。

では、四番目の行、意志はどうであろうか。この意志は、一見わたしした

ちを幸福にしてくれる。なぜならば、ものを達成するとき、そこには当然その人の願望というものが存在しているし、その願望を満足させることは、当然大きな利益をその人に一見与えるかのように見える。しかし、この意志も結局カルマの制約を受けているわけである。

よって、達成できること、あるいは達成できないことという二つの面が出てくる。達成できる面については、この意志は先程も述べた大変幸福をもたらしてくれるが、達成できないことに関しては、大いなる苦しみを与えてくれる。よって、行蘊、つまり意志から離れるべきなのである。

では、最後の意識、データはどうであろうかと。このデータは、一見、白でも黒でもない。しかし、このデータが、例えば意志と結び付き、例えば表象と結び付き、例えば感覚と結び付くことによって、あるいは肉体と結び付くことによって、多くの苦しみを生起させるわけである。

例えば、例を挙げるならば、決めたことを実行できないとき、それは挫折感であると。その挫折感は、苦しみの原因であるという教えがあったとしよう。このデータのみでは、わたしたちに苦しみも、あるいは楽しみも与えてくれない。しかし、このデータが強く根付いていると、例えば、何かを達成しなければならないとき、それができなかったときの苦しみといったら、それはもう想像を絶する苦しみである。

あるいは、Aという感覚は、大変わたしたちに素晴らしいフィーリングを与えてくれると。例えばそういうデータがあったとして、そのデータをもとにそれを実践すると。ところが、それが得られなかったとき、それはやはり心は大変大きな失望を味わうことになる。よって、この意識も統御する必要があるわけである。



जापान
NI DEVELOPMENT
TEMPLE RESTORATION
IN CO-OPERATION WITH
BUDDHIST FEDERATION
ENCEMENT DATE-5th SEPTEMBER 1990.

◉オウム真理教の考え方――現世を越えた価値観をもとに

ところが、ちまたの宗教や、あるいはものの考え方は、この現世をいかに楽しく生きるか、いかに楽に生きるかの法が説かれている。

もちろんオウム真理教においても現世の幸福というものに対するアプローチは当然行なっている。しかし、それは原則として仏陀釈迦牟尼の素晴らしい法、あるいはインド聖者の説いてきた素晴らしい法、あるいはわたし自体が体験した素晴らしい法がベースにあり、そのベースをもとに展開されているわけである。

よって、現世だけではなく、もう一つの、現世を越えた世界の価値観をもとに現世を分析しているから、その現世、例えば現世に対して成功したとしても、そこで没入することはないはずである。

ところが一般はそうではないと。そして、仮にその宗教により恩恵を受

けようものなら、それは大変な縁を作ってしまう。そして、大変な縁を作るがゆえに、そこから苦しみが増大する。苦しみが増大するがゆえに、その人は、より一層大きな不幸をしょわなければならなくなる。

例えば、例を挙げよう。あまり努力をしないで大学受験に合格したと。これは、これこれ宗教のお蔭であると。しかし、わたしはそこで問いたい。でも、あなたの目的は大学なのかと。結局大学に入れば、また多くの試験があり、そして卒業後、社会に通用するようなやはり知識が必要である。しかし、そこまで考えているわけではない。ポイント、ポイントを通過すればいいんだという、日和見的なね、思考がそこにはあると。

オウム真理教の教えはそうではなく、きちんと土台を固め、そして功徳を積み、思索力を増すと。ということは、例えば、そこで仮に徳によって合格したと、努力をしないで。としても、その人の知性は修行し続ける限

り増大するわけだから、アフターケアについても十分目的を達成することができるであろう。

そして、これから先の世の中は、もっともっと大きな揺れが起きてくるだろう。その大きな揺れが起きたとき、不動心を持ち、真理の実践ができるかどうか、そして自分自身を見失わないでいられるかどうかということは、これもすべて日々の皆さんの修行の結果といわざるを得ない。

◉絶対的な自由・幸福・歓喜への法

では、一体、何をなせばわたしたちは絶対的な自由・幸福・歓喜を味わい、そしてこの現世において楽を享受し、来世において安定を得、苦を完全に離脱することができるのであろうかと。それは、「四つの預流支」なのである。

つまり、しっかりとした設計図、図面ね、未来における図面、あるいは今生における図面を与えてくれる三宝に対して、信を持ち帰依をすることと。ここでいう三宝とは、オウム真理教では、シヴァ大神の化身である、あるいは諸々の仏陀の化生身である、グルと。第二番目は、その真理と、その法。そして第三番目は、その法に集っている者に対して、信や帰依を持つことである。

第二番目、これは記憶修習である。つまり、何を考えどうするのかということを、今まで自分自身で培ってきた考えにとらわれるのではなく、教義にのっとった考えをすることであると。そのためには、正記憶修習、つまり経典を何度も何度も読み、記憶することが必要である。この段階では、決して自分の考え方を入れてはならない。自分の考え方を入れれば、必ず心に乱れというものが生じるからである。

第三番目、これは、その真理のデータにのっとり考えることである。それは自己の苦しみについて考える、あるいは自己の行為について考える、自己の言葉について考える、自己の心について考える、あるいは周りの人の苦しみや、周りの人の痛みについて考えると。これが、第三番目の預流支である。

そして、第四番目の預流支は、それに基づき実践するということである。今までなしてきた、例えば黒法、つまり悪法については、きちんとそれをシャットアウトし、そして善法に切り替えていく作業、自分自身の身・口・意を完全にこの悪趣のデータから人間に移し替え、人間から天界へと移し替えていく作業、これが四番目の実践なのである。

第二話　四預流支と五蘊無我



◉五蘊を浄化するためのアプローチ

実は、オウム真理教には、真理学園という考え方があります。そして、信徒の皆さんには、いったんこの考え方は消えたかのように見えてるかもしれないけども、オウム真理教の研究スタッフは、着々とその研究を進め、例えば数学においては、まず代数と幾何に分け、その代数の部分は約二時間で一年間で通過できるというね、六百九十数時間で通過できるようなプログラムを今作っています。そして、これは、小学校から高校までの全体系の代数、つまり数を知らない子が、微分積分を解けるようなレベルになるまでのプログラムを作っていると。

これも先程述べた、要するに子供たちを楽にしたいと。つまり、不用なことを一切省き、そして楽々この現世の問題点を解決さしていきたいと考える現世の幸福に対するアプローチの一つです。

あるいは、先程述べた、表象、イメージのけがれに対して対抗するために、映画のカメラを買い、そしてアニメチームを作り、もう実際には七分三十秒の、アニメーションができ上がり、次には、『超越神力PART1・天耳通』という、これはなかなか面白い内容だけれども、このセル画もほとんどでき上がり、おそらく三月中にはね、この二本とも皆さんの前に見せることができるんじゃないかと思います。

あるいは、皆さんにもっと視覚、聴覚、嗅覚、これを使って、実際の死、あるいは死の世界というものを経験していただくために、「死と転生」というこれはオペレッタ、つまり音楽、そして舞踏、そして詞章、マントラ等をね、使った、これは広大なイニシエーションなんだけども、これを大阪を皮切りに、全国でまず五カ所やりたいと考えてます。

これらのことはすべて五蘊を悪法から離脱させ、善法に切り替えさせるた

めの手段である。もちろん、これは一つ一つのイベント、内容を見ていただいたらわかるとおり、すべて皆さんの納得できるようなね、ものとして提供することができるようになると思います。それは、これらすべてを使い、皆さんの魂を浄化し、向上させたいと考えているからです。

もう少し、ちょっと立ち入った話をするならば、オウム真理教の内部には、AFI、アストラル・フード・インスティテュートというのがあります。で、これによって例えば、乳酸菌を使った豆腐の開発だとかね、あるいは、きな粉を使ったようかんだとか、あるいはオウム食をドライにするだとかね。あるいは、豆乳を完全にイニシエーション化しちゃうだとか、そういう研究も進み、これも多分三月中には、形になるんじゃないかと考えています。

こういう研究、これはもちろん味覚を使い、皆さんの五蘊を浄化しよう

と考えているわけだけど、こういう研究を進めていくためには、皆さんのね、やはり協力と、そして意識の変化が必要です。そして、強い意志が必要です。

◉広大な真理の光のために

では、一体どういう意識の変化と強い意志が必要なのかと。

まず、意識の変化については、自分自身の問題点をもっと科学的に考え、そしてこういう問題点をどう解決したらいいのかというサットヴァのね、やはり心を絶えず持ち続けるということ。そして、他の宗教とオウム真理教とを比較し、いかにオウム真理教が純粋で、真面目で、科学的に法を実践しているかということをね、何度も何度も認識し、修習を繰り返すということ。その皆さんの帰依の心が必ずやこの世の中の、悪法をね、止滅す

る方向に向かうはずです。

また、強い意志が必要とは何かというと、今皆さんの周りにいる悪法によって苦しんでらっしゃる方々を、何としてでも救済しなきゃならないと。自分は今生のガティーカーラであると。ね。自分は必ず今生、在家において色界の四禅定の第一禅定、第二禅定を経験するぞと。最高のエクスタシーを経験するぞと。ね。そう考え、日々の生活を行なうこと。

これらのことをね、実践なされば、真理の光は広大となり、強くなり、そして、この日本を、そして地球を、そして太陽系を、宇宙全体を照らし出し、無明の闇をはらい、多くの魂をマハー・ニルヴァーナへと導くことができるようになるはずです。しっかりと頑張っていただきたいと思います。

第三話　苦しみを乗り越える四つの土台





九〇年十月二十七日　名古屋支部

◉多くの魂を利する——マハー・ニルヴァーナへ至る修行

チベットにパンチェン・ラマという菩薩がいた。このパンチェン・ラマは、アミターバ、つまり、今日本の仏教の主流であり、ほとんどの人が知っている、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏のアミターバ、つまり阿弥陀仏の化身、リインカネーション、トゥルクといわれている菩薩であった。

彼は中国人民解放軍の到来、その後の逮捕、そして拷問に耐え、片耳を失った。彼は、拷問を受けながら、他の人たちの苦しみが自分に来ますようにと、つまり、他のチベット人が苦しんでいるのを見て——もちろん自分も拷問を受けているわけだけれど——その苦しみがすべて自分に来ますようにと、それを拷問をかけている中国人に言ったそうだ。

そして、このような菩薩の行為、これを行なう魂は、いずれ覚者になる。必ず、マハーヤーナの覚者、大乗の覚者に至るためには、多くの魂の苦悩

をしょう、あるいは、多くの魂を利するプロセスが必要である。それはなぜであろうかと。

君たちも知ってのとおり、わたしたちの五蘊、つまりこの肉体・感覚・イメージ・意志、そして心のデータというものは、わたしたちを悪趣へと転生させる。あるいは、まあ、せいぜいが欲界の神、デーヴァに生まれ変わらせるためのデータしか存在していない。その欲界をぶち破り、色界、つまり梵天の世界、光音天の世界、浄天の世界、そしてそれを超えた色究竟天に至る世界、あるいはそういう形のある有の世界をぶち抜いて、無色世界に入り、マハー・ニルヴァーナに到達し、そしてすべての魂を利するということは、それだけ大変な修行であるということだ。

◉菩薩への道——激しいカルマ落とし

君たちも知ってのとおり、アパーヤージャハは罠にはめられ逮捕された。もちろん、彼が偉大なる菩薩であることは、いうまでもないことである。彼は、有能な弁護士でありながら、自己のプライドを満足させる職業を捨て、出家し、一切の報酬を受けず、信徒のため、そして内弟子のため、オウム真理教のために働いてきた菩薩である。それだけではなく、彼は信徒時代に数千万のお布施をし、戒律を守り、教学をし、典型的な修行者としての生き方をなした魂である。私は今、オウム真理教の中で、彼ほど素晴らしい菩薩の素質を持ち、未来においてマハーヤーナの覚者に至るかもしれないという魂を見たことがない。

菩薩には必ず苦難、自己を捨てる、そういう場面が設定される。特に、徳の高い、未来において覚者となっていかなければならない菩薩であれば

あるほど、難局を与えられる。そして、まさに今、彼はその渦中にあるといえる。諸君も知ってのとおり、出家してわずか一カ月でクンダリニー・ヨーガを成就し、そして今、マハー・ムドラー直前のアパーヤージャハである。当然、そのカルマの落ち方、あるいは、そのスピードから考えても、彼の環境が激変し、カルマが落とされることはいうまでもない。そして、これは彼の修行において、すべてわたしが予言をしていたことである。

わたしは、彼に対しては二つの予言を行なった。アパーヤージャハが成就するために二つのシチュエーションがあるだろうと。一つは、一対弁護士会全体というシチュエーションと。これは君たちも知ってのとおり、弁護士会は坂本事件以来、偏見によりオウム真理教を見、そしてアパーヤージャハが孤立していたことはいうまでもない。それから、もう一つの予言は、孤立無援となるだろうと。これは、今の彼の状況である。この二つに

対して、心の乱れが全く生じず、心が無色の世界に統一された状態で彼が瞑想を続けるならば、速やかにマハー・ムドラーの達成が起きるであろうという予言を、私はこれは六月に行なった。そして、それが十月に現象化したと。

◉楽しみの背景にあるもの

わたしたちを構成しているもの、この五蘊——この肉体・感覚・イメージ・意志・意識——というものは「苦蘊（くうん）」ともいわれる。苦蘊とは何かというと、それは苦しみの集積、苦しみの集合体であるということである。では一体、これがなぜ苦しみの集合体なのかというと、わたしたちの心が楽を求め、不善行をなし、そしてその集積の結果得た身体だからであるといわれている。もちろん、この人間の世界は、地獄・餓鬼・動物、あるい

は地獄・動物・餓鬼――これはどちらでもいいけど――人間という下から第四位の世界で、若干の楽しみのある世界である。しかし、その背景には、苦しみの生の連続である三悪趣に流転する条件を持ち続けているといえよう。

ところが、どうだ君たち。例えば、大きな借金をした者が、借金をし続け、生活を続けたとしようじゃないか。その人の生活が、たとえその瞬間が楽だとしても、その人の要素には、未来において相当に貧困という苦しみを味わわなければならない条件はそろっていると思うか、そろっていないと思うか。どうだ。どうだ。そろっているかそろっていないか。そうだな、そろっている。なぜ、そろっているかと。それは、楽しみの背景に、どんどんどんどん借金は蓄積されると。そして、これが一般の生き方。仏教語でいう凡夫というのは、一般の人という意味である。決して、蔑視（べっし）

した言葉ではない。

では、修行に入り、その借金を返し出した段階において、その人の生活は貧しいか貧しくないか、どうだ。当然、貧しくなるだろう。するとだ、その貧しさを端から見て、あの人は哀れだといった、ね、そういう言葉を吐いた者がいたとするならば、それは、正しいものの見方をしているか、していないか。そうだね。つまり、その人は自己の苦蘊の借金の部分を一生懸命返している。どうだ、借金というものは、いつかはゼロになる。どうだ。ゼロになった段階で働き続けたら、どうなると思うか。そこには、功徳の集積しかない。そして、それが覚者だ。これが大乗の覚者なんだよ。ヒナヤーナにおける供養値魂(くようちこん)と覚者の違いは、そこにあります。

第三話　苦しみを乗り越える四つの土台



◉真理——限りない輪廻の中で

オウム真理教は真理である。この世の中の、楽のために手段を選ばないという生き方を否定している。それは、オウム真理教の教えの背景にあるものが、生まれ、死にという、この短いタイムスケールを検討した結果得られた教えではなく、生まれる前から、生まれ、そして生き、そして死に、死後の世界と、そして生まれ変わるという、輪廻転生(りんねてんしょう)という長いタイムスケールを背景としたものであるからである。そして、この生まれ、死ぬというタイムスケールの中に存在するものは、本質的には苦しみしか存在しない。

よく、情というものは大切であるといわれる。じゃあだ、例えば、ここに愛する者がいたとしよう。その愛する者をひたすら愛し続け、どんどん深みにはまり、そして一方が死んだと。このときには苦しみが残るか、楽

しみが残るか。苦しみが残ろう。では次に、相手を徹底的に愛したと。その相手が他の異性に心が奪われ、お付き合いをしたと。これについてはどうだ。では、異性の美しいスタイル、あるいは顔に愛着していたとしようじゃないか。あるいは、精神的なものにひかれていたとしよう。例えば、その人がやけどを負ったり、あるいは精神的に狂いが出て、例えば精神病になったと。これは、苦しみか、喜びか。

ということは、この世の中における、例えば恋愛、愛情のパターンにおいて、楽というものが生起するかしないか。どうだ。いかなる形のものにおいても、必ず変化する。その変化のときには、その人は苦しまなければならない。これがオウム真理教の真理、仏典に説かれている教えの根本にあるものである。

ところが、一般的にはそれを見ないように、聞かないように、感じない

ように、徹底的に叩き込まれている。ということは、現代の情報の流れとオウム真理教の教えというものは、同じ流れであろうか、違う流れであろうか。ということは、社会的に叩かれるべきであろうか、叩かれないべきであろうかと。

しかし、逆の見方をすれば、これが聖（せい）である。これが聖（ひじり）である。これが聖（ひじり）の教えであると。しかも、それは、わたしはまだ三乗の教えの中のヒナヤーナの原則的な教えしか、今ここで話していない。ということは、この上に立脚する崇高なマハーヤーナの教え、あるいはタントラヤーナの教え、この教えを一般の人が理解できるだろうかと。

◉久遠の至宝――法の実践

君たちが、今のオウム真理教の流れにおいて、苦しめば苦しむほど君た

ちの心のけがれというものは浄化されるはずである。その状態において信を持てば持つほど、君たちの心というものは、苦しみに対して適応できる心の状態を作っていくはずである。

例えば、ここにボクサーがいたとしようじゃないか。このボクサーは、典型的なフットワークの練習しかしなかったとしよう。このボクサーは本番でそれを使うことができるだろうか。どうだ。そのパターンに合った場合のみ、例えばジャブを出し、ストレートを出し、使うことができる。しかし、例えば相手がいろんなフットワークを使い、いろんな攻撃をしてきたならば、それに対応はできないはずである。そうだね。

それと同じように、菩薩の修行というものは、いろいろな苦しみに対して対応し、その苦しみを一つ一つ乗り越えていくことが修行である。そして、それを達成するためには、四つの土台、四つの修行を貫徹するための

土台の実践を行なえばよろしい。それはまず、シヴァ大神・覚者・グルに対して、あるいは師に対して信を持つことである。

次に、その魂に対して、できるだけ多く接し、教えを聴くということである。現代においては説法テープ、あるいは『マハーヤーナ』等の本があるから、あるいは説法会があるから、それを利用し、何度も何度も耳に刻み込み、今自分の持っている現世的な幻影を打ち砕くデータを入れることである。

そして、第三番目には、その真理によってね、一生懸命考えてみると。例えば、ここに生き物がいて、殺したと。わたしはこの生き物によって、害を受けないと。しかし、それによってわたしの肉体を構成している苦しみの集合体というものは、少しは減るんだろうかと考えなさい。当然、減らないはずである。

　例えば、おなかがいっぱいなのにいろんなものを食べると。わたしは、これを食べることによって、せっかく修行によって培った火元素を弱めているんじゃないかと考えなさい。このような形で、真理によって、教学によって考える。これが三番目の、最終の解脱をしていくための土台である。
　そして四番目は、考えたならば、それを実際に実践する。信徒の場合、六つの極限を徹底的に行なうことによって、早くクンダリニー・ヨーガまでの成就を行なう。六つの徹底はわかっているね。布施・持戒・忍辱（にんにく）・精進・禅定（ぜんじょう）・智慧（ちえ）という大乗仏教の典型的な六つの修行である。そして、その六つの修行を支えるものは何かといったら、先程言った四つの、まず信を持つこと、多くの法を聴くこと、その法によってものを考えること、そしてそれを実践することの、この四つ。これを土台としなさいと。
　そして、それをなすならば、いかなる状況に追い込まれようとも、外的

条件の制約を受けず、自由な心、幸福な心、歓喜の心を持ち続けることができるはずである。仏教の教えの根本は、外的条件に対して一切心を乱さないということが、その教えの真髄である。君たちは、もし、今までのいろんな事象に対して心が乱れたのなら、それはザンゲする必要がある。そして、今日、この瞬間を境に、もう一度教学をやり直し、もう一度考えることから始め、そして法の実践を行ないなさい。いいね。



第四話　大いなる真理勝者への道



九〇年十一月十二日　大阪支部

◉偉大な修行の到達点――大乗のステージ

自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする。このステージは、大乗のステージといわれています。正確な言い方をするならば、ヒナヤーナというのは、劣った乗、劣った乗り物。マハーヤーナというのは、多くの者をそこへ乗せて最終地点に到達する乗ということもできるし、あるいは偉大な乗、偉大な修行の到達点ということができます。

今回、皆さんも知ってのとおり、アパーヤージャハに始まり、ティローパ、マルパ、ケイマ、プンナと、逮捕者が続出しました。彼らは今、警察の署の中で極限の状態に追い込まれ、素晴らしい、苦しみをしょった修行をしていることでしょう。

あまり皆さんになじみがないかもしれないが、中国にパンチェン・ラマという人がいます。なぜ、わたしがチベット人であるパンチェン・ラマを

「中国に」と言ったかというと、彼は中国軍のチベット侵攻以来、捕虜として捕まり、そして、他のチベット人が多くの拷問を受け、そのとき自分自身も拷問を受けていた。そして、その拷問の中で、他の人には拷問を振るわないでくださいと。すべて自分のもとに、その苦しみが来てくださいと。わたしがすべてしょいましょうと。すると、来世地獄へ落ちるカルマを持っている中国人民解放軍の者は、パンチェン・ラマをよりいっそう痛め付け、そして、ある拷問によって完全に片耳を失ってしまったと。

この菩薩（ぼさつ）の修行は、まず、ヒナヤーナ、劣った修行の到達した者、ある段階まで悟りを開いた者が、次のステップとして修行するマハーヤーナ、偉大なる修行者の一つの象徴的な出来事であると考えています。

ところで、このパンチェン・ラマは、アミターバ、つまり阿弥陀真理勝者（あみだしんりしょうしゃ）の生まれ変わりであるともいわれています。

◉無常の苦しみを取り除く

今日は、まあ、新しい人も来ているだろうから、少し教養の質を下げて話すとね、例えば、この「オウム」という言葉、これは「ア」「ウ」「ム」という三文字で形成されていると。で、ア音は創造、つまり、クリエイトの状態であると。ウ音は維持、つまりコンティニューの意味合いがあると。ム音は、これは破壊、デストロイの意味合いがあると。そしてこれは、この世、生きていることとすべてが苦しみであるということの意味合いを統合して作られた最高のマントラ、これが「オウム」である。

では、この世はなぜ苦しみなのかといったら――今日はゆっくりとしたテンポで今話しているけれども、皆さんも、わたしのこのテンポについて一緒に考えようじゃないか――ここに大金持ちがいて、その大金持ちは大きな家と愛する家族があったとしようじゃないか。その大金持ちが死ぬと

第四話　大いなる真理勝者への道



きに、もし妻を愛していたら、そして自分のお金に対して執着があったら、子供に対する愛着が強ければ強いほど、喜びを持って死ぬことができるだろうか。それとも、苦しみを持って死ぬことができるだろうか。どうだ、君たち。そこに存在するのは苦しかない。

では、ここに大金持ちがいて、途中で事業に失敗し、破産したと。あるいは、妻が他の異性とお付き合いをするようになったと。あるいは、子供が大きくなって、自分に対して反発するようになると。これは喜びだろうか、苦しみだろうか。どうだ、君たち。そうだね。

では、ここに愛する夫がいる、あるいは妻がいて、その者の美しさに対して執着し、結婚したと。ところが、その者が大やけどを負ったと。つまり、その段階で美しさが消えたと。これは喜びだろうか、苦しみだろうか。苦しみだね。

ということは、この世の中を形成しているものすべての背景には、必ず苦しみがあるんだということが理解できるだろう。どうだ、君たち。もちろん、輪廻転生を自在になすことのできる菩薩のステージ、例えば先程言ったパンチェン・ラマ、あるいはダライ・ラマ、あるいはカール・リンポチェ、ね、まあ、これはチベットの僧。あるいは、もう今は亡きティローパ、あるいはナローパ、これはインド密教の修行者。あるいは、ナーガールジュナね、これは仏教の成就者と。あるいは、まあ皆さんもよく知っている覚者釈迦牟尼、サーリプッタ、マハーモッガラーナ、アヌルッダ、ケーマー、ウッパラヴァンナー、ね、これは原始仏教の成就者です――というような者達は、その無常を超えた心の働きによって、自由に転生をすることができるから、そこでの無常性は止滅します。つまり、消え失せる。

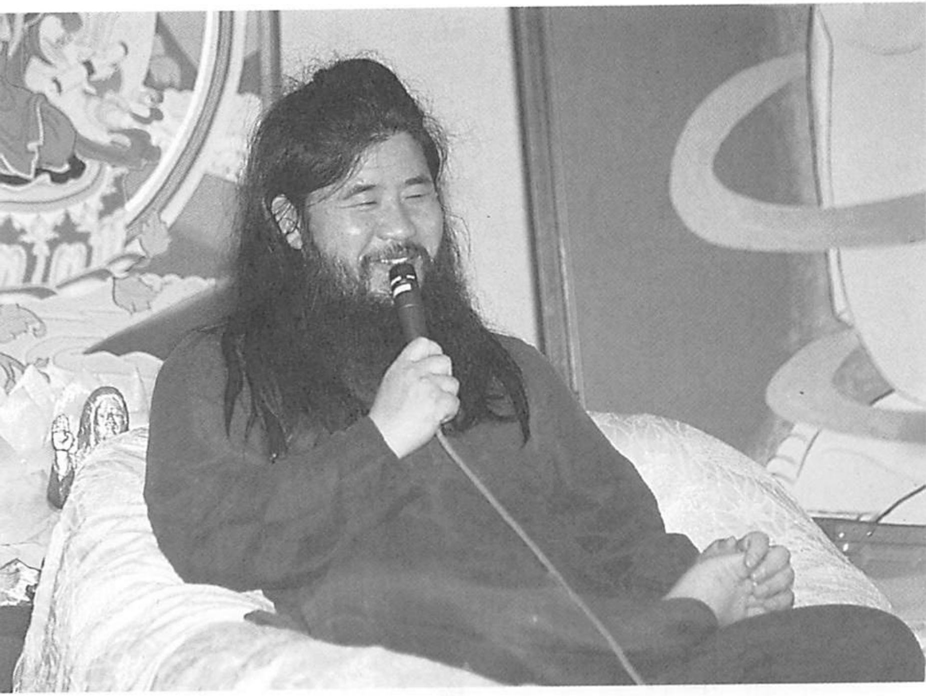
もともと仏教の考え方には、いかに、まずその無常の苦しみを生きてい

る間に取り除くかという修行があります。これはまあ、皆さんが今行なっている六つの徹底した修行、六つの極限、それから、もう少しステージが進んでくると十四の徹底という特別な修行があるわけだけど、十四の徹底、あるいは七科三十七道品といわれているヒナヤーナ仏教における徹底と。こういったものは、わたしたちの無智からくる、この世を常と見る、常と見る部分を完全に止めてしまうという修行なわけです。そして、その上に、先程言った六つの極限や十四の徹底といったようなものがのっかってきます。

◉菩薩の種子を身に付ける

実は今回、マハー・ケイマについては、逮捕される理由がない状態で逮捕されました。これはどういうことかというと、わたしとマハー・ケイマ

第四話　大いなる真理勝者への道



は、十月二十六日に検察庁に任意で出頭したわけだけど、そのときわたしに代わって、つまりわたしの目が見えないものだから、それに代わって彼女がサインをして——まあ、検事の要請でだよ——提出したと。ところが、それが彼女の逮捕理由になっている。つまり、これは明らかにマハー・ケイマを逮捕しようと、どういうことがあっても逮捕しなきゃならないんだという意図のもとに逮捕された出来事です。そして、これが権力というものです。

わたしは、『イニシエーション』あるいは『マハーヤーナ』等で、オウム真理教を弾圧、これはもうちょっと後、つまり九一年、九二年くらいであると話しているそうだが、必ず来ますよと。で、その前には何が起こるかというと、まず、いろんなスキャンダルという名のもとにオウム真理教は叩かれ、その後に弾圧されますよと。まさに今回の国土利用法、あるい

は公正証書原本不実記載という形式犯と呼ばれる軽微な容疑を盾に、国家権力が強制捜査、そして不当逮捕といったようなね、出来事をなしたこの現象は、予言どおりであると言わざるを得ません。

実は、マハー・ケイマが逮捕される三日前、わたしは、ケイマ、お前は次は逮捕されるから、とにかくこういうことに注意して修行しなさいと。あるいは、こういう心の持ち方をしなさいと予言しました。マハー・ケイマに、逮捕は嫌ですかと聞いたら、できるならばない方がいいと。いや、わたしは、あなたの逮捕というのはあった方がいいと考えています。なぜならば、あなたは徳があるし、おそらく天界へ生まれ変わるだろう。でも、あなたは天へ生まれ変わるより、今生で菩薩の種子を身につけなければならないんだと。だとするならば、堂々と、アパーヤージャハ、ティローパ、マルパの真実の証明をしてきなさいと。おそらく、権力にとってあなたは

不都合な人間になるだろうから、逮捕するでしょうと——案の定逮捕されたと。

◉真理勝者へ至る道

ここにいる信徒の皆さんは、警察権力、あるいは国家権力というものに対して、できるだけかかわりたくないと考えているかもしれない。しかし、わたしは権力よりも、閻魔(えんま)様の方が怖い。わたしは権力よりも、法に背いた生き方をし、真理の実践ができなくなることの方が怖い。わたしは権力よりも、自分の心の本性に到達できないような人生観の持ち主になることの方が怖い。

なぜならば、権力というものは、この世に生を受け、死んでいく間の幻影の一つにすぎない。しかし、心の本性の道を外すということは、あるい

は偉大なる菩薩の道の、この道のりを途中で放棄するということは、大きな自己の魂の流れにおいて、あるいは多くの衆生(しゅじょう)を済度(さいど)する――まあ、現代語でいうならば、救済する――という意味において、自分自身が最終的に大乗、タントラ乗のディアーナ・ブッダ、つまり大いなる真理勝者として完成する道筋を放棄することになるから、それは妥協できない。

　わたしはマスコミで、わたし自体も一年以内の逮捕があるかもしれないという話をしている。この逮捕があったにしろ、なかったにしろ、そんなことはどうでもいいことである。ただ、わたしがなさなければならないことは、そしてわたしの出家した弟子たちがなさなければならないことは、菩薩としてきちんと生きること。そして、来世、堂々と獅子(しし)のように立ち、自分の思った転生をすることが今生の修行課題なんだということを認識し、確信して、生きていきたいと考えることである。

信徒の立場だと、いろんな執着があり、苦しいかもしれない。しかし、あなた方は類い稀な徳によってオウム真理教と出会い、類い稀なわたしとの縁によって、ここに集い、そして真理の実践をするという、今、チャンスに恵まれている。このチャンスを生かし――まあ、今生は在家かもしれない。しかし――未来際において必ずや出家し、本当の意味での真理を自分自身の中に体得し、そして、その自分自身の中に体得した絶対的真理が心のすべてを包含し、あなた方自体が覚者になり、最終的にはディアーナ・ブッダ、つまり大いなる真理勝者になる道筋を、今、歩いているんだという確信の持てる人、あるいは確信を持とうとしている人にとっては、今生人間として生を受けた価値が、百倍、千倍、いや一億倍、もっとそれよりも大きな価値のある生だと言わざるを得ません。

それはなぜかというと、この、人間の肉体というもの、あるいは感覚と



いうものは、あるいはイメージというものは、あるいは意志というものは、そしてわたしたちの輪廻転生と最も深くかかわっている、深い深い意識というものは、苦しみの集積です。その苦しみの集積の背景にあるものは、先程言った無常です。もし、この無常を超えるデータがどんどん入り、そして無常をよしとする幻影と、無常を超える意識とがぶつかり合い、無常をよしとする幻影が完全に破壊されるならば、そのとき完全にその人の五蘊は崩壊し、本当の意味での覚者として生まれ変わることができ、そのときには苦楽を超越した絶対的平安の状態に入るからです。

マハー・ケイマ正大師は、さすがに正大師のステージに到達するだけあり、逮捕されたときもね、記者団ににこにこと笑って逮捕されたそうです。来世三悪趣へ生まれ変わるだろう今の警察官が、来世菩薩として生まれ変わるだろう魂を何人も逮捕し、取り調べたとしても、それは意識のレベル

においてとうていかなうものではない。

◉大いなる誓い――真理の種を育む

あなた方は類い稀な功徳によって、今オウム真理教の信徒として生きている。その自分自身の信徒としての自覚をもっと強く持つことにより、この逆境の中、ひたすら六つの極限を実践し、そして、早く覚者の境地に至り、すべての魂の苦しみを体感し、早く大いなる真理勝者に生まれ変わっていただきたいと思います。

よく、オウムの教義は難しいといわれる。それは、難しいでしょうと。なぜならば、人間を超え、阿修羅を超え、天を超え、そして梵天界を超え、光音天を超え、色究竟天を超え、空無辺の境地を超え、識無辺の境地を超え、有所無処の境地を超え、そして非想非非想の境地を超え、マハー・ニ

ルヴァーナの境地に到達する、それだけの教えがあるわけだから、それは、もし難しくなければ、逆におかしいとわたしは考えます。このどの部分であなた方が安住するかにより、あなた方の今生の修行の狙い、修行に費やす時間、あるいは徳の積み方、あるいは教学の仕方というものが決まってくるでしょう。

この世は無常です。人は死にます。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。人は死ぬんだ。必ず死ぬんだ。絶対死ぬんだ。死は避けられない。では死の前に何をなせばいいのか。それは、無常を超えるための教学、教学に基づいて考え、そして実践すること。つまり、四つの預流支であるということを今日の説法の最後に付け加え、もう一度自分の心に、今真理を実践しているんだ、その真理の種を何とか芽にし、若木にし、大木にしていきたいという大いなる望み、大いなる誓いを立てていただきたいと思います。

第五話　死に対してどう生きるか





九〇年十一月十八日　福岡支部

◉無智なるがゆえの宗教弾圧

今日、十一時過ぎですね、第二回目の強制捜査が、富士サティアンビル、それから本部道場、それから杉並道場、宮前、東京本部道場、それから上町、それから清流精舎(しょうじゃ)に入りました。で、まさにこれは、熊本県警の無智なるがゆえの、オウム真理教に対する宗教弾圧といわざるを得ません。

もともとオウム真理教の教義というものは、わたしたちが生まれ、そして死んでいくという過程を、いかに合理的に、そして最も有効な生き方をするかという教えの総大成、これがオウム真理教です。もちろん、このオウム真理教の教えは、あなた方が実践しなければ、単に絵に描(か)いた餅(もち)にすぎない。

◉死――バルドーでの救済

昨日、この福岡支部道場の担当であるタントラシァーキニーと電話で話した際、彼女が山口から福岡へ帰る途中、彼女の車の近くを走っていた車が犬をはねたと。そして、その犬を、犬の死をじっと見守って、マントラを唱えてあげたという話を聞きました。

なぜ犬がはねられたのか、なぜその場にタントラシァーキニーがいたのかと。わたしはそれに対して、それはシヴァ大神の祝福であると。なぜならば、タントラシァーキニーに、死というものを目前に見ることによって、人生の生き方というものが変わるように示唆を与えてくださったんじゃないかなという話をしました。

実は、一昨日、信徒の女性が不慮の事故で死にました。それはどういうことかというと、ある行法を風呂の中でやっていてね、ちょっと夫である

方がガラスを押した際に、そのガラスが割れて、そのガラスがわき腹に刺さり、そして動脈を切り、そのまま死んでしまったと。

で、その女性の信徒は、今までイニシエーション、それから瞑想、それから功徳といったこの三つを積んでいた在家の信徒です。当然、縁の深かったサクラー正悟師、それから、もちろん根本グルであるわたしのもとに、その魂は来ました。どういう現象が起きたかというと、まあ、サクラー正悟師の場合は、アナハタ・チァクラがすごく痛くて痛くてたまらなかったと。わたしの場合は、苦しくて苦しくてたまらない状態であると。で、実は、前回、バルドーのイニシエーションを受けていていた彼女は、もちろんそのとき、その状態が第一番目の空の状態――つまり、死後到来するシパ・バルドーという中間状態があるわけだけれど――その空の状態であるということを、彼女自身認識したみたいです。しかし、自分自身の幻影、

あるいは殺されたかのように感じた恨み、この辺で彼女の心は相当苦しんでいたと。

で、相談を受けたわたしは、即、ポアの瞑想に入りました。そして、そうだね、十分間ぐらい、彼女に関していろいろなアドバイスを、アストラル次元を通じて、つまり中間状態を通じて指導しました。すると、サクラー正悟師の胸のつかえが切れ、そしてわたしの胸の苦しみが切れ、それから、結果的に死なせてしまったご主人の後悔の念というものがすっきりしたというかね、そういう状態になったと。で、彼女は最も阿修羅に近い人間の世界に転生するということで中間状態を終わりました。

◉二つの死——真理の実践者の場合

では、なぜ彼女は中間状態をスムーズにクリアできたかというと、今ま

でオウム真理教の教えというものをしっかりと学び、実践し、功徳を積んでいたということです。これだけ叩かれながらついてきている信徒、これだけ叩かれながら、一生懸命真理を実践していた信徒。もちろん、信があるかないかわからないような信徒の場合は、そういう中間状態に入ったら苦しまなきゃならない。それは仕方のないことだ。しかし、彼女のようにしっかりと修行した者は、必ずグルがそこへ登場し、そして済度することになっています。そして、その結果として、そのご主人は出家したいという気持ちが固まってきているということです。

同じ例が、二例ぐらいある。その第一の例は、これは肝臓癌（がん）で亡くなったある信徒さんだけれどもね、その人は、とにかく極限の布施をなさり、そして必死にAHI（アストラル・ホスピタル・インスティテュート）で、決意如意足（にょいそく）という特殊な瞑想があるわけだけど、それを実践し、それから

人工トゥモを行なうことによって、肝臓の癌を完全に殺してしまったと。そして、肝臓の癌が消えた瞬間に亡くなられた。いや、正確に言うと、意識不明になったと。で、わたしがそこへ行き、そして意識を呼び戻しました。で、一日ぐらい――半日ぐらいかな――意識があって、それから亡くなられた。それと同時にわたしも意識がアストラルへ入り、そして彼の場合は、期間的には信徒として短かったけど、極限の布施、極限の修行という効果がね――これは三カ月ぐらい集中的に行なったわけだけど――効を奏して、阿修羅の世界へ生まれ変わったと。

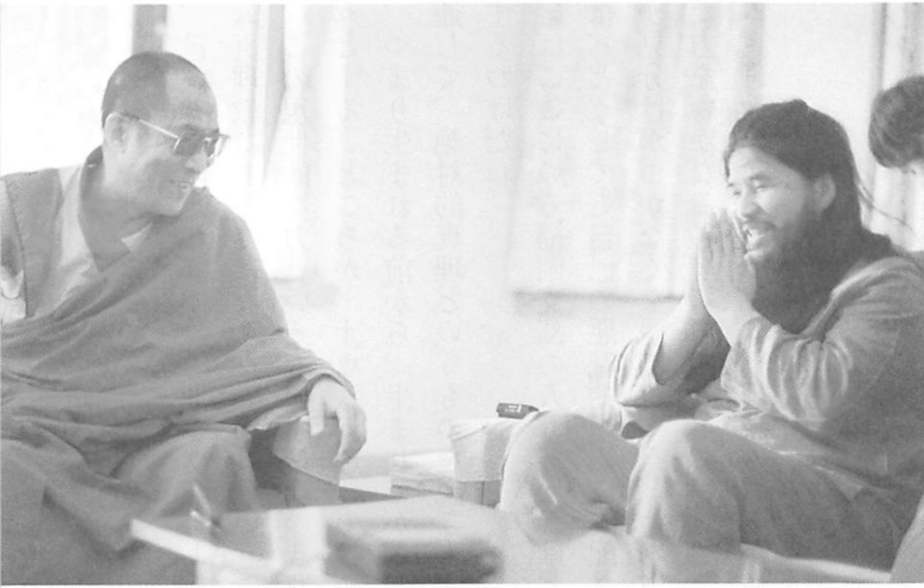
それから、もう一つは、これはニューヨークの信徒さん。ニューヨークの信徒さんのお母さんが癌であったと。で、その癌のお母さんが非常に苦しんでいた。で、死なすこともできないと。それから、苦しみから抜け出すこともできないと。これは、今ニューヨークにいるマハーカッチャーヤ

ナ師がわたしに連絡を取ってきた。では、とにかく布施をさせなさいと。そして、そのニューヨークの信徒さんがオウム真理教に布施をして、その布施がわたしに届いた瞬間に、お母さんは意識がなくなり、死んだと。これは要するに、その苦しみのカルマが切れ、ポアされたわけだね。

◉絶対的な自由・幸福・歓喜への導き手

オウム真理教がこれだけ叩かれながら存在している理由というのは、その神秘性にあります。では、なぜオウム真理教が神秘的なのかというと、それはひたすら修行し、ひたすら教学をし、真理とは何であるかと、そしてどのような生き方、どのような実践をすれば生と死を超えてすべてを見通す力が生じるのかということを理解できる、日本におけるただ一つの宗教だからである。

第五話　死に対してどう生きるか



ということは、言い方を換えれば、この世を支配しようとしている悪魔にとって、オウム真理教はあってはならない宗教ということになる。なぜならば、悪魔は、この現世的な力というものを最高の武器として、わたしたちを支配しようとする。ところが、オウム真理教の教えは、生まれる前、死んだ後という、つまり生まれる前から、生まれてから、死んでからという三つの流れを通して、絶対的真理というものを説きます。ということは、悪魔の教えと反するわけだね。

ところが、例えばここにいる福岡支部の人もそうだけど、心に悪魔の巣食っている人達は、どうしても自己の悪魔的煩悩に支配され、何が真実で何が真実でないか見分けがつかなくなってしまうと。本当は、あなた方の目の前に、あなた方をいかなる環境であろうと、絶対的な自由・幸福・歓喜に導く、オウム真理教の教え、オウム真理教の教えがあるにかかわらず、

それに目が行かないと。実践できなくなってしまうと。

今回の、例えば逮捕劇の背景にあるものは何かといったら、アパーヤージャハ、ケイマ、プンナ、ティローパ、マルパ、いずれも菩薩（ぼさつ）の修行をしていきなさいよとわたしは言っています。この菩薩の修行とは何かというと、たとえ罠（わな）にはめられても教団の出家したサマナのために自分自身を捨てると。無実の罪を着せられても自分自身を犠牲にして真理を実践すると。それをなすことによって、多くの魂が利されるとね。そして、そういう指導的立場にある菩薩を大量に抱えているオウム真理教の信徒である、今の福岡支部の皆さんは、一体何を考え、どのようにして生きなければならないか、あるいは何を人生の根本とし、どう実践するのかということは、やはり今日の「ポアの集い」を境に考える必要があると、わたしは考えます。

◉五蘊——苦しみの集まり

覚者釈迦牟尼(しゃかむに)の教えの中に、こういう言葉がある。わたしたちのすべてを形成している五つの集まり、つまり五蘊(ごうん)というものは、苦の集まりである。だから、この五蘊は苦蘊(くうん)と言い換えることができると。

それは何かというと、例えば、この肉体は必ず生まれ、そして若いときはいいけれども、老い、死んでいくと。これは苦しみじゃないかと。感覚はどうかというと、喜びが強ければ強いほど、快楽が強ければ強いほど、苦痛も強いじゃないかと。あるいは、快楽を求めた場合、それはある段階で飽き、そしてそれ以上の快楽というものを求め続け、結局飽くことなく感覚を追求しなければならない。それと同時に、反対側の感覚である苦痛というものは増大するじゃないかと。イメージはどうかというと、選択していいイメージだけを入れるということはできないと。当然、自己を苦し

めるイメージもどんどんどんどん入れなければならない。よって、このイメージも苦しみじゃないかと。意志はどうかというと、確かに自己の思ったとおり人生が動いているときはいい。しかし、そうじゃないときは苦しみじゃないかと。よって、この意志も苦しみであると。では、本質的な意識はどうかというと、否定的想念あるいは破壊的想念という言葉があるとおり、わたしたちの心の中には多くの苦しみを生起させる、苦しみを生み出すデータが入っている。ということは、この肉体・感覚・それからイメージ・意志・意識という五つの集まりは、すべて苦しみであると。

　この苦しみを超越するためにはどうしたらいいのか。そのためには、まず苦しみの本質である楽を求める心――しかもそれは、間違った考え方による楽を求める心――これを止め、滅するしかないんだよと。喜悦することによって、喜びを貪(むさぼ)ることによって苦しむんだよと。よって、喜びを求

めるのではなく、今生じている苦しみを静めていくこと、これのみが本当の意味でのわたしたちを絶対的平安、安らぎの境地に導くんだよと。

◉死に対してどう生きるか

では、そのためにはどういう実践があるのかといったら、それは四つの預流(よる)から等覚に至る道があるじゃないかと。それは何だと。まず、根本グルであるシヴァ大神、あるいは諸々の覚者、あるいはグルに対して絶対的な信を持つということ。そして、『マハーヤーナ』あるいは説法テープ等を何度も何度も熟読、あるいは何度も何度も聴くということ。そして、それを聴いたら、次はそれについて考えると。自分の身の行ないについて、言葉について、心の働きについて考えてみると。そして最終的には、第四番目として、それを実践すると。この四つを実践してこそ、つまり四つの

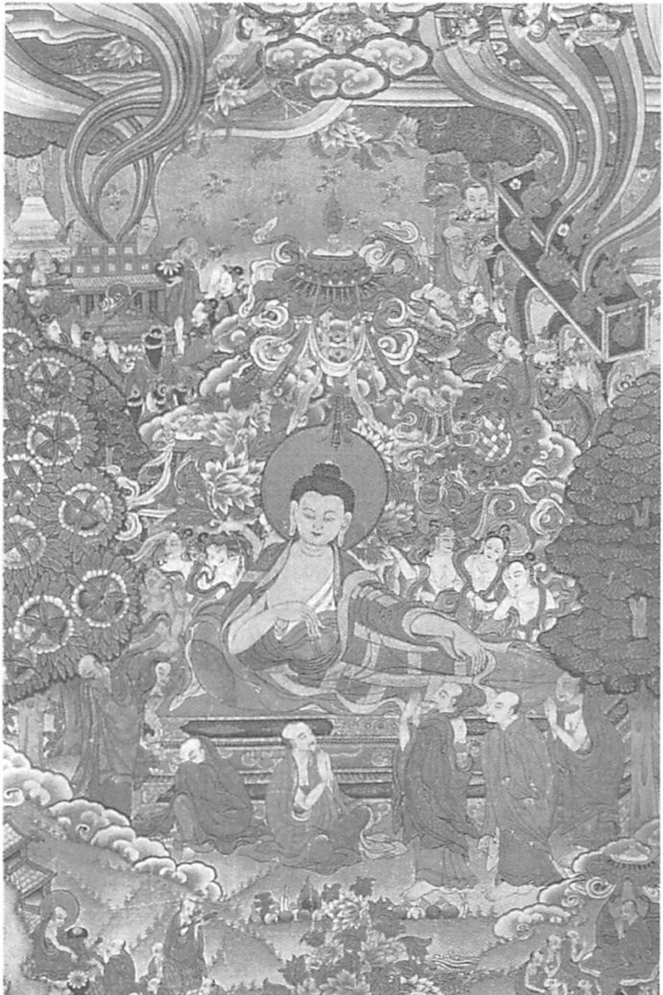
預流支を実践してこそ、本当の意味での聖なる流れに入り、そしてマハー・ニルヴァーナへと到達するんだと。
そしてね、あなた方は信徒として毎月、これから書店に並ばない『南伝大蔵経』の経典や、あるいは講話集、こういうものをどんどん読むことができる。そして支部に来れば、出家した弟子がいて、いろいろ相談にのってくれると。
素晴らしい条件があるにかかわらず、その条件を見ず、現世的な煩悩に巻き込まれ、そして先程も言ったとおり、気付いたときは死んでしまう。そこで後悔すると。わたしはオウム真理教にいたと。しかし、実践しなかった。実践しないがために、わたしは今、苦しまなければならない。一体、このときどうしたらいいんだと。今、例えば、チョンイ・バルドーだけれども、どうしたらいいんだと。どの光を選択したらいいんだと。どのヴィ

ジョンを選択したらいいんだと。あるいは、どういう瞑想をしたらいいんだと、このときに。どうだろうね、一体。この中で何人の者が、それを正確に選択し、そして正確に自分に合った輪廻転生をすることができるのだろうか。

わたしは、あなた方に絶対的な利益を与えるために、今ここにいます。その絶対的利益とは何かといったら、要はその総集編である死に対してどう生きたらいいかと。どうそれを乗り越えたらいいかという、日本でただ一人あなた方に正しい道を指し示すことのできる者だと確信を持っております。

◉瞑想・功徳・教学――高い世界へ生まれ変わるために

よく、こういう話がある。他の教団ではもっと楽な修行があると。オウ



ム真理教の修行はつらいと。でも、どうですか。よく考えてみようね。例えば、小学校のかけ算、割り算ができないで、大学の微分・積分ができるかと。あるいは、キーボードの使い方がわからないでワープロが打てるかと。あるいは、音楽のドレミファソラシドを知らないで楽器を弾くことができるかというのと同じように、あなた方が、もし死ぬ前の段階で、地獄に至る道、餓鬼に至る道、動物へ至る道を完全に捨断し、人間・阿修羅・天界の意識状態にあると。あるいは人間・阿修羅・天界の、実際に力が生じているという状態を持って初めて、あなた方は来世、人間・阿修羅・天界へ転生することができます。

つまり、ハードな修行をし、ある程度の神秘的な力があって初めて――まあ、人間はともかくとして――阿修羅という天界、それから戯忘（ぎぼう）という天界に生まれ変わることができるんだと。そういう状態でなければ生まれ

変わることができないんだよということを認識しなければならない。
そして、そのための法はここにある。そのための実践はここにある。また、皆さんが日々の生活の中で身(しん)・口(く)・意(い)の統御をし、そして瞑想に励み、功徳の実践を行ない、教学をなさり、自己をひたすら高めよう、自己をひたすらグル、シヴァ大神、諸々の覚者に近付けようという気持ちを持ち続けられるということを願い、今日の講話を終了します。

◉ヴァジラヤーナの修行――ハンディキャップを背負って

いいですか。今、信がすごく揺らぐ状態の環境に、あなた方は今ある。このときにだよ、あなた方が実践したことは、例えばそれは布施にしろそうだし、奉仕にしろそうだし、教学にしろそうだし、あるいは入信させることにしてもそうだ。オウム真理教が――まあ、いずれ発展するだろう――

その段階であなた方が活動したときの功徳の十倍、百倍、千倍の価値があるんだということを認識しなさい。いいね。

(信徒) はい。

それはなぜかわかるかな。酸素の薄いところで呼吸をするときと、酸素が濃いときに呼吸をするときと、どちらの方が楽だと思うか。当然、酸素の薄いときに呼吸をする方が苦しいはずだ。そうだね。じゃあ、酸素の薄いときに呼吸をする訓練をしている者が、酸素の濃いときに入ったらどうなると思うか。呼吸が当然止まる。つまり、今あなた方は、ハンディキャップの修行をしているということになる。そして、いいか、これがヴァジラヤーナです。自分自身に負荷をかけ、修行をすること。これがヴァジラヤーナです。

最後にね、先程、あの、奥さんを亡くされた旦那（だんな）さんが何て言ったか。

そのポアによって、奥さんのポアによって、彼自体の心も変化したみたいだよ。今まで自分はイニシエーション、あるいはある程度のバクティー、教学をやっていたと。しかし、周りに対してオウム真理教の信徒と言うことができなかったと。しかし、今回のこの妻の件で、わたしは堂々と今、オウム真理教の信徒であると――それは警察に対してもそうだし、それから周りに対しても――言うことができると。それを誇りに思っているという言葉があります。

　いいですか、あなた方は今、預流の世界において、高い世界へ転生する切符だけは手に入れたと。その切符をしっかり使い、そして本当に飛躍するかどうかは、これからあなた方が六つの極限――六つの極限は、布施、持戒、そして忍辱、精進、そして瞑想、智慧の到達というこの六つの極限――を徹底するかどうかである。いいね。

（信徒）はい。

ほんとに、声が小さいねえ。「わたしはー」と。でも、へらへらしていたら三悪趣（さんあくしゅ）に落ちる。それはもう、お釈迦様が経典で言ってらっしゃることだから、間違いない。いいね。

（信徒）はい。

今ここで生きて、オウム真理教の実践をしているということを誇りにしなさい。いいね。

（信徒）はい。

はい、では、今日の講話はこれで終わりましょう。

第六話　幻影からの脱却




九〇年十二月二日　大阪支部

◉生という現実、それは幻影

今、わたしたちは生きている。そして、この生きていることを実感しているという幻影に取り付かれている。では、その実感がなぜ幻影といえるのだろうか。

例えば、ここにおまんじゅうが一個あると。このおまんじゅうを、同じおまんじゅうを十人が食べたとすると、この十人の味覚というものは、それぞれ違って感じるだろう。では、なぜそれを証明できるのかといったら、それは修行により味覚が変わるからであると。あるいは妊婦の――つまり、おなかに子供がいるお母さんの味覚が変化することでもよくわかるはずである。ということは、わたしたちがこの人生、生まれて死ぬまでを現実、真実だと考えているこの見方というものは、幻影に取り付かれた錯綜（さくそう）にすぎないということがいえる。

今回、オウム真理教の国土利用計画法違反問題について、全部でオウム真理教関係者六名が逮捕された。そして今、その中の四名が、なお勾留中であると。まあ、皆さんも知っているとおり、マハー・ケイマ正大師、アパーヤージャハ正悟師、ティローパ師、マルパ師といった四人が、今勾留中である（編集部注…九〇年十二月二十八日をもって、全員が保釈されました）。そして、この四人に、昨日と一昨日、二日間にわたって、今オウム真理教の今回の事件に関する弁護団の一人であるY弁護士が接見なさった。そして、この四名の勾留状態、この勾留状態がステージ順に表われているということを彼はおっしゃっていたそうだ。

どういうことかというと、マハー・ケイマ正大師は全く乱れていないと。それどころか堂々としていると。まあ、名前は言わないが、例えばXは、ちょっと心が乱れて、今の環境に苦しみを覚えていると。そういうことを、

これは一般の弁護士さんでもはっきりわかるぐらいの差があるそうである。
これは何を意味するのだろうか。

◉在家の修行──苦しみからの脱却

つまり、仏教の苦の考え方には二つあります。その中の第一は、苦しみがある世界へ転生(てんしょう)しない道を説くということ。第二は、苦しみのある世界へ転生し、その苦しみの中に身を置き、苦しみを超越した意識状態を作り上げるという道。そして第一の道は、今ここにいる皆さん、信徒の方々が実践しなければならない道である。第二の道は、出家した者が菩薩(ぼさつ)として実践しなければならない道である。

この第一の道と第二の道とでは、実践過程が違ってくる。つまり、第一の道、この第一の道は、まず欲六界というものを肯定し、そしてその欲六

界の構成が功徳によって形成されているということを認識し、その功徳を積むことによって高い世界へ生まれ変わると。つまり、そこでは苦しみに対して強くなる、弱くなるということはポイントではなく、そういう苦しみの世界から脱却するということがポイントである。

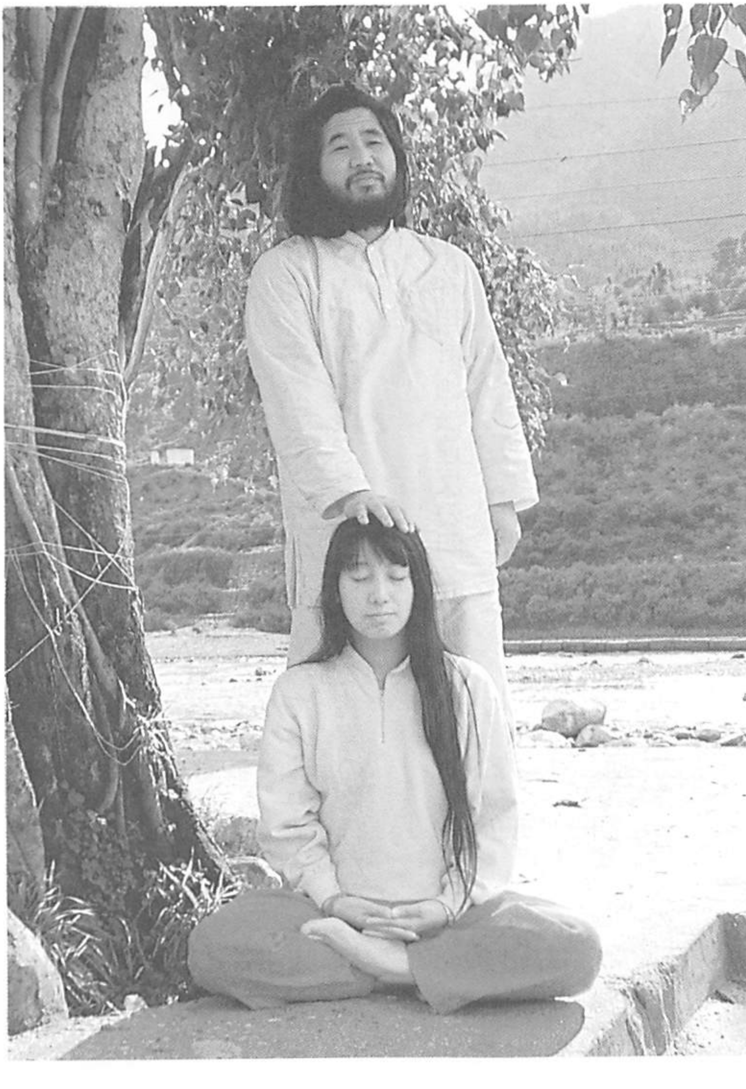
これはなぜかというと、在家信徒の場合、身のけがれというものが消滅するわけではない。この身のけがれが消滅しないということは何を意味するかというと、つまり、苦しみの中に自分を置いたとき、そこは苦しいと。逆に五妙欲（ごみょうよく）を満足させる、つまり快楽の状態に身を置いたとき、それは楽しいということがいえます。よって、快楽優位の世界である、人間、そして憤怒天（ふんぬてん）、戯忘天（ぎほうてん）といった三つの天界へ生まれ変わるということを目標として修行にいそしんでいくと。修行に励むと。これが在家の修行である。そのためには、徳の実践と、それから言葉においては優しさの実践、心に

おいてはできるだけ多くの人に真理を広めるという、本当の意味での慈愛の実践と。この三つが必要になってくる。

そして、これはオウム真理教の教えでは、三つの布施、つまり財施・真理施・安心施という、三つの布施の実践ということで表わされている。これに持戒を守ることにより、徳の消耗を減らし、そして輪廻転生(りんねてんしょう)をする。すると、例えば黄金色、あるいは白色の天の世界や、赤い光の、あるいは黄緑の光の憤怒天の世界、あるいはブルーの光、青緑の光の人間の世界へと転生することになります。

◉菩薩――苦中に衆生の幸福を願う

ところで、出家修行者はどうかというと、その段階を超え、つまり教師として、魂の指導者として、この人間界、あるいは餓鬼界・動物界・地獄



界といったところへも転生し得る心の強さというものを達成しなければならない。そして、それはステージが高くなればなるほど、いかなる苦しみがそこに存在していても、その苦しみにどっかりと身を置き、例えば、例としては、下でガスバーナーの火がどんどん強められても、それに平然と耐え、身を焦がされても平然と耐えながら、すべての魂の本当の意味での幸福を願う、そういう心の実践、これが最終的な菩薩の修行だといわれています。

まさに今回の国土利用計画法違反の四名の逮捕者の状態というものは、仏教的見地からいうならば、大いなるムドラー、大いなる印、マハー・ムドラーである。例えば、マハー・ケイマ正大師の——まあ、わたしは昨日、接見に行ってきたわけだけど——話によると、検事の取り調べというものは人権を完全に無視したひどいもので、例えば、「お前がいなくなるとオ

ウム真理教の経理活動はストップするから、ダメージが大きいだろう」と。「お前は売女だ」とかね、「お前はブスだ」とか、あるいは「お前はフリーセックスの教団にいるんだ」とか、言いたい放題のことを罵倒されたそうです。中には、ちょっとむっとするようなことが初めはあったと。

しかし、一日二日経ってカルマが落ちたのでしょうと。全くそれに対して心が静まった状態が起きましたと。それからは、何の心の動揺もありませんでした。それをまあ、その検事には十日間責め続けられたわけだけども、何の変化もなかったと。これはまさに、外的情報、苦の中に身を置いても平然としていられる、完全なるマハー・ムドラーの成就の状態を表わしています。

そして、逆に相手に対してね、哀れみすら出てきたと。こういうことをこの人は言っているけど、この人達が積んでいる口のカルマというのは膨

大なもので、ね、来世どうなるかわからないと。そこまでのゆとりを形成するものは何であるかと。それはまさに日々の修行、日々の繰り返し繰り返しの修行がものをいっているんだと思います。

●心を静め、現象に左右されないために

仏教は、現世の幸福を、在家においては説きます。しかし、出家においては説きません。出家の目標というものは、いかなる状態であっても心を静め、そしてその現象に左右されない意識を作り上げていくことです。では、そのためにはどのような実践があるのかと。これは在家においては、六つの極限、あるいは六つの徹底。これは知っているね。布施――三つの布施――それから十の戒め、そして忍辱、それから二正断二正勤という精進、それから瞑想、そして最終的な瞑想から得た智慧といったもの。そし

て、それを達成するためには、四つのマハー・ニルヴァーナに至るための流れに乗る実践。これは四預流支（しよるし）といわれている実践、つまりグル・師・覚者、あるいはシヴァ大神に対して心から信を持つこと。そして次に、法を学ぶということ。つまり、『マハーヤーナ』を読み、そして説法テープを聴き、何度も何度も繰り返し聴き、記憶するということ。そして第三段階では、その聴いたもの、あるいは読んだものについて十分に考え、検討すると。そして第四番目は、それにのっとり実践するということである。

いいですか、君たちが、別の価値観のもとにオウム真理教を否定したのなら、わたしはそれはそれでよしと考えます。しかし、君たちの心の中に、例えば現世ではいろいろなことをいわれているが、それは単なる批判であると。今、わたしたちのこの苦しみに対して、別の解答を与えてくれるものがあるであろうかと。どうですか、それは。今いわれている、例えば大

乗仏教、『法華経』があなた方の心を癒してくれますか。どうですか。あなた方の死の恐怖に対して答えるべき教義が、この日本に存在していますか。どうですか。そして、縁あり、今ここに皆さんが集まっている。

◉オウム――約束された来世

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。死を前にして、恋愛が有効だろうか。死を前にして、物質が有効であろうか。死を前にして、お金持ちになることが有効であろうか。死を前にして、権力を得ることが有効であろうか。一切無効である。死を前に、何が有効だろうかと。それは大いに徳を積み、そして戒律を守り、五感を制御し、深い意識状態に入り、死を知り、死を克服することである。人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。しかし、その死を超越する道は存在している。



わたしはこの八月から、九、十、十一月と、たったの四カ月の間に、四名のポアの話を受けました。その第一の例は、今年の四月だったかな、五月だったかに入信なさった方で、肝臓癌の方。この方は、即、五月二十五日のイニシエーションの後、ＡＨＩ（アストラル・ホスピタル・インスティテュート）に入院なさり、そして徹底した布施と、それから特殊な瞑想、そして特殊な治療を受けられて、肝臓癌でありながら、その肝臓癌が完全に死滅したと。これは、大きな病院で検査したら肝臓癌はすべて死滅していたそうですがね。ところが、カルマが切れた瞬間、その方の今生のカルマも切れ、中間状態に入られたと。わたしはその彼の意識を——もう絶対不可能だといわれていたわけだけど——一回呼び戻し、そしてアドバイスをなした後、まあ、その方は息を引き取られた。わたしもその瞬間三昧に入り、そして阿修羅の世界へと道案内をした。これが第一の例である。

第二の例は、これは信徒の方のお母さんだが、まあ、本人の知らない状態で形だけ入信し、本人は他の信仰をなさっていらっしゃったと。そして、ポアの依頼があった。しかし、この方のポアをわたしはしようと試みたが、どうしても瞑想に入れない。よく見ると、この方の帰依なさっていらっしゃる他の宗教的エネルギーが入っていて、助けることができなかったと。これが第二の例である。

そして第三の例は、医者も見放した癌の患者さん。しかも、死ぬこともできないと。苦しくて苦しくてたまらない状態にあったそのおばあちゃんを、その息子さんであるニューヨークの信徒さんから、わたしに救ってくれという連絡があった。そして、そのニューヨークの信徒さんの布施がわたしに着いた日、その瞬間に、そのお母さんはポアされた。そして、苦しみだけの地獄から少し高い世界へ転生した。

第四の例は、これは最近あった話だが、熱心だった信徒さんが、ちょっとした事故で脇腹の動脈を切られて、亡くなられた。ところが、彼女はいろんな瞑想を経験し、そしてたくさんのイニシエーションを受けていた人である。死後、彼女は縁の深かったサクラー正悟師のところ、あるいはわたしのところにその苦しみを訴えにいらっしゃった。その人は、その事故を起こした相手に対して恨みを持っていた。ところが、わたしはそれを前回行なったバルドーのイニシエーション、そして小乗のツァンダリーの特殊な瞑想法をアストラルを通じて与えることにより、その方はポアされ、人間界としては最も高い、修行者の子供として生まれ変わる種子を得られて、子宮に入られた。

この四例については、いずれも証人がおり、そして、いずれも印が現われました。これはいずれ、『超越神力』のパート1か、あるいはパート2

かで、「ポア」という項目の中で書くつもりでいます。この神通力は、皆さんもご存じのチベットの成就者ミラレパ、あるいは数少ないチベットの成就者が有していた瞑想技術だそうです。

そして今、あなた方はチャンスを得ているわけである。それは何かというと、真剣に真理を実践することにより、真剣に四つの預流支（よるし）、つまり信を持ち、教学し、教学に基づき考え、実践することにより、正しい来世が約束されているということです。

◉絶対的境地、それは教学・瞑想・集中から

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。しかし、死を超越する道がここにあります。そして、死を超越した者は、この現世をも超越します。それはどういうことかというと、現世の中にいても一切苦しみの

生じない状態が形成されるわけです。そして今、あなた方は在家だ。しかし、今生か、あるいはいずれかの生で必ずやわたしとの縁により出家し、絶対的な境地、三界のどこへ存在して、どこで救済活動を行なっても崩れない、絶対的境地が形成されてくるはずです。

人は必ず死にます。人は病みます。人は必ず苦しみの中に埋没しなければならない時期があります。そのとき、その瞬間までに、あなた方は何を求め、何を考え、何を実践し、何を乗り越えていくか。それは、あなた方の『マハーヤーナ』あるいは説法テープに答えが存在しているはずです。そして、この現世において苦しみが生じないとしても、必ず死後の世界、あるいは次の生で苦しみが生じるわけだから、その本質的な部分を今、この真理と巡り合ったこの瞬間に学び、実践することは、あなた方に大きな恩恵があるとわたしは確信しています。

わたしが今日、一つ気になることは、ここに集まっている信徒の心が集中していないということ。集中していないとはどういうことかというと、日々の修行を行なっていないのではないかということ。もし集中していれば、この空間はもっと締まり、そして神秘的なエネルギーの流れが存在するはずである。ところが、今こういう説法をしていても、雑念に流され、心が乱れています。

最後に一つ言っておきたいことは、あなた方はいろいろな瞑想法を知っているはずである。あるいは、教学をするための材料を持っているはずである。それをもっとしっかり持たれ、集中する心を持ち、あなた方の持っている苦しみを乗り越えていただきたいと思います。

では最後に、「苦の詞章」および「大乗の発願」を唱えて終わりにしましょう。

いいですか、簡単なマントラは一千万回から百万回、中程度の瞑想法は百万回から十万回、少し長い瞑想は十万回から一万回、かなり長い、例えばツァンダリーとか、あるいはマハーヤーナのツァンダリーとかいうような瞑想は一万回から千回。これがまず、達成の目標です。もっと詳しく言うならば、一分以上のもの、一分から、まあ二分ぐらいのもの、これは十万回ぐらいが適当であると。ところが、三十秒以下のものについては、やはり百万回ぐらい必要であると。ツァンダリーのように三十分かかるようなものは千回やれば十分だろうと。しっかりと修行してください。

第七話　三乗の修行、その形態とステージ





九〇年十二月二十九日　横浜支部

◉多重層をなす意識

まず、一昨日二十七日、ケイマ正大師、それからマルパ師が保釈されまして、一応、全員釈放される形になりました。でまあ、マルパ、それからケイマ、それからティローパ、アパーヤージャハ、この四名はわたしとの面会が禁止されておりますので、まあ、しばらくはわたしの直接の指導は受けられないけども、横浜、あるいは東京、あるいは大阪といったね、各地で中心となって支部活動していただけるということですから、皆さんのいろんな修行上の疑問点、あるいは人生上の疑問点については的確に、今回の経験も含めて、的確に答えてくれると思います。

今日の話は、ちょっと、初めは難しい話から入ろうと。難しい話というのは何かというと、わたしは十月から東京を中心として支部活動を始めたわけだけども、もう三回目、四回目となるから、基本的な四預流支、ある

いは、八つの実践過程、あるいは六つの徹底、十四の徹底といったようなベースの話、これは後の方で行なうとして、初めに少し高度な、意識についてね、話をしたいと、そして解脱について話をしたいと考えています。

まずわたしたちの意識というものは、多重の層を形成していると。これはちょうど、まず土があり、その上に砂があり、そしてヘドロがあり、その上に水があり、水の上に油があるというふうな形を考えていただきたいと。このわたしたちの意識が低い状態のときには、土の中にちょうどその意識が埋没してると。そしてこれを上昇させる働きのあるもの、これが風（ふう）であると、風（かぜ）であると。そして上昇するものが心滴（しんてき）であると。その上昇させる風の道筋、これが管であると。

この管・風・心滴といった三つ、これはタントリックのベースをなすものであると。そしてこのタントリックのもともと狙いというのは、この土、

砂、そしてヘドロ、そして水、油といったようなものをいじることなく、意識を速やかに軽い方向へ向けていくと。そうすると最終的には、その油から脱出して空間へと移行すると。

◉南伝仏教の教え——すべての意識を空間に変える

ところが南伝仏教——『南伝大蔵経』を含めた南伝仏教では、それを善しとしないと。では『南伝大蔵経』の南伝仏教は何を善しとするのかというと、要するにその土を変えてしまおうと。あるいは砂を変えてしまおうと。あるいはヘドロを変えてしまおうと。あるいは水を変えてしまおうと。あるいは油を変えてしまおうと。何に変えるのかというと、すべてそれを空間に変えてしまおうと。よって、例えば仏陀釈迦牟尼のように四アサンキャ十万カルパという、ものすごい長い間の修行というものが前提となっ

てくると。

これはどういうことかというと、つまり先程言った管・風・心滴というのは個の解脱においては有効であると。これはタントリックの特長で、一生あるいは数生で最終地点に到達できると。しかし周りをすべて変えてしまって、周りのすべての魂をマハー・ニルヴァーナに入れるためには、その土――土の空間を変えない限り衆生を済度できないいんだと。あるいは砂の空間を変えない限り済度できないんだと。あるいはヘドロの空間を変えない限り済度できないんだと。あるいは水の空間を変えない限り済度できないんだと。あるいは油の空間を変えない限り済度できないんだということになると。

つまりどういうことかというと、そこに如来というものが存在し、その如来が空間を変えることによって、すべての魂の幻影を打ち砕いてあげる

と。そして速やかに飛翔(ひしょう)する形を取らせるということになると。

◉意識が低い者の恐怖

ここで一つチベットのタントラの経典を思い出していただきたい。これは日本でも、まあ誤訳がかなり多いけども翻訳されている、例えば『バルド・ソドル』なんかその典型だけどもね。この内容は、まさに先程言った多重的意識における、ちょうど水の部分にたとえてね、考えることができると。

これはどういうことかというと、わたしたちを構成しているものは地・水・火・風……、まあ、これは言い方を換えるならば、肉体、血液、そして体温、それからもう一つは呼吸と、あるいは内なるエネルギーという言葉もできるわけだけど、そして最後は空間と、この五大エレメントで構成

されているわけである。

この五大エレメントは個々のカルマによって形成されていると。例えば一千メータークラス前後にいるチョウチンアンコウがあるとして、このチョウチンアンコウをいきなり引き上げるとどうなるかというと、目が飛び出したり、あるいは破裂してしまうと。これはチョウチンアンコウだけじゃなくて、そうだね、他の深海魚についても同じことがいえると。

これはどういうことかというと、例えば、千メータークラスでは、大体百気圧、ということは一平方センチ当たり、大体百キロの圧力が加わってるわけである。そこで生活してるわけだね。この百キロの圧力が一気にゼロになるわけだから、当然膨張すると。その膨張の段階で破裂するという形になると。ちょっと詳しく述べるならば、一センチ四方のサイコロ、六面体のサイコロがあるとして、その各面に百キロの圧力が加わってると考

えたらよろしい。それが例えばいきなり引き上げられるわけだから、そこで破裂してしまうと。つまりこれは五大エレメントの崩壊であると。

これが例えば、ゆっくりゆっくり行なわれるならば、それに対応して、五大エレメントが変化していって、そして、その空間に適応できる形で変化していくから恐怖はないと。ところが一気に引き上げられると、そこで恐怖が起きると。そしてわたし達は過去から現在に至るまで、過去世から現在に至るまで、多くのそういった意識の上昇と、あるいは下降を経験をしてるわけであると。よって中間状態、つまり死の状態に入ったとき、例えば悪業をなしてる者がグルの神秘的な力によって、ね、例えば色界に生まれ変わらせられるとした場合、その光の強さ、あるいは引き上げられるときの恐怖によって、そこから逃れたいと考えると。

これは、信徒を見ていても、あるいはサマナを見ていても、その状態が



よくわかる。例えばグルが意識し、この人を出家させようと、あるいはグルが意識し、この人を解脱させようと考える、ところがその人に、まだ、その機根がない……というよりも、そうだね、土台がしっかりしてない場合、恐怖して、例えば退会してしまったり、あるいはその修行から逃げ出してしまったり、いろいろと起きると。これはその人の意識がまだ低くて、高い部分に引き上げられるときの他の要素がついていかないということを表わしていると。

◉三乗の要素

そしてヒナヤーナ、つまり小乗仏教、マハーヤーナ、大乗仏教、タントラ・ヴァジラヤーナ、これは秘密金剛仏教といわれる三つの教えがあるわけだけども、この第三番目のタントラ・ヴァジラヤーナの教えというのは、

まさにこの引き上げであると、ね。

そしてヒナヤーナというのは何かというと、ヒナヤーナというのは、要素というものは先程言った、土、砂、そしてヘドロ、水、油、空間という要素といったようなものは、そのまま肯定し、そしてその要素は一応肯定はするんだけども、ただ自分の管、それから風、それから心滴、この三つだけを、その要素から切り離して上昇させせようと考えると。

で、タントラ仏教というのは何かというと、一応要素というものは肯定はするんだけども、できるだけ、その要素の影響を受けないように、否定しないで受けないように上昇させようとすると。そして如来——本当の如来に至るための大乗仏教とは何かというと、先程言ったとおり、その要素全体を変えてしまって、多くの魂を引き上げることに主眼が置かれていると。

よって到達点は同じであると。しかし力は違うと。あるいは到達点は同じであると。しかし影響の度合いは違うということになる。これは何を目指すかによって違ってくると。つまり個の最終地点を目指すのか、あるいはすべての魂を済度するために修行しているのか、あるいは苦しみから出離したいために修行するのかによって違ってくる。

ところが現代は、真理というのがもう廃れてほとんどないと。よって、この三つが同一に見られたり、あるいは、大乗仏教の教えの一部分だけ取り上げられて、そのベースとなる意識の上昇とか、あるいはすべての魂をマハー・ニルヴァーナに至らせるといったような教えというものがなくなってきてると。これが例えば『法華経』あるいは『維摩経』あるいは『仏部三部経』といったようなものが、その典型であると。つまりこの大乗仏教というのは、あくまでも自分自身の上昇、それと同時に周りも上昇させる

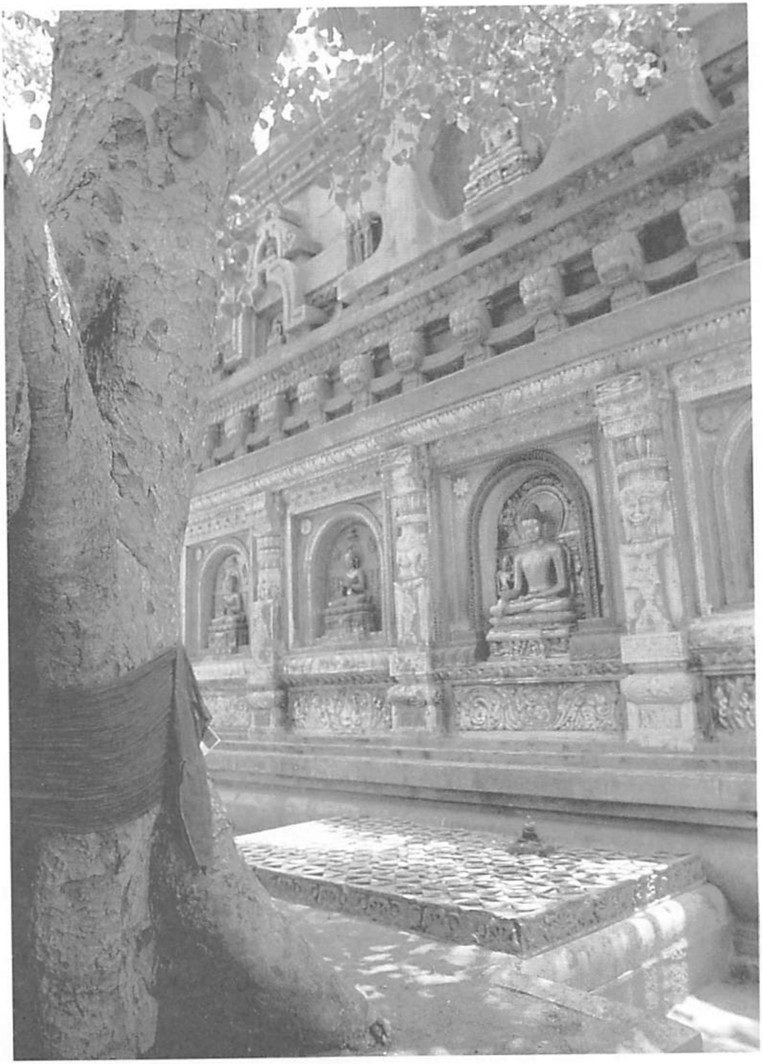
という二つの要素が必要となってくると。つまり自分自身が仏陀の境地に到達していなくて、あるいは自分自身が如来の境地に到達していなくて、周りを済度することはできないのであるということである。そしてこの現象界の真理も、それから欲界・色界・無色界を通した三界の真理も全く同じである。

◉オウム真理教の修行目的

とまあ、こういう形で今日は難しい話から入った。なぜ少し難しい話から入ったかというと、オウム真理教には四預流支しかないのかと。あるいは六つの徹底しかないのかと。あるいは教えしかないのかと。結果はないのかということだから、まず何のために修行してるのかということになると。

では次に、力というものは何であろうかと。これは例えば仏陀に至るための、仏陀に至ったときの力というものがある。これは俗にいう六神通。例えば天耳（てんに）・他心（たしん）・漏尽（ろじん）・宿命（しゅくみょう）・天眼（てんげん）、そして、神足（じんそく）だね、といったような六つの神通力があるわけだけど、この力も同じように、その世界っていうか、空間を表わしてると。

つまりヒナヤーナの完成によって、この六神通が生じる場合、人里離れた、だれも見ていないところでその神通が発揮されると。マハーヤーナの神通の場合は、これは、だれが見ていようとも神通が発揮されるようになってくると。そして、タントラ・ヴァジラヤーナの神通においては、先程言ったごく少ない人に対して、ごく少ないそれを信じてる人だけが、その神通を知ることができるし、見ることができると。これは先程わたしの述べた三つの教え——つまり小乗、大乗、それから秘密金剛乗の三つの教えを理



解すればよくわかることである。

◉三乗によって異なる神秘的な力の発揮

もう一度復習しようと。まずヒナヤーナにおいては、自己の管・風・心滴のみ、これを先程言った、土、砂、ヘドロ、水、油といったものから切り離すわけだから、当然外界であるいろんなものとの接触によって、その力というのは阻害される。よって一人の状態になったとき、完全にすべてから切り放されたとき、その力は発揮されると。これはまずOKだね。わかりますか。

じゃ、第二番目のタントラ・ヴァジラにおいては、その秘密の教えというものを信じる者たちが——つまりこれはごく少数であるが、あるいは大量かもしれないけども、その要するに中心となる成就者の周りにいる人、

この人たち、つまり土、砂、ヘドロ、水、油、空間の中でも、その中心のタントラ・ヴァジラの教えを信じてる人たちの前だけで、その神秘的な力というのが発揮されると。これOKだね。

そして本当の意味での大乗――大乗といっても、もうマハーヤーナの最終仏陀に至るための修行、これにいそしんでる魂の場合はいかなる条件であろうとも、どのような条件であろうとも、神秘的な力というものは発揮されるはずである。これもOKだね。

そしてその修行の形態において、当然修行の期間は違ってくる。これもOKだね。当然ヒナヤーナの教えというのは最も楽であると。切り離せばいい、そうでしょ。そして大乗の修行というのは当然時間がかかると。それは自分のいろんな縁に対して、縁を感じてる人に対して変化さしていかなきゃならないからであると。そうだね。ということなんだね。

◉三乗のメリットとディフェクト

で、ここまで考えてくると、例えばなぜタントラ・ヴァジラヤーナが秘密の教えでなければならないのか、これがわかると。わかるね。つまり、それは、このように考えたらよくわかる。例えば熱エネルギーがあるとして、その熱エネルギーを遮断する、例えば壁を用意した場合と、遮断しない場合とを考えてみようと。その全体の空間をある一定の温度にするためには当然遮断した方が楽である。そうじゃないか。遮断しなかったらものすごいエネルギーが必要だろ。そうだね。どうですか。で、タントラ・ヴァジラヤーナの場合は、その遮断をするわけだ、「秘密」という壁を作ることによって。そして、今度は大乗仏教の場合、遮断をしないわけだね。わかるかな。ということは、結果が出るのはどちらが早いかというと、当然遮断をした方が結果が早いと。そうだね。ただそれがもし漏れるならば、秘

密の漏洩その他で漏れるならば、それどうなりますか。そこから熱エネルギーがどんどん漏れて、外側に広がっていくけども、その熱の絶対的な量というのは大したことがないから、結局は、どうですか。冷えてしまうよね。そうすると力がなくなってしまうと。

ヒナヤーナ仏教においてはもっと徹底してて、その人の周りだけ、周りがいくら冷えてても、その部分だけをあっためようとするわけだね。だから広がりからいったら、ヒナヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナ、そして本当の意味でのマハーヤーナという順番で広がるだろうと。結果からいったら、衆生済度という点からいったら、それは機根――つまり今生で解脱する、修行するというような機根があるわけだから、当然順番ではタントラ・ヴァジラヤーナが最も優れていて、次はマハーヤーナ、そしてヒナヤーナという順番になるだろうと。それから成就のスピードからいったら、

当然ヒナヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナ、マハーヤーナという順番になるだろうと。

それから衆生済度という点からいったら、当然マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナ、ヒナヤーナの順番になるだろうということだね。これが三乗のメリットとディフェクトである。つまり三乗の長所と欠点であると。

いいですか。

◉すべての土台、ヒナヤーナ

そしていかなる形にしろ、必ずヒナヤーナをまず土台としなきゃならない。次に、ある程度のマハーヤーナを土台としなけりゃならない。だろ。というのはヒナヤーナが最も本来は早くて楽なわけだから、衆生に利益を還元するために四無量心（しむりょうしん）というものがなければ、そのエネルギーを拡大



し、そして壁をつくり、自分と縁のある者たちだけを救済するというタントラ・ヴァジラヤーナの救済はできないよね。どうかな。ということは大乗のある程度の土台は必要であると。その上にタントラ・ヴァジラヤーナがあると。もう一つの道はヒナヤーナと、それからひたすらエネルギーを拡散させ続けて、そのエネルギーがいかなる条件があったとしても、ある一定の強さを保つ形で済度すると。これがマハーヤーナの救済だよね。そしてその上に、もしタントラ・ヴァジラヤーナの教えが乗っかったら、これは多くの人たちを秘密金剛乗によって済度することができるといわれている。

◉オウム真理教——理想的な宗教の形態

オウム真理教の教えは密教なのか、あるいは顕教なのか、よくわからな

いといわれる。というのはどういうことかというと、秘密の教えといいつつ例えば信徒に大っぴらにイニシエーションを募集したり、云々とよくある。どうだ君たち、今日の話でわかったんじゃないか。わたしが何を言いたいか。

つまりオウム真理教のマハーヤーナの教えというものは、確実なものであると。そしてその上に秘密金剛乗というものは乗っかってるわけだ。ということは、一般の、例えば十人、二十人の弟子たちを引き連れて、最終的にニルヴァーナに入ろうとするグルと比べて、例えばマハーヤーナ的な教えの上に秘密金剛乗の教えを乗っけている、ここにグルがいるとして、同じ方法を取るだろうかと。言い方を換えれば、少しぐらいエネルギーが漏れてもいいじゃないかと、壁から。どうだ。

そしてその壁から漏れたってそれを引き上げるぐらいの、要するにエネ

ルギーがなかったら、すべての魂をマハー・ニルヴァーナに入れ、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜っていうのを味わわせることができないんじゃないか。どうだ。つまり心においては、絶対なるマハーヤーナの心を持つ、四無量心を持つと。そして技法においては、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナの三乗の教えを有すると。これが理想的な宗教の形態ではないかとわたしは思います。どうですか。そして、それがオウム真理教です。

◉六つの極限をベースとして

では、君たちは何の修行をやればいいんだと。まず、北伝の典型的な修行形態である、六つの極限。これは、布施、つまり、財施・法施・安心施という布施の徹底。そして持戒、そして忍辱(にんにく)、忍辱というのは耐え忍ぶと

いう、耐え忍び、意志の力を強めるということだね。精進。精進っていうのは二正勤二正断（にしょうごんにしょうだん）ということ。つまり、今行なっている、善法を増大させると。まだ、今達成することのできない善法を増大させると。今行なっている悪業を滅すると。未来において生じるかもしれない悪業を滅すると。これが二正勤二正断だよね。そうだね。

　この例えば二正勤二正断の少し説明をするならば、例えば布施、持戒、あるいは耐える力はあるとしようと。で、例えばグルからマントラをもらったと。で、例えばそれが三十万回だ、百万回だと言われると。で、これをとにかく三十万回あるいは百万回と唱えること、これが今行なってる善法を増大させることであると。わかるよね。そして早く達成して、その次にどういうマントラ、どういう詞章をもらえるかなと考えて修行すること、これが未来において、より多くの善法を増大させるということなんだね。

じゃ、今行なってる悪業を滅するとは何かというと、例えば身の行ないにおいて、殺生はしなくなったと。あるいは偸盗もしなくなったと。しかし、例えば、いろんなイメージのけがれでオナニーをしたり、あるいはレンタルビデオで性欲を増大するようなビデオを見ると。それを滅するぞと、ね。そして将来において云々というのは、今まだ全然綺語が取れないとか、あるいは自己保全をするための嘘がなくならないといったような状態の場合、その自己保全を、早く未来において必ず滅するぞと。これが今なしている悪業を滅し、そして未来において生じるかもしれない、あるいは、今生じているが、今滅することのできない悪業に対してそれを断つと。これが二正勤二正断、つまり精進なんだね。

　そしてこれらの修行を固めていくと、次は禅定のステージ、つまり瞑想ステージ、メディテーションのステージに入ります。そしてサマディに入



り、サマディから智慧に到達し、そして遠離、離貪し、解脱すると。当然ここでの智慧・遠離・離貪・解脱というのは、在家の場合、あくまでもタントリックな修行になってくると。それは先程言ったとおり、例えば妻や子供がいる、あるいは今まだ学校に専念しなければならないとか。あるいは未来においてこういう仕事をしながら社会に貢献したいというような場合、それと並行して行なうわけだから、当然タントリックな修行になってくると。ところが今度は出家修行者の場合、そうじゃなくて、完璧にそのヒナヤーナの完成を行ない、そしてマハーヤーナ、タントラヤーナへと入っていくと。まあ、こういう二つの形態があるわけだね。

●出家の修行——八支の実践方法

そしてその二つの形態の、第二の出家に関しては、先程も言った八支の

今度は聖なる道、これは八支の実践過程、実践方法というのがあるわけだよね。これは君たちもよく知っているとおり、まず正見解と。正見解とは何かというと、この世は無常であると。つまり一切は必ず壊れるものであると。そして三苦というものを土台としてると。つまり苦苦・行苦・壊苦という、つまり本質が苦しみであると。楽しみというものは変化し、苦しみに変わるんだと。そして、必ず楽しみというのは、破壊されてしまうと。この三つだけどね。この三苦を土台とした無常を根本とした、すべては幻影であると、ね。

そして、それを乗り越えていくためには、何をしなければならないかというと、当然、正しい思索であると。正しい思索とは何かというと、四諦というもの、つまり苦しみ・苦しみの生起・苦しみの滅尽・苦しみの滅尽に至る道という、この四諦というものを土台とし、何をなせば楽になり、

何をなせば苦しむのかということを徹底的に考えると。例えば、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫(じゃいん)を離れることこそが本当の意味での、ニルヴァーナに入る道なんだということを悟ると。

そして、綺語・妄語・悪口・両舌という四つの口の言葉を離れ、人に正しく語る、優しく語る、それから和合させるような言葉を語る、必要のない言葉を語らないという四つの実践を行なうと。そして、実際に先程言った正思惟(しょうしい)で考えた、殺生を離れ、偸盗を離れ、そして邪淫を離れるということを実際に実践すると。これが正行為であると。そして正生活は何かというと、日々の生活において教学し——つまり七覚支だね。この七覚支の実践を行なうと。そして、二正勤二正断の実践を行なうと。

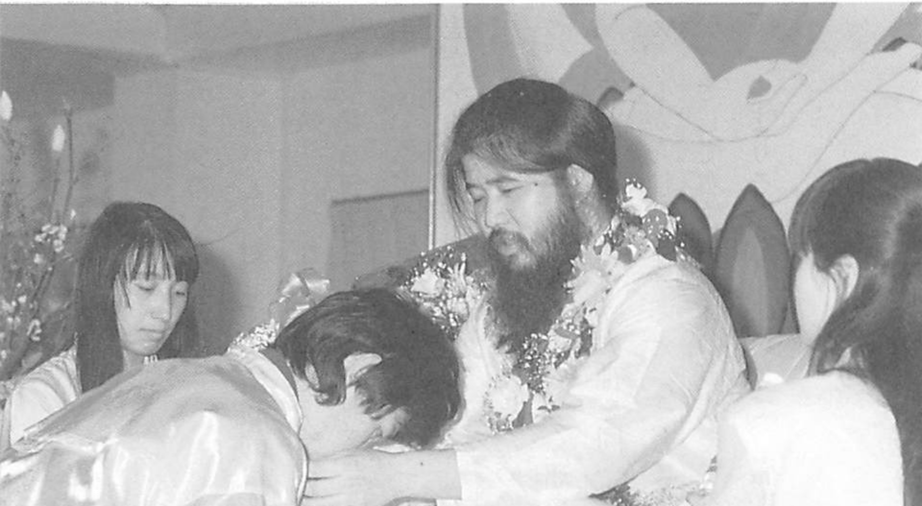
そして、ひたすら同じものを記憶修習すると。この記憶修習とは何かというと、例えば君たちがよく唱えている「ホー、湖面に映る虚像のような

様々な幻影に引きずられ、輪廻（りんね）の大海を浮沈する生き物達。彼らすべてが絶対自由・絶対幸福なるマハーヤーナにて安住することができるよう、四無量心込めて大乗の発願をいたします」。これなんか、まさに記憶修習であると。これを一回唱えるのと、それから十万回唱えるのとは違うと。まあ、現代的な知識という点から考えたら、知ってれば同じじゃないかと考える。ところが実際は違うと。

それはちょうど、例えばわたしたちが食事をするとき、箸（はし）の使い方を考えながら行なってるかどうかと。わたしの輪廻転生においてわたしはあんまり箸を使ってないから箸取りが大変悪く、どうやってつかまえようかいつも考えてると。しかし、例えば日本転生の多い人は、あるいは中国転生の多い人は、パッパと箸を使えると。これはまさに前生において、何の記憶修習をしたかであると。

つまり考えないで、パッと詞章が出くる。あるいは何かの、例えば君たちの周りの人が苦しんでいると。真理と縁がなくて苦しんでいるときに、パッと大乗の発願が出てきて、この人を済度しなきゃならないんだというレベルまで大乗の発願が君たちに根付くかどうかと、これが記憶修習であると。

そしてそれを土台とし、つまりわたしたちの記憶を完全に、この人間の、あるいは三悪趣へ生まれ変わるデータから、そうではなくて人間界、憤怒天、戯忘天、あるいは梵天界、あるいは色究竟天、あるいは無色界、あるいはマハー・ニルヴァーナへと至る、データへと入れ替えて座ると。そして思索すると。これが正サマディであると。これが出家の、今度は八つの実践方法ということになる。



◉四預流支によるデータの入れ替え

それと今度は、信徒さんに対して、徹底的に法の布施ができるかどうか、まあ、戒律が守れるかという、十四の徹底を実践すると。これが出家の修行であると。当然在家の到達点と出家の到達点は違う。しかし、どちらの到達点にしろ、その人が本気になり、人生すべてを修行に懸けるならば、それは大きな恩恵があるだろうと。

では、その大きな恩恵をスムーズに得るためには、どのようにしたらいいんだろうかと。それはまあ、みんなもよく知ってるとおり、四預流支の実践であると。つまりグル、シヴァ大神を同一と考え、あるいは諸々の仏陀を同一と考え、心から帰依をすると。そして帰依をするということは、その教えを学び、そして布施、奉仕の実践をするということであると。次に真理に対して、つまりその教えに対して、徹底的に帰依をすると。この

帰依とは何かというと、その教えを実際に記憶し、そしてその教えを流布するということであると。布教するということであると。そしてサンガに対して、つまりグルの弟子たちに対して、絶対的な清らかな信を持ち帰依をすると。これはそのサマナのお手伝いをする。あるいはそのサマナが法を語ってるとき、それをグルと見、その法を実践するということである。このまず第一の土台を固めると。

そして第二の土台は何かというと、これはね、先程のその帰依とダブッてくるけども、その教え、その教えを何度も何度も読んだり、聞いたり、あるいは話したりすることであると。

そして三番目は、ただ単にオウム返しのように読んだり聞いたり話したりするだけではなくて、実際自分の行動に当てはめ考えると。自分の言葉に当てはめ考えると。自分の心に当てはめ考えるということであると。こ

れが第三番目の預流支であると。

そして第四番目の預流支は何かというと、それを実際実践すると。つまり実際にその法にかなった言葉を使うことであると、法にかなった行動をすることであると、法にかなった心の働きを形成することであると。これが四預流支であると。

そしてこの四預流支を科学的に分析すると何かというと、言葉・行為・心のデータを入れ替えるということである。それを繰り返し、繰り返し入れ替えるということである。

◉来世を決定するデータの修習

実は、東京でもこの話をしたわけだけれど、まあわたしは今死んだら、おそらく人間界へ生まれ変わり、巨人軍のピッチャーのエースとして生ま

れ変わるだろうと。それは何かというと、六歳ぐらいから、あの、わたしは何についてもすごく凝り性だから、大変な修習をしたわけだね。それはラジオを聞いたり、実際に見たりして、野球のデータを相当入れて、次に監督がどういう采配（さいはい）を振るうかとか、あるいはピッチャーがどういう球を投げるかとか、そういう修習をしたわけだけど、これ計算すると二万時間以上になるんだよ。そうするとその二万時間というのはどうなのかといったら、例えば飴（あめ）の修法が、まあ、一分から二分と。多く見積もって二分だとして、十万個と。そうすると、二十万分と。これを六十で割ると、ね、そうすると、約三千時間強になるわけだね。ということは、その約七倍、つまり七十万個、あるいは八十万個といった飴の修法を終わって、初めてその野球のデータを入れたデータと同等になるわけだよ。

もちろん修行のトータルの時間からいったら、もう野球のデータを超え

てるかもしれない。しかし、わたしが費やした無意味な時間、これは結局、この野球というのは何かというと、君たちも知っているとおり無智であると。しかし、その野球は動物界にはないから、しかも思索が含まれてるから、おそらく人間界転生だろうと。次の生は三悪趣に生まれ変わるだろうけどね――ま、修行してなければだよ――ということであると。そうすると、こういうことを考えると、わたしの中に形成した今生での五蘊、この五蘊はまさに無智を背景とした正しくない選択によって形成されている五蘊といえると。わかるかな。

よってわたしは、今もひたすら瞑想を続けてると。あるいは先程言ったとおり四預流支の実践を続けていると。そして今わたしはこう考えている。できるだけ長く生きたいなと。長く生きることによって四預流支の実践ができると。もっともっとデータを入れ替え、ひたすらデータを入れ替え、



そして三悪趣のデータを完全に滅するしかないなと。

君たちはどうですか、何のデータが入っていますか。そうすると君たちの輪廻転生というものは、おのずからはっきりするんじゃないかと。

◉速やかに覚醒を得るために

では、信徒が速やかに覚醒を得るためには何をなせばいいかと。これは教学――つまり四預流支の実践だね。そして、その四預流支の実践一言に尽きるわけだけど、これをもう少し分析すると、教学・功徳・瞑想、そしてイニシエーションを受け、しっかりとその高度なテクニックを身につけるということ。この四つの土台を固め、自己のものにするならば、皆さんには絶対的な平安というものが生じるでしょう。

わたしの今日の話で、次のことがわかったはずである。つまり、修行に

は多くの方法があり、多くのステージがあるんだと。これはどうだ。それから信徒の中で、ある人は即結果が出、ある人は結果が出ないと。これどうだ。例えば五蘊の中において三悪趣に至るデータを大量に放り込んでる人がだよ、真理のデータを入れ出したとして、その人と三悪趣のデータが入ってない人がだよ、真理のデータを入れ出したとして、その人と同じ時間で結果が出るだろうか、どうだ。ということだ。そしてわたしは君たちと同等、あるいはそれ以上に三悪趣のデータを今生入れたと考えています。だからわたしは君たち以上に教学をし、瞑想をし、功徳を積み、修行していきたいと考えています。そして君たちが今日のわたしのこの話を聞いて、四預流支の実践をし、四つの実践をし、速やかに覚醒に至らんことを願い、「大乗の発願」を唱え、そして「苦の詞章」を唱え、ま、最後に質問を取ってね、終わりにしたいと思います。

◉如来の意識の多重性

説法の付け足し。『南伝』の中に如来というものは生きていることもなく、死んでいることもなく、未来において生じることもなく、あるいは過去において生じることもなく、現在において生じることもなくという教えがある。これよく知ってるね。

これは何を意味するかというと、今日のわたしの管と風と心滴の教えを考えたらよくわかるはずである。つまりどういうことかというと、例えば地獄の生があったとしようと。それが土の状態であると。あるいは天の生があったとしようと。それが、例えば空間であるとしましょう。いいですか。そうすると、如来というものは、特に大乗にタントラを加えた如来というものは、どうですか、そのいずれの生にもパイプがあり、そして、その生の空間を変えている意識の持ち主であると。どうかな。ということは

その人は、例えば地獄に住んでいるんだろうか。あるいは天へ住んでいるんだろうか。あるいは人間へ住んでるんだろうか、どうですか。言えないよね。ということなんだよ。あの『南伝』の教えの背景にあるものはそこです。

だから経典に書かれてるのは、真に成就した者、真に解脱した者のみがその背景にある教えというか、背景にある、真にね、実体というものを知ることができるわけであると。おそらくああいう経典を訳して……、まあ、オウム真理教の場合、わたしが中心となって、まあ、ヴァンギーサ師、あるいカンカー・レーヴァタ師たちと一緒にね、訳してるわけだけど、それを知らないで訳してる人は、これ一体何言ってんのかわからないと考えるかもしれない。それは生まれて死ぬという、ね、無常を基点として考えているからである。しかし、生まれ、死ぬということは、あくまでもそれは

五蘊の中の色・受・想・行というものが止滅するのであって、識は止滅しないんだということだね。

第八話　天のカルマと未来仏マイトレーヤ





九一年一月二十七日　新東京本部

◉真理によって与えられる境地

人間の観念というものは、その魂を不幸にする。この世の中において、絶対的な価値観と、そして相対的な価値観の二つがある。この絶対的価値観、これが真理であり、相対的価値観、これがわたしたちをこの世でうまく生活させる考え方ということになる。そしてこの絶対的価値観は、一時的には人生において大変な目にわたしたちを追い込むかもしれないが、それを乗り越えると、平安で自由な境地をわたしたちに与えてくれる。

例えば例を挙げよう。ここにミカンの箱があり、そのミカンの箱の中に、腐ったミカンが入っていたとしよう。その箱に入っているミカンを、百人の者が取り囲んでいて、九十九人が、「このミカンの箱の中のミカンは腐っていない」と言っていたと。一人だけ、「いや、このミカンの箱の中は腐ってるんだ」と言ったとしよう。その百人の中において、中のミカンが腐っ

ていないことは、真実かのように見える。しかし、一人の言っている、「実際、そのミカンの箱の中のミカンは腐ってるんだ」ということの方が絶対的真理であると。

あるいは交通量の大変多い、しかも信号のない所で、普通、車が百キロぐらい出し、ビュービューと走っている所があったとしようと。ここで二人の者が論争したと。Aは、「ここは普通に歩いて渡れる道だよ」と。Bは、「ここは渡れば必ず車にはねられ死んでしまうよ」という話をしたと。そして、このAという人がどんなに思い込んだとしても、その道を横断すれば、必ずはねられ死んでしまう。これが真理である。

◉妥協は利益を招かない

オウム真理教の実態について、社会が、そしてマスコミが、そして国家

権力が、いろんな叩き方をしてきた。そして、いかにもグロテスクな反社会的な教団であるかのように、一生懸命、一生懸命印象付けた。これは、いわゆる腐ってないミカンが箱の中に入っていて、それを腐ってるんだと言ってるようなものである。

わたしは、そしてわたしの弟子たちは、それにじっと耐え、今まで活動を続けてきた。なぜ妥協しないのかと。例えば出家にしろ、あるいは、社会的にもっと教団の良さをアピールすればいいじゃないかという考え方がある。しかしそれをなぜやらないのかと。あるいは出家制度をなぜもっと妥協した形にしないのかと。あるいは教えを、なぜもっと一般の人に受け入れられるような教えにしないのかという不平不満、これは信徒の中にも起きた。

しかし、教えを変更すること、あるいは出家制度を崩壊させることは、

この日本にとって、いや、地球にとって、決して利益を招くものではなく、大いなる損失を招くものであるとわたしは考え、じっと耐えてきた。そして、こういう叩かれ方をしても、オウム真理教の教勢が衰えるはずがないと。

実際、この二月に入り、もう既に約二百名の人が入信してると。おそらく二百五十名ぐらいまでいくんじゃないかと思います、入信が。そしてこの入信の二百五十名という数字は、オウム真理教の全盛期の数字の半分であると。つまり半分にまで入信が拡大してきてると。しかもそれだけではなく、弟子たちはステージを上げ、これから大いに衆生に対して法を説き、そして真理を広げ、苦悩する魂を救済することを誓い、活動している。

◉修行の土台「四預流支」

修行の土台は何かというと、皆さんもよく知っているとおり四つの預流支である。

これは根本的なグル、あるいは仏陀、あるいは、その背景にいるシヴァ大神に対して、一切けがれのない心を持ち、帰依の心を持って教えを学び、活動し、布施・奉仕の実践を行なうと。同じようにその法に対して、つまり真理に対して、その教えを純粋に学び、その真理を広げると。そしてその真理の実践者、つまりサマナに対して、自分たちの先を行く人であるということを確信し、教えを学び、真理を実践し、奉仕活動を行ない、布施の実践を行なうと。

こう言うとまず、「いや、わたしはサンガには帰依してないよ」と言う人がいるかもしれない。しかしそれは、教団に対する布施イコール、サン



ガに対する布施であると考えれば、今ここに集まっている信徒の方すべてが、この三宝に対して帰依を実践しているんだということが確信できるはずである。これが第一の預流支である。

また預流支の話かと思われるかもしれない。しかし、今日はちょっとね、少し高度な話をしたいと考えています。それはもう、十月から始まった説法も第四回目だから、そろそろ次のステップを踏んでもいいかなと思っているわけです。

では、第二の預流支は何かというと、これは例えばこのように「特別説法会」、あるいは「ポアの集い」「勉強会」等で法を聴き、あるいは『マハーヤーナ』を読み、説法テープを聴き、法を学ぶと。これを何度も何度も行なうと。

そしてその法にのっとり、自分自身の生き方を見つめ、修正するところ

は修正し、あるいは発展させるところは発展させ、考えると。これが第三の預流支であると。

そして、第四の預流支は、その学んで考えたものを実践すると。これが第四の預流支である。

例えば、どういうことかというと、布施という考えがある。この布施に対して実際に考えてみ、そのメリットとそれから損失――つまりディフェクトを考え、当然メリットの方が多いわけだから、それを実践すると。これが二、三、四、の四預流支であると。

あるいはプラーナーヤーマがあると。そのプラーナーヤーマを実際に記憶し、次に自分にどのプラーナーヤーマが合ったか考え、そしてそれを実践する。これが二、三、四の預流支であると。

そして布施・奉仕。この布施には財施・法施・安心施という三つの布施

があるわけだが、そして、それと奉仕、それから持戒を守ることにより、自分自身はいかような世界へ行くのかと、あるいは社会的活動を行なうことにより、いかなる世界へ転生するのかを十分に熟知し、それにのっとり、修行するということが大切である。

◉『南伝大蔵経』翻訳の成果

今日は皆さんに、あまり説いていない天界の話をしたいと思う。なぜわたしが今までこの天界の話をあまり説かなかったのかというと、まだまだわたしの中に疑問が残っていたからである。つまりそれは今仏典でいわれている天界と、わたしが経験している天の世界との間に大きなギャップがあったからである。しかしそのギャップが少しずつ少しずつ埋められ、そして今日は、ある程度あなた方に話してもいいかなと。それと同時に、未

来仏マイトレーヤの特徴についても、少しお話ししてもいいかなと。
それは今オウム真理教で、そうだね、十数名がそれにかかりきりになり、必死に訳し、わたしもそれに加わり検討している『南伝大蔵経』の正しい翻訳が、少しずつ少しずつでき上がってきた段階で、わたしの中に確信ができたから皆さんにお話しするわけである。
真理というものは、たとえ真理の体現者というものは、たとえそれをね、知っていても話せないことがあります。それはどういうことかというと、例えば、今までの仏典と違っているとしましょう。自分の見た体験が正しいのか、あるいは仏典が正しいのか、徹底的にこれを吟味します。なぜならば、もし自分の経験がイリュージョン、つまり幻影であるのならば、それは大変な悪業を積むことになるからです。そして慎重に、慎重に、皆さんに真理の法を展開していくと。

わたしは、いろんな宗教家がいろんな世界観を出してるが、大変うらやましいと思う。なぜならば、その間違いというものが、どれほどの悪業であるかを知らないで出せるからである。

◉第一天界——四大王天の世界

ではまず第一天界についてお話ししましょう。この第一天界というものは、もちろん四預流支の実践を行なう者が、最も行きやすい世界であると。この四預流支の実践者が行きやすい第一天界。この第一天界には四人の大王がいます。よって「四大王天（しだいおうてん）」という言葉があります。そしてここの、四大王天の役割は、まず多くの国、例えば日本、アメリカ、あるいはフランス、イギリスといったようなね、多くの国々、まあ、一国一国に一人の王がついてると考えてください。そしてこれらの王様は、堅固に国を統治



させるという役割があります。

そしてもちろん、この堅固に国を統治させる王様は、前生において善政をなした聖王が転生する世界でもあります。現代でいうならば、少し小さくまとめるならばね、例えば会社があり、その会社に対して円満経営を行なわせ、従業員が大変平安に生活してると。こういうところの経営者が行く世界でもあると考えてください。

もちろんこの天界というものは布施、そして持戒がなされていないと、その長となることはできません。これが一番目の第一天界の王です。

この堅固に統治する大王は寿命が九万歳といわれています。この九万歳は、人間の寿命と同じ時の流れで九万歳です。そして人間の寿命が最長に延びる、つまり、八万歳まで延びる時期があるわけですが、このときは、天界とそして人間界とがつながります。よって自由に天を見ることができ

ます。あるいは天へ行き来することもできます。

◉四大王天の神々

第二番目の四大王天の王様、これは成長天といわれる王様です。この成長天は妖精（ようせい）を支配し――ま、わたしは以前の説法で、妖精は第一天界に属するという話をしたと思うが、やはり間違いなかったみたいだね――妖精を支配し、それから守護神を支配し、統治します。そして人食い鬼神、これも支配していますと。で、これは何を統治するのかというと、植物の生長、あるいは生命体の成長に関わることを行なっているという天界です。

そして三番目の第一天界は何かというと、空（そら）、天空ね、天空を支配している王様です。この大王は雨、風、あるいは気候等を管理します。そしてこの王様は龍ね、まあ、「龍宮の宴（うたげ）」の龍、この龍を支配していると。

そして四番目の大王は衆生の、つまり一般の人たちが外傷、つまり例えば事故とか、あるいはケガとかから守られるような働きをしている王様です。

で、この四つの大王。これを称して四大王天といいます。

ここで、一番目の天界に関しては、例えば先程も述べたとおり、経営者、あるいは王様が、それを善政によって統治した場合、行く世界であるということがいえます。そして成長天に関しては、生き物を殺さず、生き物の成長を温かく見守った人、この人が行く世界であると。それから天候を司る大王の世界へ転生するためには、これは、すべての人が幸福に、つまり豊かな食べ物ね、あるいは船の航行、その他の天候をひたすら祈る、そういう役割の、例えば神官あたりね、その魂が行く世界であるということがいわれています。そして最後の庶民を外傷から守る。これは、例えば軍隊

の英雄その他が行く世界であるといわれています。もちろん王が行く場合もあります、それは。

そして、この中で、この第一天界で最も幸福に生きるためには、先程述べた真理を実践し、そしてその四つの条件の一つをクリアした者、この魂が第一天界へ至ると、その四大王天の中でもトップとなり、そして与えられた寿命以上の寿命を与えられ、享楽、その他の喜びを満喫することができるといわれています。これが第一天界です。

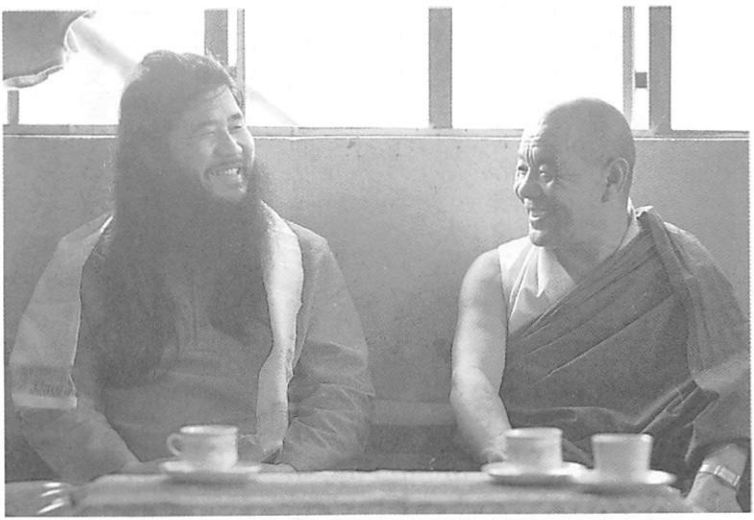
◉第二天界——有能神の世界

では、第二天界。これは皆さんも知ってる三十三天といわれている。この三十三天の主である有能神——これはね、オウム真理教の言葉がどんどん変わっていってるのは、わたしの体験をもとに、その漢字、あるいは文

字を見るだけで、皆さんが一目瞭然になるように変えていっています。ですから、例えば「現正覚」という言葉があるとした場合、それは「現実に正しく悟っている」。あるいは、「現世において正しく悟っている」というふうに読めばいいわけであって、例えば、先程言った「成長天」といったら、「成長を司ってる天界」であると読めばいいわけです。そういう形で、今どんどん言葉が変わっていますが、その言葉を使うならば、三十三天の主は有能神であると。

この有能神とは何かというと、この現世において多いに功徳を積み、そして大変才能が豊かで、その才能をもって他の魂のために活かした魂が行く世界です。例えばオウム真理教でいうならば、アパーヤージャハ、あるいはマイトレーヤといった者が行く世界であると考えてください。

第八話　天のカルマと未来仏マイトレーヤ



◉第三天界——流転を支配する双生児の天

そして、第三天界、この第三天界は流転を支配する双生児の天といわれる世界です。流転を支配する双生児の天とは何かというと、悪業に対しては強烈に裁き、善業に対しては、その善業の果報を与えると。もちろんこの範疇(はんちゅう)に入るのは有能神の世界までということになります。

この双生児の天とは何かというと、この双生児は、この現象界と、そして低位アストラルの支配者であるということを意味しています。これが第三天界の魂なわけだが、この第三天界の主になるためには、要するに輪廻(りんね)転生の法を説き、そして多くの魂をできるだけ高い世界へ引き上げた、そういう魂が行く世界であると考えてください。

例えば葬式のときにポアをすると。もちろん葬式のときにポアをしないで、ただ単にお経だけ読んで、たくさんのお金をもらうと地獄へ落ちます。

こういうこの二つのパターン。端から見たら全然同じなわけだけども、結果は全く違ってくると。一方は夜摩神として生まれ変わり、つまり輪廻転生を支配する双生児の天人として生まれ変わり、もう一方は地獄へ落ちることになります。

◉除冷淡天から神聖天へ

そして第四天界。これは都史多天とも兜率天ともいわれてる世界です。この世界はチベット語の訳では歓喜の園、歓喜天という訳が与えられています。実際これは結果を論じた訳であって、正しい訳としては除冷淡天ということができます。

この第四天界に住む魂は四無量心の実践者であると。例えば仏陀の弟子であるスダッタね。つまり祇園精舎の寄進者。あるいはマッリカー妃ね。

こういった人たちが行った世界とされています。つまりどういうことかというと、すべての衆生に対して、愛、哀れみ、称賛、そして平等心を持つ修行をし、それが達成できている人が行く世界であるということです。そして第五天界、この第五天界は創造満足天と。ここの魂は自分の欲しいものをつくり出し、満足し、楽しんでいます。もちろんこれは神変、つまり神通によってつくるわけです。

第六天界は、他の魂を神通により創造したものによって供養し、そして喜んでいる世界と。ここでの魂の長はマーラ、大魔王といわれてるものです。この長、欲界の大王に対して、ここの住人は供養し、また、下からも供養されます。よってここでは一見楽しか存在しません。しかし、もちろんこの世界は無常です。

そして、ここまでの世界は瞑想優位というよりも、功徳優位の世界です。

この上にくる梵天(ぼんてん)、この梵天界を正確に訳するならば、神聖天、あるいは神聖神ということができます。この神聖神とは何かというと、この梵天界へ生まれ変わるためには瞑想が必要で、その瞑想の中に悦、喜、軽安(きょうあん)、楽の少なくとも一つが含まれてなければならないという条件があります。そして、そのステージにおいて、この神聖天の住人、あるいは大臣、あるいは王様という形で転生します。

ま、これより上の世界に光音天その他があり、ニルヴァーナが存在するわけですが、在家の修行において頑張った場合、限界はこの神聖天であるということがいえると思います。

◉非神——マイトレーヤ

わたしが皆さん方に対して確信を持った理由をお話ししましょう。実は

わたしは前生――つまり一生前だね、阿修羅の王様でした。そして王様、正確な言い方をすると修行者となり、大教団を率い、それから推薦され王となり、そして王の権力を譲り、そして、人間界へ次は転生したと。

で、わたしは自分自身の前生がマイトレーヤであると確信しています。それは守護神の声、それから自分の修行上の体験、それからアストラルでの体験、これを踏まえての話です。ところがどうもおかしいと。なぜおかしいのかというと、マイトレーヤは第四天界、つまり除冷淡天、四無量心を実践してる天界で生きているはずであると。であるにかかわらず、わたしが阿修羅(あしゅら)の王様であるというのはおかしな話だと。これについて結論が出るまで、皆さんにその話をしないことにしようと考えていました。ところが、面白いことがわかりました。

その面白いことというのは何かというと、まず仏陀釈迦牟尼が人間界へ

第八話　天のカルマと未来仏マイトレーヤ



降りる前、仏陀釈迦牟尼は除冷淡天、皆さんの聞きやすい言葉を使うならば、都史多天において、「白閃光（びゃくせんこう）」というホーリー・ネームだね、がありました。白閃光とは何かというと、白い閃光を放つ者ということです。そして現在除冷淡天で生活しているはずのマイトレーヤのホーリー・ネームはなんと「非神」、神にあらずと。この神にあらずとは何かというと阿修羅を意味しています。つまり阿修羅とマイトレーヤとは同体であると。

そしてもう一つ面白いエピソードがありました。それはマイトレーヤの率いていた弟子たちは破戒が多いんだね。戒律を守らないわけです。そしてこの除冷淡天から落っこち、そして阿修羅となったというエピソードがあります。

そして、もう一つこれはわたしの弟子がアストラルで読んだ教科書ね、これでは、尊師は大変ステージが高いんだけども、弟子たちのステージが

低いからしょうがないんだよと。で、これは何を意味してるかというと、マイトレーヤのステージは高いが、弟子たちは低いという内容と一致しています。まあ、この他にもその証明としてはたくさんあるわけです。

ということは、そろそろ、マイトレーヤ――自分の前生も含めて合致したわけだから、信徒の皆さんにね、アピールしてもいいかと思ったわけです。ただ、それと同時に大変残念な気持ちがしました。それはわたしの弟子はやはり戒律を守らないんだなと。ね。だから一説によると五十六億七千万年後に、マイトレーヤは降誕するということになってるんだなと。

◉絶対的な真理の展開を

このように経典とそれから体験が一致した今、わたしは今まで以上にはっきりと皆さんにいうことができる。それは、今わたしたちが与えられてる

価値観は幻影であると。わたしたちにとっての利益は何かというと、それは布施、奉仕、持戒の実践、そしてカルマを落とされて瞑想し、できるだけ高い瞑想体験を得ることであると。しかもそれだけではなく、多くの衆生に、この真理の法を展開しなければならないと。いかなる圧力がかかろうとも、例えばわたしが断頭台に立たされ、首を切られようとも、あるいは百万ボルトの電流が流され、死刑に遭おうともね。わたしは、わたしの経験した真理と、そしてわたしの今研究している、学んでいる、仏典とをもとにね、皆さんにもっともっと激しい、そして絶対的な真理を展開したいと思います。

わたしがなぜこういう話をしたかというと、よく凡夫はこのような話をします。オウム真理教のいってることは一つの真理だろうと、わたしはこの現実をうまく生きればいいんだと。

しかし、それはちょうど先程述べたとおりね、大通りをものすごいスピードで車が突っ走っていると、その中を「わたしは平気である」と渡るのと同じように、無謀でそして破滅を招きます。腐ってるものは腐ってるもの、腐っていないものは腐っていないもの、真理は真理、邪悪見解は邪悪見解であるということをはっきり認識しなければならない。そして一時の損を捨て、久遠の絶対的な利益を得ていただきたいと思います。

◉五蘊を神々に変える修行

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。その避けられない死に対して、どのようにアプローチするのか、そしてどのように生きるのか、どのように心を完成するのか、それがわたしたちの課題です。わたしたちのこの肉体・感覚・イメージ・意志・意識というこの五つの集まりを

神々に変え、そして最終的には絶対的な境地であるマハー・ニルヴァーナへと安定させることがわたしたちの修行の狙いです。

では最後に、何をなせば天界へ行くのかと。それは簡単です。まず真理を学び、布施をなし、奉仕をなし、そして天界へ行くぞという思念をすると。わたしは来世、天へ行くぞと。絶対天界、行くぞと。わたしは来世三悪趣へ落ちないぞと。そのためには少しぐらいの苦痛は落とさなければならないと。

さあ、皆さんは一時的な喜びを求め、長い長い間苦しみの世界へ没入しますか。それとも勇気を出し、努力をし、天界へ行きますか。わたしは皆さんのお手伝いができれば、幸いだと考えています。

第九話　幸福に至る預流の実践





九一年二月一日　京都支部

◉大発展の暗示

一九九一年の一月は、まあ、オウム真理教にとって有意義な月であったといえます。それはなぜかというと、この社会的逆風の中、最盛期の入信数の約半分、二百六十五名の入信者があったということです。つまり、またオウム真理教の教勢が拡大の方向に向かったなということを如実に表わした月だと思います。

もともと人間の持っている情報というものは、無常を根本としています。そして、確信のないこの現代にとって、マスコミの入れる情報もそうだし、あるいは行政の入れる情報もそうだし、すべてが信じられない情報であると。しかし、その情報の量によって、その人たちは自然とそのデータに左右され、苦しまなければならない状況が訪れているんだと思います。

この二百六十名が達成できたということは、今年一九九一年は、オウム

真理教にとって大発展の年の暗示をしてるなというのがわたしの実感です。

◉四つのポイント――最高の修行体系

では、いったいなぜこの逆風の中、信徒が急に増えたのかということになると思います。これは、一般人生を歩く上においてもそうだし、あるいは事業をなす場合もそうだけども、これからわたしの話すことをしっかりと理解していただければ、あなた方にとって大きな利益が待っているはずです。

もともと救済というものは、あるいは事業でも構いませんが、発展させる要素は、そんなに多くのポイントがあるわけではない。まず、そこに勤めてる人が、どれほど熱心にその会社のことを思っているか。そして、勤めている人、一人一人のキャパシティー、つまり能力がどの程度のもので

あるか。次は、その会社の営業内容について正確にアピールできる、つまり営業の部門がどの程度充実してるか。そして最後に、出す商品がどの程度しっかりしたものであるかということがポイントとなると思います。

これをオウム真理教に当てはめるとどうなるかというと、まず、弟子たちがどの程度オウム真理教に対して、愛を持っているかと。そして、救済に対して意識ができてるかということ。第二番目は、弟子たちのステージが、どの程度のものであるか。つまり、他教団の布教なさっている方々と比較して、どちらの方が高い霊性、および心の成熟をなしているかということ。そして、第三番目は、その教義というものは、どういうものであるか。その教義は、しっかりしてるかどうかということ。そして、この教義を流布する人たちが、しっかりした意識付けを持ち、その商品に対してアピールできるかということになると思います。

これら四つのポイントをチェックするならば、まず、第一の教団に対する愛、および布教に対する確信というものは、まあ、クンダリニー・ヨーガの成就者を中心として、十分に持ち合わせていますから、当然法を展開する段階において、その法を広げるにあたっては、全く障害がないということがいえると思います。

そして、第二番目のステージについても、これは、五カ月、六カ月、十カ月といった長い間の集中修行、一日二十時間に及ぶ修行をこなしている弟子たちですから、その精神力、および霊的体験というものは、それは大変なものであるということができるでしょう。

第三番目は、わたし、先程間違ったけどね、それを流布するプロパガンダはどうなってるかと。これについても、しっかりと四無量心の瞑想を行ない、すべての衆生を済度することが救済の意味合いであり、それを実践

することが弟子の役割であるということを認識している弟子たち、そして信徒の皆さんの二人三脚の協力により、これだけの結果が得られたんだと思います。

そして、第四番目のオウム真理教の持っている法、この法は、原始仏典、まあ今、パーリ三蔵といわれている原始仏典を土台とし、それにチベット仏教を味付けし、そして密教的ヨーガの飾りを付けたという世界でも類を見ない最高の修行体系。そして、その本質には、死を超越する三界をすべて理解できる修行システムが組まれてるわけですから、商品という点に関しても、これはいかなる宇宙のどの部分から攻められても、もちろん地球、あるいは日本の他の教団がそれを攻めようとしても、攻め落とすことのできない金城鉄壁の城だといわざるを得ません。

皆さんもご存じのとおり、マスコミのオウム真理教叩きの内容を見て、



教義に触れてる部分があるかといったら、全くそれはありません。ということは、これから先、これだけの発展が、まあ一月になされたわけですが、二月、三月とどうなっていくのかと。当然、弟子たちの修行、それから信徒の皆さんに対する四つの預流支の徹底、これを布教し、皆さんの心の平安、そして功徳の充実というものを図れば、オウム真理教が救済の要の教団とし、世界最高の宗教となり、そしてすべての魂の苦悩を取り除くことのできる唯一の宗教へと発展していくことは疑いないでしょう。

◉いい経営と悪い経営

わたしがなぜ、営業、あるいは仕事、あるいは商品という言葉をここで使ったかというと、皆さんに宗教という言葉を使うより、この一般的な言葉を使った方がわかりやすいと考えたからです。

　では、ここで、いい経営、そして悪い経営といったものを少し述べてみましょう。いい経営の仕方というものは何かというと、いかなる外的情報にも左右されず、自己の信念を貫き通し、そしてしっかりとした商品を出すと。そして、社員を信じ、社員教育を充実させ、愛社精神を持たせ、会社、そして一人一人が豊かになるという運営を行なうと。では、悪い経営は何かというと、情報に翻弄(ほんろう)され、情報に流され、舵(かじ)取りを誤り、そして社員教育をしないと。こういった形のようなものになります。そして、上がってきた利益は、当然経営主体の、まあ株主、あるいは社長が独占すると。この前者と後者では、五年後、十年後、二十年後、五十年後には、大きな違いが出てくるはずです。

◉幸福に至る道――四つの預流支

わたしは皆さんに、何をなせば幸福になるのか、あるいは何をなせば不幸になるのかを説かなければならないと考えています。まず、皆さんが幸福になる道、それは先程も述べた四つの預流支である。

この四つの預流支とは何かというと、まずグル、あるいは仏陀、シヴァ大神という根本的な魂に対して信を持ち、そして布施、奉仕の実践、これを行なうと。これを帰依といいます。第二は、真理に対して、このグルの説く法、仏陀、諸々の仏陀の説く法に対して、あるいはシヴァ大神のお残しになった法に対して、その法を学び、そして流布するということ。そして、三番目は、この真理を実践している者たちに対して、奉仕、あるいは布施の実践を行なうと。まあ、オウム真理教でいうならば、それは教団に対する奉仕、あるいは布施ということになるでしょう。これが第一の預流

支であると。

　そして、第二の預流支は、ひたすら真理を学び、その真理を記憶修習する。記憶修習するとは何かというと、例えば四つの預流支という、まあ皆さんに送られた『預流相応』というのがあります。この『預流相応』を、一回サッと読むんではなく、一日二回、三回と読み、それを毎日毎日続けると。そうすると、そのデータが深い深い意識に到達し、無意識のうちに身・口・意の行為が、この預流の実践へと導かれるようになるわけです。これが第二番目の預流支です。

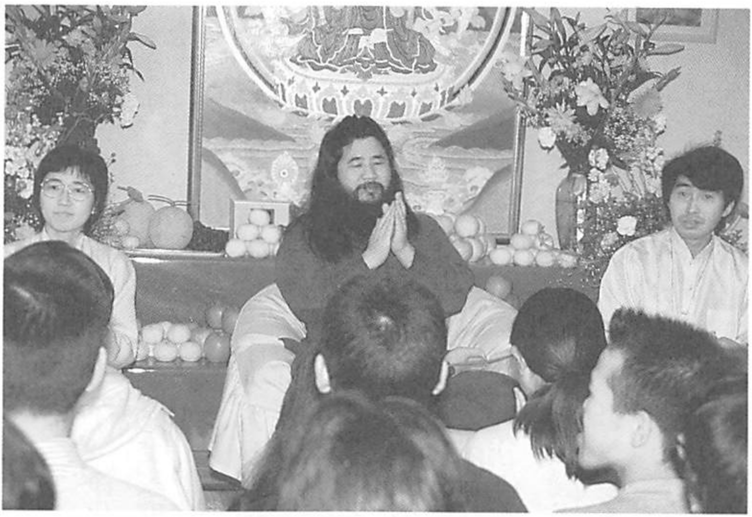
　そして、第三番目の預流支、それは、その記憶修習したデータをもとに、自己の身（しん）・口（く）・意（い）に合わせて検討を加えると。果たして、わたしのこの行為は真理にかなってるんだろうかと。この言葉は真理にかなってるんだろうかと。この心の働きは真理にかなってるんだろうかと。ということは、

本を読みながらでは考えることはできませんから、しっかりしたデータのもと、その検討に入るということが大切です。

そして、この検討に入った、身・口・意の三つの行、サンスカーラに対して、最後は実践を行なうと。あれっ、おかしいぞと。なぜ、おかしいかというと、身・口・意、例えば、殺生・偸盗・邪淫を離れると。例えば、妄語・綺語・悪口・両舌を離れると。例えば、二正勤二正断を行なうと。七覚支を行なうと。そして、禅定を行ない、ん？　これは？　そうです、四預流支の第四番目は、真理によって作意したものを実践する、つまり聖なる八支の実践を行なうことです。これが、四預流支なのです。

◉幸福な現実生活と死の超越

そして、この四預流支を皆さんが実践することによって、皆さんの口の



けがれ、心のけがれ、身のけがれが浄化されます。浄化されることによって、すべてが見えてきます。それにより、結婚して家庭生活を営んでいる人は、そのレベルでどうしたら自分自身が幸福になれるか、あるいは周りを幸福にすることができるかが理解できます。あるいは、自営業を営んでいる人は、どうしたらもっとお客さんに喜ばれ、そして自分自身が幸福になることができるか、あるいは自営業を発展させることができるかが、おのずと理解できます。事業を営んでる人は、一人一人の行為を理解する前に、まず自分自身の身・口・意の行為を理解できるわけですから、当然、社員の身・口・意の行為を理解でき、こいつは自分にとって、要するに自分を愛しとると。自分についてきとると。こいつはそうじゃないと。じゃあ、こいつをこういうふうな形にして鍛えていけば、もっと会社は発展するといったような、正しいものの見方ができるようになるわけです。

つまり、この四つの預流支というものは、宗教上の最終地点へ到達する道だけではなく、この現実の世界において、ものを正しく見つめ、成功させる最高の秘儀ということもできるわけです。

もちろん、この現実の生活、これよりもっと大切なもの、それは死を超えるということがあります。つまり、人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。どんなにこの世で大金持ちになろうとも、事業を成功させようとも、愛し合おうとも、死という、その死の境目によって苦しまなければならないという事実があります。この四つの預流支は、その死を超越する道、そして現実生活をより良く生きる道、その二つを表わしてる最高の教えだといわざるを得ません。

◉四預流支がもたらすもの

よく日本では、八正道という言葉が使われます。この八正道という言葉が使われる背景には、本来は、この四つの預流支が存在していなければいけない。しかし、この四つの預流支は、全く説かれません。そして、いきなり正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定といった、何だかわからない漢語的な言葉が並びます。

実際は先程も言ったとおり、まずひたすら真理のデータを入れ、記憶修習し、その次の段階で、自己の身・口・意について十分に考えると。思索すると。まあ、これが正見解・正思惟になるわけだけどね。

そして、四つの悪業、つまり妄語・綺語・悪口・両舌という四つの口の悪業を語らないと。

そして、殺生・偸盗・邪淫を離れるという正行為の実践を行なうと。

そして、七覚支の実践。つまり、正記憶修習から、無頓着の修行に至るまでの七つの、七覚支の実践を行なうと。これが、正生活ですね。
そして、今なしている善業を増大させ、今までできないけども未来によってもっと大きな善業を積もうといつも考えてると。あるいは、今なしている悪業をやめ、未来において生じるかもしれない悪業の根を断ち切ると、という二正勤二正断というものが来ます。
そして、最終的にはサマディに入るまでの、この無常を徹底的に記憶修習によって叩き込むと。そして、最終的にはサマディへと入り、解脱をすると。
ところが、そういう説明を一切せず、八正道という言葉がポンと浮いてくるわけです。これと同じように、現実の言葉、この言葉に翻弄（ほんろう）されると、わたしたちは苦しまなければならない。その裏側にある実態を理解するた

めにはどうしたらいいかというと、先程も述べたとおり、しっかりと三宝に対して帰依をなし、教学をなし、そして考え、実践すると。この四つをなしてください。これをなすことにより、今皆さんの置かれているあらゆる立場において、大きな利益を与えることでしょう。

第十話　四預流支――歓びと安らぎを





九一年二月八日　千葉市民会館

◉オウム真理教の教えとは？

初めての、千葉での説法会。この千葉県という地は、わたしにとっても大変縁のある地であり、そして、オウム真理教にとっても、大変縁のある地であるといえます。

特に、この地では、例えば、マハー・マーヤ——今はホーリー・ネームをマハー・マーヤからヤソーダラーというふうに変わりましたけども——正悟師、そして、ウッパラヴァンナー正悟師、メッタジ師、チェータナー師等、多くの成就者を輩出し、そして、わたしも、この千葉県の船橋という所で、数年間生活をしたという大変いわれの多い地です。この地で第一回目の説法会が開かれたということは、近い将来において、この千葉にオウム真理教の道場が建つことは疑いないでしょう。

実際、いろいろなマスコミのオウム・バッシング等の中、一九九一年の

一月は、二百六十五名の新しい信徒の方が入信なさり、教団もまた発展の方向へとベクトルの向きを変えていっている次第です。これもひとえに、弟子たち、そして信徒の皆さんの精進のたまものだと思います。

しかし、いくら器が大きくなったとしても、実体の伴わない宗教であるならば、それは存在する価値がない。これが、わたしと、そしてオウム真理教の教えであるといえます。これはどういうことかというと、ただ単に拝む宗教、あるいはただ単に一時的な心をだます宗教であっては仕方がないんだというのが、このオウム真理教の発足の動機だからです。

オウム真理教の教義は、原始仏典、そして北伝系のタントリック、あるいはヴァジラヤーナといった修行体系、そして原始ヨーガの系統を組み入れています。しかし、このシステムは、別に新しいわけでも何でもなく、実際二千五百年前、仏陀釈迦牟尼が同じような方法によって、弟子たちを

成就させたという記述が南伝系のパーリ仏典には記されています。

●真理——幻影を超える幸福の法

実際、この現実の世界、つまりこの人間の世界というものは、わたしたちをマーヤへと取り込みます。このマーヤとは何かというと、生まれ、そして死にゆく間、いかにもそれは真実で、そして絶対的に壊れないかのようにわたしたちを惑わします。しかし、実際は、多くの示唆をこの人生の中で与えられているはずです。

それは例えば仏典にも、閻魔大王（えんまだいおう）が登場し、そしてこの世で悪業をなした者に対して、お前は四人の召し使いを見なかったのかと、あるいは、三人の召し使いを見なかったのかという言葉によって、生・老・病・死という四つを表わし、それが実際わたしたちにとってこの現実の世界が実際は

マーヤ、幻影なんだよということを表わしているんだということを説いています。

つまり、真剣にわたしたちの周りの人たちを観察することにより、あるいは周りの生き物たちを観察することにより、わたしたちがいくらそれを考えたくないと考えても、そこには生、病、そして老、死という四つは存在するんだと。そして、それを避けることはできないし、逆にそれをしっかり知り、そして、その死を超越した意識状態によって、死後の世界、あるいはこの人間界以外の世界を理解することこそ、わたしたちにとっては、本当の幸福なんだよということを説いている教え、これが真理なのです。

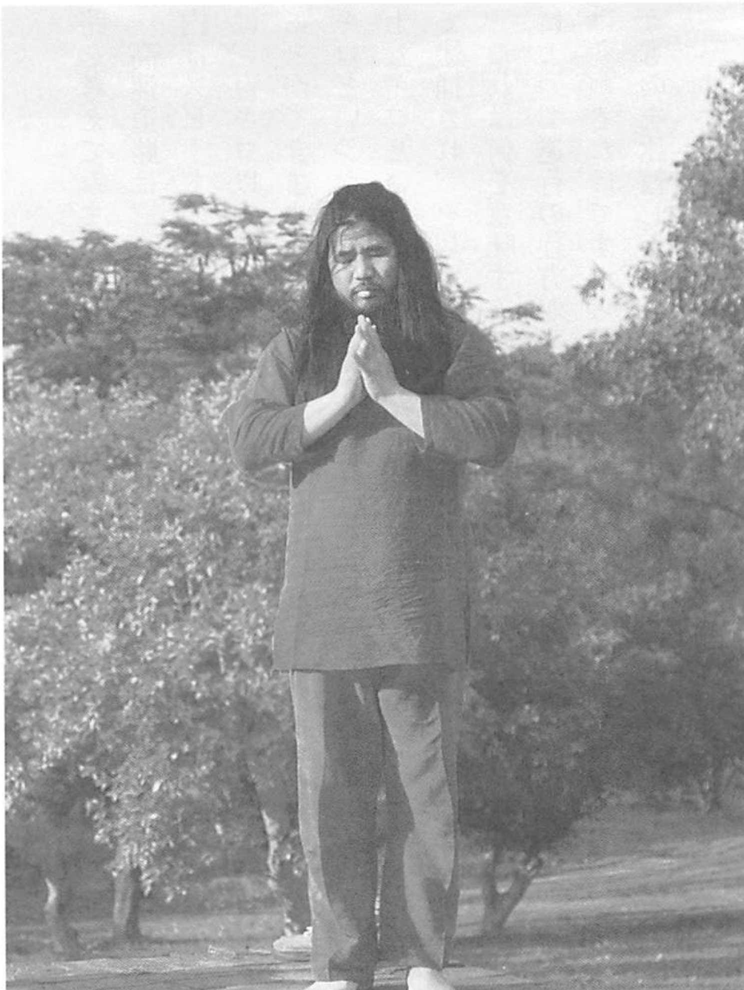
◉四預流支の実践――絶対的な不動の境地へ

そして、その真理に対するアプローチは、例えば「五根五力（ごこんごりき）」という形

で著わされたり、あるいは「七覚支（しちかくし）」という形で著わしたり、あるいは「聖なる八支（はっし）の実践」という形で著わされたりします。しかし、それを総合的に見るならば、いずれも「四つの預流支（よるし）」の中に抱合されると。この預流支という言葉は、ちょっと聞き慣れない難しい言葉のように見えますが、この預流支というのは、その流れに預かる、つまり流れに身を任せるという意味です。

　では一体、何の流れに身を任せるのかというと、この人間界から、上向きの流れに身を任せると。そして、欲望の天界を打ち破り、欲望のない天界に入り、そして形のない天界に入り、最終的には絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の境地へ到達すると。その流れが存在し、その流れに身を任せることが、預流者なんだということです。

　では、これは何にたとえられるでしょうか。例えば、高速道路と一般道



路を考えてみましょう。
　高速道路は、八十キロ以内はスピードの出し放題、あるいは、百キロ以内はスピードの出し放題といった空間があります。この空間、このエリアは、百キロ以内で走行することは可能です。つまり、九十九キロまで出すことができます。ところが一般道路になると、六十キロ、あるいは四十五キロといった低速運転をしなければならない。この六十キロ、あるいは四十五キロといったときに、九十九キロのスピードを出せば、当然違反として逮捕され、そして罰金を払わされます。
　これは何を意味するかというと、同じ道路であったとしても、その条件によって運行の仕方が変わるのだということ。同じ道路であってもこれだけ変わるわけですから、わたしたちが、この世というものと、あの世というものを比較した場合、当然、その運行の仕方は変わるといわざるを得ま

せん。

そして、この世、あの世を通して、いかにしたら幸せに、そして間違いなく生きることができるのかということが、この預流支の実践です。もちろん、この預流支の実践は、この現代、けがれた社会においては、大変生きづらくなる面があるかもしれません。しかし、これをしっかり実践することにより、心は安定し、絶対的な不動の境地へと到達し、そしていかなる条件であろうとも、堂々と自分の生きたいように行けると、生きることができるということがいえます。

◉何をもって預流支というのか

では、何をもって預流支というのでしょうか。

この預流支の第一は、三宝(さんぼう)に対する帰依(きえ)です。では、三宝とは何かとい

うと、オウム真理教においては、グル、そして真理、そして教団ということになります。「いや、そうではない。仏教では仏・法・僧といっている」とおっしゃるかもしれない。

この仏・法・僧の仏とは、覚者、あるいは供養値魂、あるいは調御丈夫、あるいは天人師といわれた、要するに法に長けた者、法に精通した者、法を悟った者という意味です。

そして第二番目の真理とは、これは、まあパーリ語ではサッチャというんですが、絶対的な真理と。では、絶対的な真理とは何かというと、生・老・病・死を超越する法ということになります。

そして、サンガとは何かというと、これは、中国の言葉ではソウギャといわれていますが、つまり僧の集い、つまりこれは教団ということになるわけです。

　そして、第一番目の預流支は、この三宝に対する帰依を表わします。帰依とは何かと。それは、その三宝に対して布施や奉仕の実践を行なうということです。これが第一の預流支です。

　そして、第二番目の預流支は何かと。これは、記憶修習です。一体何を記憶修習するんだと。それは、説法を何度も何度も聴き、法を記憶する。あるいは、『マハーヤーナ』その他の書籍を何度も何度も読むことによって、その法を記憶すると。その記憶をするときには、一切自分の考え方を入れないと。これが第二番目の預流支です。

　では、第三番目の預流支とは何かと。それは、その記憶修習したものをもとに、自分自身の身の行ない、口の行ない、心の働きについて分析すると。そして、ザンゲするところはザンゲし、あるいは励みとするところは励みとすると。

例えば、例を挙げるならば、自分自身が功徳を積んでいれば、法を何度も何度も記憶修習し、それにのっとり考えることにより、「よし、このまま修行を続ければ、自分は間違いなく預流者になれる」と。あるいは、身・口・意において悪業があるとするならば、「よし、これは戒める対象である」と、そして「悪業を積まなくするぞ」と。これが第三番目の預流支です。

◉真理の教えを自分のものに

そして、第四番目の預流支は何かというと、これは、その思索したものを実際に実践すると。つまり、身の行ない、口の行ない、そして心の働きについて、それを実践するということです。

もちろん、この身の行ない、口の行ない、心の働きについて実践する大

第十話　四預流支——歓びと安らぎを



ざっぱな目安はあります。それは何かというと、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れ、周りの者に対して慈しみのある態度で接すると。妄語・綺語・悪口・両舌を離れ、親和な言葉を話すと。そして、心に貪・瞋・癡を離れ、「四無量心」によってその心を形成すると。真理というのは、いうなれば、この身・口・意に対する三つのアプローチしか存在しません。

しかし、その、例えば四無量心とは何かと。それは、愛・哀れみ・称賛、そして無頓着、平等に見つめることであると。では、愛とは何だと。わからないと。哀れみとは何だと。わからないと。称賛とは何だと。わからないと。無頓着とは？　わからないと。いや、それは国語辞典を見ればわかるじゃないかと。しかし、実際、例えばこの四無量心の愛一つ取っても、相当多くの経典があり、これをもって愛となすという教えがあります。そういう教えを一つ一つ確実に自分のものにしていくこと、これが預流支な

のです。

預流支の「支」とは何かというと、その自分自身の魂を人間界からまず欲天を貫き、欲のない天界を貫き、形のない天界を貫き、そしてマハー・ニルヴァーナに至るための支えであるということです。この四つの支えさえあれば、必ずどんな魂でも、最終的にはマハー・ニルヴァーナへと到達できると。これが預流支なのです。

◉老・病・死を超えて

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。そして、死だけではなく、病、あるいは老い、これも避けることはできない。この避けることのできないものに対して、目をつぶるのではなく、しっかりと見つめ、どのようにしたら病を克服し、老いを克服し、死を克服できるのかと。そ

れを説いているのが真理なのです。

例えば、皆さんにお届けしてある、『真理相応』。この『真理相応』の中には、何をなせば三悪趣（さんあくしゅ）へ生まれ変わり、何をなせば天へ生まれ変わるかの教えが説かれています。あるいは、『預流相応』では、いかに現実の、例えば転輪聖王（てんりんせいおう）であったとしても、三悪趣から脱却できないんだと。それよりも、法を、真理の法を具足（ぐそく）し、それを実践して初めて本当の幸福な道を歩くことができるんだと説かれています。

これからもわかるとおり、現実は現実としてある程度踏まえ、そして必ず死ぬ、病む、老いるという、この三つに対してしっかりと学び、アプローチし、それを超える。もし、これを超えることができるならば、本当の意味での安らぎ、あるいは幸福、あるいは歓喜といったものを体験することができるでしょう。

実は、現在、ヤソーダラー正悟師は極厳修行に入っています。これは、三月二十日からシャクティーパットが始まるための準備です。つまり、信徒の皆さんをいかに高いステージへ引き上げるかと、そのために、ヤソーダラー正悟師は四十日間の極厳修行に入ったわけです。

で、これは何かというと、彼女はかなりの神秘的な力を持っていますが、そのレベルより、もっともっとステージを上げ、そして皆さんに、その神聖なエネルギーを振りまき、それによって皆さんに高い経験をしていただきたいと。これは、わたし、それからヤソーダラー正悟師、それから教団一同の願いです。

このように、しっかりとした教義、そして実践があってこそ、初めて宗教というものは存在する価値があると考えています。

◉高い世界への転生の条件

では、信徒であるあなた方は、一体何をすればいいのかと。実際、四預流支の実践とは何かと。あるいは、どの世界へ生まれ変われるんだと。

これは、横浜、東京の説法でも述べたとおり、まず現実の生活においてしっかりとした態度で生きると。そして、自分の与えられたパートをしっかりと演じると。そして、多くの才能を救済のために役立たせると。これらの条件が、第一天界、あるいは第二天界の条件であると。もちろん、この第一天界、第二天界へ生まれ変わるためには、布施、そして持戒の実践が必要です。

では、第三天界へ生まれ変わるためには、どのようにしたらいいのかと。これは、多くの真理と縁のない人を真理と結び付け、そして死・老・病という三つを根付かせると。そして、中間状態に入ったときに、その人が苦

しまないように導いてあげると。これが、第三天界へと至る道です。

では、第四天界へ至るためには、どのようにしたらいいのかと。これは、教義を多く記憶修習し、しっかりと理解し、その法を説くと。つまり説法すると。そして、心に四無量心を根付かせると。この魂が第四天界へと生まれ変わります。

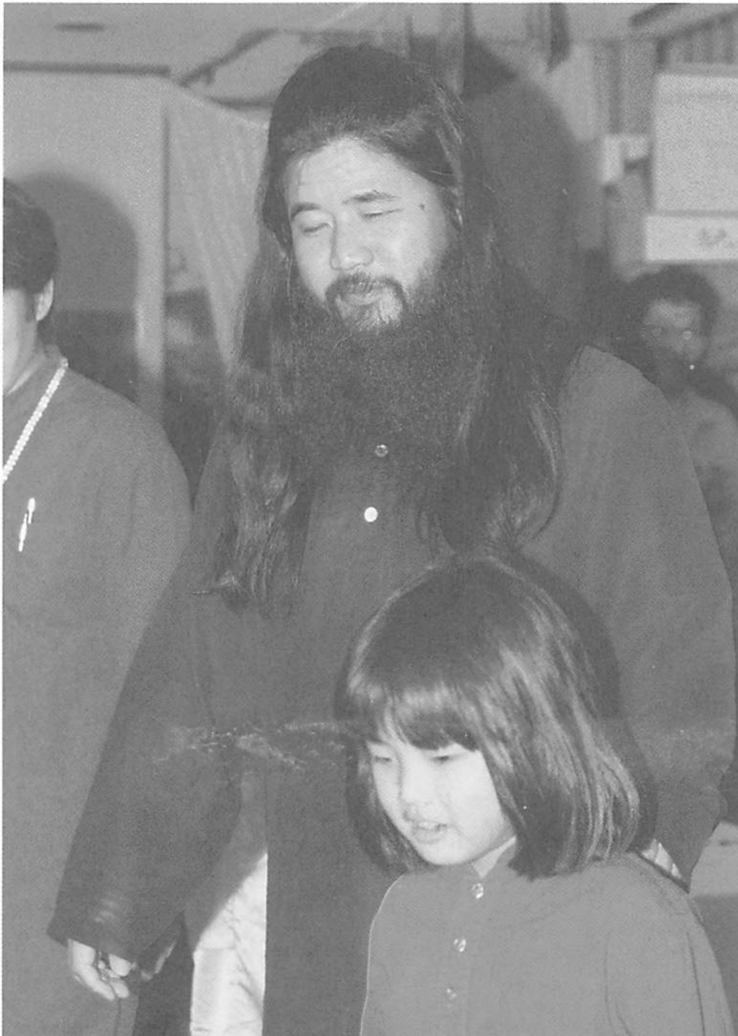
では、第五天界へとは、どのようにしたら生まれ変わるのかと。これは、修行をなし、実際神通力を身につけ、それによって救済した者、これが第五天界へと転生します。では、第六天界へとは、どうかと。これは、その神通を個のためではなく、もっともっと多くの者のために実際に役立てた者、これが第六天界へと転生します。

しかし、これら第一天界から第六天界までは、欲の天界です。つまりまだ貪り(むさぼ)が存在しています。そして、この貪りを離れ、サマディに入り、もっ

と高い色界、つまり欲のない形状のある世界へと転生した者、これを神聖天といいます。そして、有、つまり、形のあるものに対して全く頓着が生じなくなったときに、無色界へと転生します。非形状界へと転生します。そして、その魂が、多くの魂を、その形状のない世界へと導いたとき、その魂はマハー・ニルヴァーナへと転生するわけです。

●自己を利する生き方を

　ということは、まず第一天界、第二天界を目指し、頑張るぞと。そして、多くの人を真理へと導き、第三天界へと転生するぞと。そして、多くの法を記憶修習し、記憶修習した法によって、その法を説き、第四天界へと転生するぞと。余力があれば、一生懸命修行し、神秘的な力を得て、それを個のため、あるいは多くの魂のために使い救済することによって、第五天



界、第六天界へと転生するぞと。貪りを離れることによって、神聖天へと転生するぞと。このように考え実践すること、これが聖なる魂の、あるいは智慧（ちえ）ある魂の生き方です。

「そんなこといったって、この人間の世界は楽しければいいんだ」と、ね。こう考えられる方がたくさんいらっしゃるかもしれない。しかし、この世の寿命と、それから天の寿命とでは、まるっきり違います。この短い間を精進することによって、長い生を経験することができるわけです。

例えば、虫の寿命と人間の寿命を比較した場合、当然人間の寿命の方が長い。これは、徳の差を如実に表わしています。そして、自由の度合も違います。

これと同じように、人間の世界と天の世界を比較した場合、当然天の世界の寿命は、人間の世界より相当に長いと。仏典によって記述は統一されれ

ていませんが、第一天界では、九万年とも、あるいは九百万年ともいわれています。そして、第二天界では、三千六百万年と。第三天界では、約一億年の寿命が保証されているといわれています。もちろん、これらの天界においても、その徳の差により、その寿命は変化します。よって、皆さんがここで努力をすること、真理の実践を行なうこと、そして記憶修習することは大いに皆さんに利益を与えるはずです。

最後に、この現世の欲望というものは、わたしたちにとめどのない欲求を持たせます。それによって、わたしたちは、逆に欲望を満足させようと思えば思うほど、苦しまなければなりません。ところが真理の与えてくれる平安というものは、逆に、それを求め、修行すればするほど心を安らがせてくれます。これは、前者が邪見解であり、後者が正見解であることを表わしている一つの証明だと思います。

人の寿命は、いつ尽きるかわかりません。今日、この瞬間を境に、もう一度四預流支の実践を心に根付かせ、実践してください。



第十一話　天へと向かう聖なる実践



九一年二月十一日　福岡支部

◉実在する神々の世界

人間の寿命は、わずか八十年である。もちろん、その寿命を全うできない人もいるし、あるいはその八十年より若干長く生き、まあ例えば百五十年ぐらい生きる人もいるかもしれない。しかし、せいぜいが百五十年である。

ところが、第一天界の寿命は、九百万年といわれている。そして、第二天界はその四倍、第三天界はその十六倍、第四天界はその六十四倍、第五天界はその約二百五十倍、第六天界はその約一千倍といわれている。

これらの天界の内容は、日本の仏教においてあまりはっきりとした形で表現されていなかった。しかし、わたしの前生の経験と、そして南伝仏教の翻訳によって、はっきりとした形で、今、その全貌(ぜんぼう)がつかめるようになってきている。そして、その世界観は、間違いなく心の現われであり、

もし唯心的、つまり心によって世界が形成されているとするならば、その世界は間違いなく存在すると考えた方が妥当である。

例えば、例を挙げるならば、オウム真理教の高いステージの人たちが、人を飲み込んだヴィジョン、あるいは人に飲み込まれたヴィジョンというのを見ている。これは、飲み込むヴィジョンの対象は何かというと、神であると。そして、これを実際に、飲み込まれる者の大きさと、飲み込む者の大きさの比によって計算するならば、第一天界と同じように、飲み込む神の大きさは二百五十メーターと。飲み込まれる者の大きさは、まあ、一般の人の大きさで十分であるということになる。

わたしがなぜ今日こんな、まあ、一風変わった話から入ってるかというと、神の世界は、わたしたちが今見ている動物の世界と同様、存在するのだということを皆さんにお話ししたいからである。そして、それを前生の

経験によって経験している人たちが、オウム真理教においては多く存在するのであるということである。

◉転生の条件――第一天界から第六天界まで

では、第一天界へは、どのような魂が転生するのだろうかと。あるいは、第二天界へは、どのような魂が転生するのだろうかと。あるいは、第三天界へは、どのような魂が転生するのだろうかと。そして、第四天界へは、第五天界へは、第六天界へは、あるいは第六天界以上には、どのような魂が転生するのだろうかと。その話を皆さんにすることにより、皆さんが何をなせば天へ至れ、そして何をなせば悪趣へと落ちるかの話をしたいと。

実際、天へ至るためには、布施、そして戒律の遵守(じゅんしゅ)、この二つの条件のもとに、次の条件を満たすならば、必ずや天へ至ることができると。

まず、第一天界へ至るためには、布施、プラス持戒、プラス、例えば会社を経営している人が、あるいは国家の運営に携わっている者が、しっかりとその人の約束を全うし、そして部下に対して、あるいは国民に対して、大きな恩恵を与えると。このような魂が、死後第一天界へと転生する。

この第一天界には、四つのパートがあり、その四つのパートの一つが、今言ったとおり、布施、プラス持戒、プラス事業、あるいは国家の運営に携わり、そこに関与する人たちを幸福にした場合、転生できる世界なのである。

第一天界の第二のパートは、成長天といい、これは布施、プラス持戒、プラス生き物を慈しむと。そして、木々、あるいは小動物に至っても殺さず、慈しみの心を持つと。このような魂が、第一天界の第二パートへと転生するのである。

では、第一天界の第三パートはどうかというと、これは布施、プラス持戒、プラス、ドクターが一生懸命病気を治し、そして多くの魂の傷を癒したと。あるいは、軍隊が自国民に傷を付けないように、体を張って戦ったと。こういう場合に行く世界。これが、第一天界の第三パートである。

そして、第一天界の第四パートはどういう世界かというと、これは、例えば干ばつや、あるいは洪水といった多くの天災、この天災を密教的技法によって食い止めることのできた魂。この魂が第一天界へ生まれ変わるのである。

つまり、整理をすると、布施、持戒を土台とし、事業や国家の運営において、しっかりとした仕事をなし、そして関係する人たちに多くの利益を与えた者。次に、生き物を慈しみ傷付けず、その成長に携わった者。次に、自分と関係のある魂の肉体に傷を付けないように努力する、あるいは傷付

いた者をしっかりと治した者。そして第四のパートは、天候の正常な状態を祈り、五穀豊饒（ごこくぶにょう）の状態を導いた者。これらが、第一天界へ生まれ変わるのである。

では、第二天界へはどのようにしたら生まれ変わるのかというと、これは有能神の世界といい、この現世の才能を救済に役立てた者。この魂が第二天界へ生まれ変わるのである。

例えば、文章のうまく書ける人が、その文章を書くことによって救済活動のお手伝いをしたと。あるいは、絵をかける人が、その絵をかくことによって救済活動のお手伝いをした等々、こういう魂が、布施、持戒とともに自己の才能を救済に役立てた場合行く世界、この世界が第二天界である。

では、第三天界へはどのようにしたら行けるのかというと、これは、この人間の世界だけではなく、死の世界、この死の世界に対して、しっかり

と功徳を積んだ者ということになる。死の世界についてしっかりとした功徳を積むというのはどういうことかというと、例えばオウム真理教のように、真理の団体に対して入信をさせると。入信をさせることによって、例えば自分と縁のある魂が正しい輪廻転生を行なうと。そのような導きをなした者、多くの導きをなした者、これが第三天界へと生まれ変わると。

では、第四天界へはどのような魂が生まれ変わるのかというと、これは、これら三つの条件に加え、心の冷淡さをなくし、四無量心の心をもって接した者。ということは、つまり多くの魂に真理の説法をなした者。この説法をなした者が、第四天界へと生まれ変わるのである。

そして、第五天界は、修行で身につけた神通によって、個人個人の済度をなした者。第六天界は、その神通によって、多くの魂を一気に済度した者ということになる。

第十一話　天へと向かう聖なる実践



しかし、この六つの世界は欲の世界であって、貪りを持っていてもよろしいということになっている。そして、貪りを離れた者が、これら六つの条件の一つ、あるいは二つ、あるいは六つ全部を備えたならば、それは梵天界、今オウム真理教の正確な訳語では、神聖天、つまり神の聖の天界へと転生することになる。

つまり、はっきりと、これをなせばこの世界へ生まれ変わると、あれをなせばあの世界へ生まれ変わるという教えが存在しているのだということを皆さんは理解しなければならない。

◉苦楽は心の現われ

では、布施をなし、そういう要素はあるんだけども、戒律を破った場合どこの世界へ生まれ変わるんだと。この魂は、阿修羅の世界へ生まれ変わ

るのである。阿修羅の世界へ生まれ変わり、そして神と同様の美しさを持ち、そして若干寿命はエネルギーを漏らすがゆえに落ちるけども、ほとんど変わらない生活をする。

　では、悪趣へは、どのようにしたら生まれ変わるのかと。悪趣へ生まれ変わる条件は、いろいろな味著（みじゃく）、つまり「味」に対する執着によってそれが生起されるのである。ここでいう味とは、食べ物の味だけではない。例えば、感覚的なフィーリングもそうであるし、あるいは好きな音楽等、あるいは視覚的なもの、つまり五感に関するものすべてが三悪趣へ落ちる導きなのである。

　例えば、発酵したものを好む者は、まあ、それと連動して腐ったもの、腐ったものにね、まとわり付く虫とかに転生すると。あるいは、貪りの心が強くて、そして対象に対して布施の心のない者は、その心の働きによっ

て、火元素優位の餓鬼の世界へと転生する。あるいは、心に嫌悪の修習をした者は、孤独な世界、無限の闇の地獄へと転生する等々がそれである。

つまり、仏教観の背景にあるものは何かというと、心が即、その社会を形成するということである。もちろん、今生きているこの瞬間瞬間、この瞬間瞬間も、心の現われによって私達は苦楽を経験することになる。ということは、真理の実践を日々行ない、教学をし、そして真面目に修行に取り組んでいるならば、この現実の生活だけではなく、来世も良くなるということである。

◉幸福への土台作りを

では一体、何をなせば絶対的な幸福に至り、そして未来際において、必ずや色界へ到達し、無色界へ到達し、マハー・ニルヴァーナへと到達する

のだろうかと。これは、「四つの預流支」以外に存在しない。

では、四つの預流支とは何かというと、まず第一は、三宝に対する帰依である。オウム真理教では、この三宝とは、グル、真理、そして教団ということになる。このグルと真理と教団に対して、まず帰依をすること。つまり、自分の生き方の根本をこの三つに置くこと。これが第一の預流支である。

そして、第二の預流支は、その教え、この教えをたくさん聴き、あるいはたくさん読み、そこで記憶を修習すると。これが第二番目の預流支である。

そして、第三番目の預流支は、その記憶したものをもとに、自分自身の身・口・意の三つの業を分析すると。そしてそこで、心において考え修正すると。例えば、悪いところについては、ザンゲをなし、良いところにつ

いては、もっと伸ばそうと努力すると。これが第三番目の預流支である。そして、第四番目の預流支は、その考えたものを実践するということである。

つまりこれは、例えばこの福岡から東京へ至ろうとすると。そのとき、いろんな人が、こっちの道が正しいよ、こっちの道が正しいよと、ね、例えばまあ、十人の人がそう言ってたと。十、違った道を提唱したと。その、どの人を信じるかということが、第一番目の預流支である。これを三宝にしなさいよということである。

で、第二番目は、まず信じたならば、その人の言っている道筋をひたすら記憶しなさいと。そこで、自分はこの道は好きだとか嫌いだとか考えないで記憶しなさいということである。

第三番目は、記憶した道を、次は検討しなさいよということである。例

えば、もし途中で山道があり、ね、冬であるならば凍結するかもしれないから、チェーンを持っていく必要があるなとか、あるいは一方通行があるならば、どっちの方向から入ろうかとかね、そういうことを検討する。これが、第三番目の預流支であると。

そして、第四番目の預流支は、その記憶し検討した道を、しっかりと進みなさいよということである。

◉すべては四預流支から

もちろん、今、この自分自身の時点から、マハー・ニルヴァーナへ至る地図がはっきりと存在してるわけだから、それを知っている三宝に対して帰依をし、そしてその道筋である経典を記憶し、そしてその経典にのっとり、自分自身の三つのカルマ、つまり口のカルマ、心のカルマ、身のカル

マについて検討し、そして第四番目にそれを修正するならば、当然いかなる人でも、ニルヴァーナ、そしてマハー・ニルヴァーナへと到達するはずである。

そして、この四つの預流支の最後は、「聖なる八支の道」を含んでいるし、あるいは「七覚支」を含んでいるし、あるいは「五根五力」を含んでいるし、あるいは「二正勤二正断」を含んでいるし、あるいは「四如意足」を含んでいるということになる。つまり、四預流支は、初めであり、最後であり、すべてなのである。

これを皆さんが一生懸命実践なさり、そして天の道へ、少なくとも人間以上の世界へ生まれ変わらんことを願い、今日の講話の最後としたいと思います。

第十二話　転生を見すえた修行の土台





九一年二月十七日　東京本部

◉魂の落下のプロセス

魂が落下していくプロセス、これが十二縁起の法である。

十二縁起のプロセスを簡単に説明すると、まず、真我が三グナに干渉される。ここで無智、あるいは無明（むみょう）という煩悩（ぼんのう）の最も根本的な働きによって、一部の魂はそこから落下する。そして本来自分に備わっているはずの絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という三つの条件をかなぐり捨て、外的なものに対して、それよりももっと素晴らしいものがあるんじゃないかなといって落下が始まる。そして、その結果名色（みょうしき）が生起する。この名色とは何かというと、自と他の区別である。そして、この自分と外界、対象に対して、その差異によって楽しみを求めるようになる。これが仏教的な言葉を使うならば愛である。そして、その楽しみを何度も何度も修習（しゅじゅう）するようになる。修習することによって貪（むさぼ）りが生じる。そして、執着、つまり取（しゅ）

著（じゃく）が生じる。この取著が生じることによって、対象に対して、これは我がものであると、これはわたし自体のものである、よって、このわたしの得ようとしている対象を傷付けるものは何人たりとも許さないと。ここで嫌悪が生起する。そして、完全な形での分離が生じ、有（う）、つまり、欲界（よっかい）・色界（しきかい）・無色界（むしきかい）のどこかの世界へ転生し、そして、生が生じる。

　未熟な魂はこの生を楽しむ。実際は楽しむということは正しくなくて、求め続けると言った方が正しい。おかしい、おかしい、わたしの求めている楽しみは一体どこにあるんだと。これでもない、これでもないといって楽しみ続ける。そして、その背景にある、苦しみに少しずつ少しずつ気付くようになり、自分自身が楽しみだと思っていたものは、実際は苦しみだったんだということに気付くわけである。

◉苦から解脱へ

ここでのポイントは、この苦しみであるということを認識した後、真我が独存位に即帰れればいいんだが、その前の十二のプロセスが弊害となり悪戦苦闘が始まる。そしてまず、苦しみを取り除くために、今まで落下したプロセスの逆向きの道、つまり求める方向から引っ込める方向へと思索が始まる。

そして、ある人は仏教に、ある人は原始ヨーガへと傾倒していく。ここでしっかりしたグルにつくことができるならば、しっかりとした信が持て、そしてクンダリニーが覚醒（かくせい）する。クンダリニーが覚醒することによって、悦、つまりエクスタシーが生じる。このエクスタシーはわたしたちをこの現象界へと縛り付けている、例えば味覚による喜び、あるいは性的な喜びといったものよりも、強いエクスタシーを与える。よって、まず、この性

的な喜びや、あるいは食物を食べることによって得られる喜びからの解放が始まる。

なぜ、ここで解放が始まるのかというと、わたしたちはこの性的な喜びや、あるいは食物による喜びを何度も何度も修習しているから、瞑想によるエクスタシーがたとえ生じたとしても、その本当の価値と、それから自分達が抱いてきた幻影の価値との比較、この比較が正確にできないわけである。

しかし修行が続き、クンダリニーが覚醒し、そのエクスタシーが頂点に達し、体が痺(しび)れるような最高の喜悦の状態が生じると、わたしたちは性的な喜びや、あるいは食物による喜びから解放される。

そして、このエクスタシーはわたしたちの心に大変なる喜び、しかもそれは実体のない喜びを提供する。普通魂は対象を得たときに喜びが生起す

るが、その対象がない状態で喜びが生起するということは、もともとそれこそが本当の、わたしたちの求めていた一つの要件であったことに気付くからである。

つまり、外的対象による喜悦より、内的エネルギーが生み出す喜悦こそが真我の求めていた喜びだから、それによって本当の喜びは生起するわけである。そしてそれにより、いろいろなストレスから解放される。なぜならば、ストレスは対象と、それから魂との間によって生じる一つのギャップによって、ストレスが生じるわけである。ということは対象なくして喜悦、喜びという二つの条件が備わった段階で、心身が大変軽快となる。そして、魂は対象に対して一切心が動かないで、そして内側が充実した状態、楽を経験する。この状態に入ると、外的刺激に対して反応しなくなり、内側の世界の散策が始まる。これがサマディである。

第十二話　転生を見すえた修行の土台



そして、今までの自分の邪悪見解、あるいは謬見解に気付き、如実智見となる。如実智見となるがゆえに食欲や性欲だけではなく、いろんな要素に対して貪りを離れる。そして貪りを離れることにより独存位の境地、つまり解脱が生じるわけである。

これが小乗仏教のすべてである。しかし、このような内容は講話で聞くべきものではない、本来は。本来はあなた方が自分達の修行によって、あるいは記憶修習によって経験しなければならないものである。

オウム真理教の前身である「オウム神仙の会」、そしてオウム真理教の初期の当時は、わたしが信徒の皆さんの修行の指導に当たり、そして多くの神秘的な体験をその場で与えていた。そして今年の三月から、例えばね、三月の「超能力セミナー」あたりから、少しずつ以前と同じような、皆さんに神秘的な体験を、まず、していただこうかなと考えています。

まず、手始めとしては超能力セミナー。この超能力セミナーに実際出て、この六時間の厳しい修行の間に、皆さんに真実の体験というものをね、していただきたいと。これは、わたしたちが苦から解脱へ至るための第一歩である。

◉真我を成長させるためのプロセス

では、この無明から始まり解脱に至るプロセスは、なぜ必要かというと、無智を取り払うためなのである。あるいは無明を取り払うためなのである。つまり、大いなる経験、そして経験によって経験そのものが苦であるということを認識する、そして解脱するという、真我を成長させるためのプロセスなのである。

では、この解脱に至るプロセスは、どのようにしたら認識できるのかと。

それは、まず、この現象の成り立ちについて、わたしたちは小さいときからいろいろな教えを受けている。しかし、そのような謬見解にとらわれるのではなく、本質的な教えを繰り返し繰り返し記憶し、それにのって考えると。これが必要なのである。

では、基本的な考えとは何かというと、まず、わたしたちの身(しん)・口(く)・意(い)における善業を増大させ、そして悪業を滅することである。では、その根本となすものは何かというと、すべてを認めるということである。では一体何を認めるんだと。それはすべての魂の生存、すべての魂の安らぎ、そして、すべての魂の至福というものを認めるということである。そして十戒にしろ、あるいは三つの布施にしろ、そこがポイントになっている。

例えば例を挙げてみよう。殺生、これは魂に大変な苦痛を与える。よって、なしてはならない。偸盗(ちゅうとう)、これは盗まれた方にやはり大変な苦痛を

与える。よってなしてはならない。邪淫、これは盗まれた異性の対象に対して大変な苦痛を与える。よってなしてはならない、となる。
しかし、いにしえの聖者方は単純にそう説かず、その時代、その時代の観念に合わせ、その時代の人が実践しやすいような風潮をつくったわけである。
もともと、この世は心がつくり出した幻影である。そして、この幻影を打ち砕くためには、以前わたしたちと同じように苦しみ、そして上流の流れ、つまり欲界・色界・無色界へと至る流れに乗り、最終の解脱を果たした多くの魂の道しるべを、一つ一つ確認しながら進む、ということが大切なのである。

◉叡智へと至る六つの道しるべ

では、その一つ一つの道しるべとは何かと。あるいは、何を根本とすればいいのかと。それは、出家においては聖なる八支(はっし)の道であり、在家においては六つの極限である。

ここで、六つの極限のメリットについて少し話をしたい。六つの極限の第五番目。これは正(しょう)サマディということになる。この正サマディの徹底は、わたしたちが布施の徹底から二正勤(にしょうごん)二正断(にしょうだん)の徹底に至るまでの実践を行ない、それを実際に究竟(きゅうきょう)の瞑想によって理解するプロセスである。

究竟の瞑想とは何かというと――ここで言うね――無思考の状態に入り、そしてわたしたちのバルドーが一体どのような形成状態にあるのかと。要するに、それまでの布施の徹底ができてるかと、あるいは持戒の徹底ができてるかと、あるいは忍辱(にんにく)の徹底ができてるかと、あるいはそれをチェッ

クするための、精進の徹底はできてるかということを見ること、これが第五番目の正サマディの徹底である。

　例えば例を挙げるならば、最終の解脱をすると、色界の光と、そして欲界の光、この二つの光が絶えず自分自身を包んでいる。そして黄色い光の色界の光が、例えば自分を包んでる場合、ああ、わたしは貪りのカルマがまだ強くて布施の心ができてないんだなと、もっと布施の徹底をやるべきであると。あるいは情報の光が、例えば白い光であるならば、わたしはヴァジラサットヴァの功徳は積んでいるが、まだヴァイローチャナには至っていないんだなと。あるいは、この欲界や色界の光のバックに黒い光が存在すれば、わたしの無明は、まだ完璧に止滅してるわけではないんだなと。これが正サマディの徹底である。

　そして、自分自身の修行をそれにより修正し、最終的には叡智の徹底と

いうことになる。この叡智には二通りの意味合いがある。第一の意味合いは神秘的な力、これを有するということである。その基本は六神通（ろくじんつう）、六つの神通ということになる。そして第二の叡智は、これは素晴らしい思索力。つまりすべての現象を見抜き、そしてそれを動かすということである。

◉六つの徹底の完成のために

では、この六つの徹底を完成するためには、何をなせばいいのだろうかと。それは四預流支（しよるし）の実践である。では、四預流支とは何かというと、まず三宝に対する帰依（きえ）である。この三宝とは、まず覚醒者、真理、そして、真理に集う者に対する帰依となる。オウム真理教においてはグル、そして真理、そして教団ということになる。これが第一番目の預流支である。

この預流支という言葉の意味合いは、先程も述べた、欲界から色界、そ

第十二話　転生を見すえた修行の土台



して無色界をぶち抜き、最終の解脱をする流れに身を投じる、身を投じるための支え。これが預流支である。

では第二の預流支とは何かというと、これは正記憶修習ということになる。つまり真理のデータをいかに多く根付かせるか。なぜならば、わたしたちは小さいときから正しくない見解をたくさん学んできている。それに対して、真理のデータを同じぐらい入れないと、正しくフェアに判定することはできないと。そういう意味で第二番目の預流支、これは正記憶修習ということになる。

では第三番目の預流支は何かと。これは、その正記憶修習したものにのっとり、わたしたちの身・口・意について熟考する。あるいは諸現象についてで熟考するということである。これによって教義の理解が深まり、そして苦蘊（くうん）からの解放が始まる。

では第四の預流支は何かと。これは三で考えた身・口・意に対する熟考、諸現象に対する熟考を実際に実践するということである。

つまり、この四預流支とは、まず、何をなす、何をなすかの規定をなす、これが第一番目の預流支であると。二番目は、その帰依をした、あるいは規定、この規定に対してしっかりと知識を根付かせると。三番目はその知識を十分に分析し、使いものにするようにすると。四番目は使いものになった、その思索レベルを実践段階に移行すると。

実はこれは、この現実の社会において生きる上においても大きな利益を与えてくれる考え方である。例えば、自分自身がどのような生き方をするのかと、ね。例えば、それは自由主義にしろ、あるいは共産主義にしろ、あるいは、その自由主義でも共産主義でもない政治的な考え方にしろ、まず、その根本的な土台となる本、あるいは人に対して傾倒すると。二番目

はその人の政策、これを何度も何度も読むと。三番目はそれを自分の生活に当てはめてみると。四番目は実践すると。

それをなすならば、例えば日本にいても共産主義の実践ができるし、あるいはアメリカにいても共産主義の実践ができるし、あるいはソビエトにいても自由主義の実践ができるということになる。

そして、いかなる邪悪な空間にあったとしても、この四預流支を繰り返し、繰り返し実践するならば、わたしたちは真理から外れることなく、必ずや上流に至り、アカニシタ天、つまり色究竟天（しきくぎょうてん）へと転生し、マハー・ニルヴァーナへと入るのである。

◉堅固な修行の土台を

ところで、オウム真理教は一九九一年に入り、ベクトルが下降から上昇、

つまり発展の方向へと向かい出した。これはひとえに、一生懸命マスコミや権力がオウム真理教を叩いていて、その叩かれている間に、わたしの出家した弟子達、あるいは信徒の皆さんが一生懸命、教学、瞑想といった修行の土台を固めていた結果に他ならない。

これはちょうど次の比喩にたとえることができる。ここに二本の杭を考えてみよう。一本目は十メーターの杭、二本目は六メーターの杭と。一本目の杭を五メーター打ち込むと。二本目の杭を一メーター打ち込むと。ね。そしてこの杭の大きさを同じだとしようと。わたしたちが視覚的に見ることのできる長さは五メーターであり、杭の大きさは同じである。しかし、この杭に対して横から力を加えた場合、十メーターの杭は安定し、なかなかもぎ取れるということはないであろう。ところが第二番目の六メーターの杭は案外あっさりともぎ取ることができるであろうと。これは何を意味

してるかというと、記憶、そして記憶修習の違いを意味しているのである。
わたしたちが、この人間の生、そして死、そして中間状態、これを正確に正しく生きるためには、それほど深く真理を根付かせなければならないということなのである。そして、これだけ深く真理を根付かせるならば、いかなる魔の軍勢に攻め込まれたとしても、平然とそれをはねのけ、最高の至福、最高の歓喜、最高の自由を得ることができるはずである。

第十三話　絶対幸福への道





九〇年七月三十一日　シャンバラ精舎

◉四法の成就――転輪聖王より困難な道

転輪聖王は、この人間の世界において、四州を統治し、そして死を直前にして出家し、身を壊し、三十三天へ生まれ変わる。そして、人間界において積んだ功徳によって、三十三天の天女に囲まれ、大いなる五妙欲を享受し、満足するのである。

しかし、君たちはそうではない。日々、泥にまみれ、夜は夜で教学し、瞑想している。君たちは四州を手に入れることはできないが、四法を成就することができる。そして、転輪聖王が達成できない、地獄を破る、餓鬼を破る、動物を破る、あるいは人間界に生まれ、それ以上に生まれて人生の苦難というものをすべて破ってしまう。それが、今の君たちなんだ。そして、転輪聖王に生まれ変わることと、この四つの法を達成することと、どちらが難しいかというと、四州を治めることは、君たちが今達成しよう

としていることの十六分の一にも当たらないと仏典ではいわれている。

◉素晴らしき四法とは?

　では、この四法とは何かというと、これは、グル・シヴァ大神・諸々の覚者に対して、真に信の心を養う。つまり、グルというのは自分たちを供養値魂に到達させるただ一つの魂であると。そして、神通を具足していると。シヴァ大神は、偉大で、完全で、絶対なる方、主の中の主であり、王の中の王であり、覚者の中の覚者である。これは、ヴィパッシー仏と何ら変わらない。そして、救済者を救済なさる方であり、最高の無量心をお持ちの方であると。諸々の覚者に対しては、諸々の覚者が最上の正しい悟りに到達なさった方であると、天の師であると、わたしたちの師であると、尊敬に値すると、そして供養に値すると、そのように考える。そして、ダ

ンマに対しては、わたしたちの煩悩を滅尽するために、ただその法しかないと考える。
　そして、それを実践することによって煩悩が弱められ、煩悩が止滅し、そして天へ生まれ変わる。そして、最終的には天を超え、絶対的な自由・幸福・歓喜の空性、マハー・ニルヴァーナ、真我独存の状態を導き出す。また、君たちの先達に対しては、自分の先を行く者であって、そして人間を超えた心の持ち主であると、そして、彼らはいずれ天へ生まれ変わり、あるいは菩薩となり、あるいは覚者となる魂であるという尊敬の念を持つ。これが完全に成就できれば、第一の法を成就できたといえる。
　では、第二の法は何かというと、グルに対してできるだけ多くの接する機会を持ち、法を聴く。あるいは、現代的な言葉を使うならばテープによる学習、本による学習を行なうことによって、法を記憶する。できるだけ

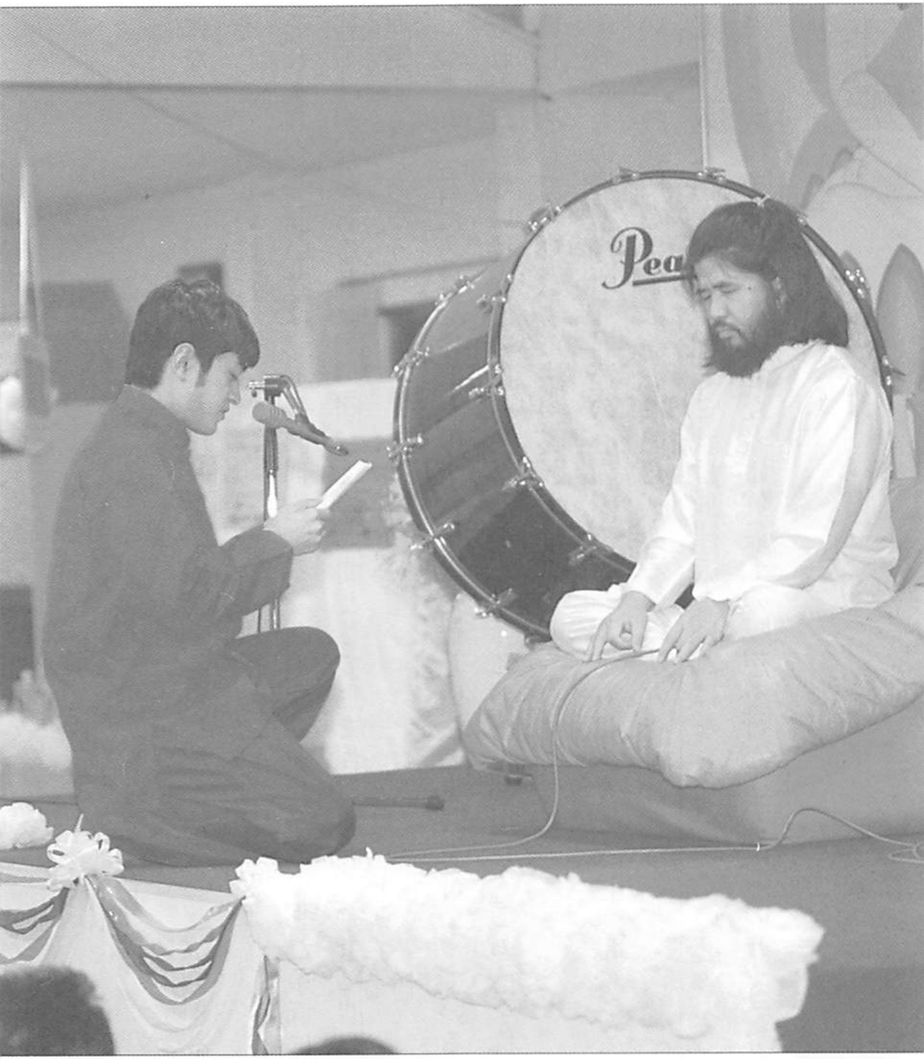
多くの法を記憶する。これが第二の法の成就である。
そして、第三の法の成就は、学んだ法によって自己の人生を見つめ、自己の行為を見つめ、自己の心を見つめ、自己の言葉を見つめる。そして、それを検討し、修正を加えていく。そして、シヴァ大神の弟子として、グルの弟子としてふさわしい言葉・行為・心を培う、完成する。これが、第三番目、真理に基づいて考える。これが達成できたならば、第三の法が成就したといえよう。
そして、第四番目は、それを実際に考えるだけではなく、それを実践する。つまり、法にのっとり実践する。例えば、日々のワークがつらいとしても、そのワークに対して、自己の煩悩のどの部分がけがれているかららいんだということを認識し、それに打ち勝つ。あるいは、ワークはできるが教学ができないという者は、法を深く理解することにより、自己を完

成させようと努力し、法にのっとり、学び、実践する。あるいは、学び、奉仕作業は行なうが瞑想ができないという者に関しては、日々の反省を込め、教学したものを繰り返し心に思念しながら瞑想を加える。瞑想する。

◉心のふるさとと戒律の達成——供養値魂へ

これをなした者は、完全に聖者の流れに入ったということができる。そして、この聖者の流れに入った者には、地獄が存在しない。餓鬼が存在しない。動物が存在しない。あるいは、人間以上に生まれたとき、他の人が苦しいと思う苦しみが存在しない。

そして、この者は四向四果（しこうしか）ということができる。この四向四果というのは、まず預流向（よるこう）。この預流向とは何かというと、今言った四つを土台として、聖なる八支の道を実践している者。そして、それが完全に自分のもの


Pea

になったならば、預流の果を現じた、預流を達成したということができる。そして、激しい修行をする者は、そこから供養値魂に到達するであろう。それより少し弱い者は、不還に到達するであろう。それから、まだ煩悩に若干けがれがある者は、一回、この人間として生まれ、煩悩を完全に清め、涅槃するであろう。

つまり、君たちは転輪聖王の十六倍以上難しい法の実践を行なっている。それだけ、類い稀な徳の持ち主だといえる。この徳を利用し、この徳を称賛し、そして、ひたすら法の実践を行なう。

君たちの帰る場所、君達の心のふるさと、それはグルでなければならないし、教義でなければならないし、あるいは法友でなければならない。そして、君たちの生活規範、これは戒律でなければならない。この心のふるさとと戒律を完全に達成した者は、最上の瞑想を行ない、最上のサマディ

に到達し、必ずやオウムでいうマハー・ムドラーの成就、供養値魂へと到達するであろう。
　現代は誘惑が多い。昼にはその誘惑を避け、ひたすら奉仕作業を行ない、夜にはそれを土台とし、教学し、そして瞑想に励む。これをなすならば、最も早く君たちは預流を現じ、そして供養値魂へと到達するであろう。しっかりと日々の修行を行なってほしい。

第十四話　不死に至る四つの実践





九〇年八月二日　シャンバラ精舎

◉不変・不死を勝ち取る真理

一切は無常である。サマナ諸君はこの無常という意味について熟考したことはあるであろうか。

今、オウム真理教と、そしてこの日本の社会とのぶつかり合いの背景にあるもの、それは、宗教上の違いということができる。では、いったい何が違うのか。それは、今の日本の社会は、唯物的自由主義であると。あるいは、無常を目隠しし、常と見、この人間の世界においていかに快楽を享受するか、五妙欲を満足させるかということが、この日本の社会を形成しているもの根本となっているものである。そして、逆にオウム真理教は、原始仏教と、あるいはタントラ密教をミックスした、無常を背景とした宗教ということができる。

これは、わたしの修行動機でもあるし、あるいはいにしえの覚者方の修

行に入られた動機でもある。それは、この無常の世界を出離したい、そして本当に壊れない、安定した、不変のものを勝ち取りたいと、あるいは、この病多き肉体、老い、死というものを超越した、ビビッドな、そして永続性のある意識状態に到達したいと、つまり不死に到達したいと願うこと、そしてその実践である。そして、実際にその到達である。これがオウム真理教の教えである。そしてこれは、今組み立てられているオウム真理教の修行システムを、確実に一歩一歩、歩を進めていけば到達できる、だれにでも手の届く世界なのだということをサマナ諸君は理解しなければならない。

◉五取蘊を止滅せよ

ではいったい、何をなせばこの不死に到達するのか。あるいは、何をな

せば死に到達するのかということについて考えなければならない。

この不死と死という点については、死についてまず語った方が早いから、死について語ろう。

この、形成されているわたしたちの肉体、あるいはイメージ、あるいは感覚、意識、あるいは意志といった、この五つの集まり、この集まりの存在こそがわたしたちを死に至らしめる因である。そして、この五取蘊（ごしゅうん）を完全に止滅することこそ、わたしたちが不死に到達するただ一つの道である。そこには、純粋な、広大な、光り輝く真我しか存在しない。そして、それをマハー・ニルヴァーナと呼ぼう。あるいは、大いなる空性（くうしょう）と呼ぼうと。これが約束事なんだ。そこでの至福の状態、そこでの平安の状態、そこでの絶対的な安定の状態というものは、そこへ到達した者以外理解することはできない。

◉「空」のすべて

では、不死とは何であろうか。不死とは、五取蘊を超越し、その後で出てくる最終の意識状態ということができる。

では、なぜこれを不死というのだろうかと。それは、意識が連続しているからである。例えば、君たちが多くの食べ物を食べると眠たくなる。あるいは、邪淫（じゃいん）を行なうと眠たくなる。そして、実際寝る。そのときは、ほとんど覚えていない。一種の気絶状態である。これが死である。この、短い時間の状態ではなく、長い時間の状態、そしてそこでカルマの入れ替えが起き、新しい五蘊を形成する課程、これが死と誕生である。

そして、不死に到達した者は、この死、そして生というものをはっきりと覚え、自由にコントロールすることができる。そして、最終的にはこの五つの取蘊を止滅させ、そして永遠に生じない、永遠に滅しない、永遠に

増えない、永遠に減らない、永遠に綺麗ともいえない、永遠にけがれているともいえない状態へ到達する。そして、これが『般若心経』の「空」のすべてである。

◉絶対的不死に到達するには

では、この空、あるいは絶対的な不死の状態に到達するには何をなせばよろしいのか。それは、不放逸を根本としている。不放逸とは何かといったら、それは、絶えず精神集中をし続け、気を配り続けるということである。では、何に対して気を配るのかと。それは、グルの意思、グルの教え、それに対して気を配るということである。そして、諸君の身・口・意、この三業が完全にわたしと合一したとき、そのとき君たちは不死を得ることができる。

　では、そのためにはどのような実践方法があるのか。それは、まずしっかりと、グル、あるいはシヴァ大神、諸々の覚者に対して確信を持つ。強い信心を起こす。けがれない心によって強い信心を起こす。わたしたちが救われる道は、ただひたすら、グル・シヴァ大神・諸々の覚者にすがることである。その教えを実践することである。これ以上の道はないんだと確信を持つこと。そして、グルの説く法、あるいはわたしの提供する諸々の教えというものが、サマナ諸君を不死へ到達させるんだという自覚を持つこと。そして、先を歩いているスワミ、あるいは師が、あるいは正悟師が、あるいは正大師が、自己の道しるべであると確信を持つこと。そして、与えられた戒律をしっかり守ること。これが第一の条件である。

　そして、第二は、多くの説法を聴く。揺れたときに、自己のけがれた心によって考えるのではなく、教えにのっとり考えられるくらいの多くのデー

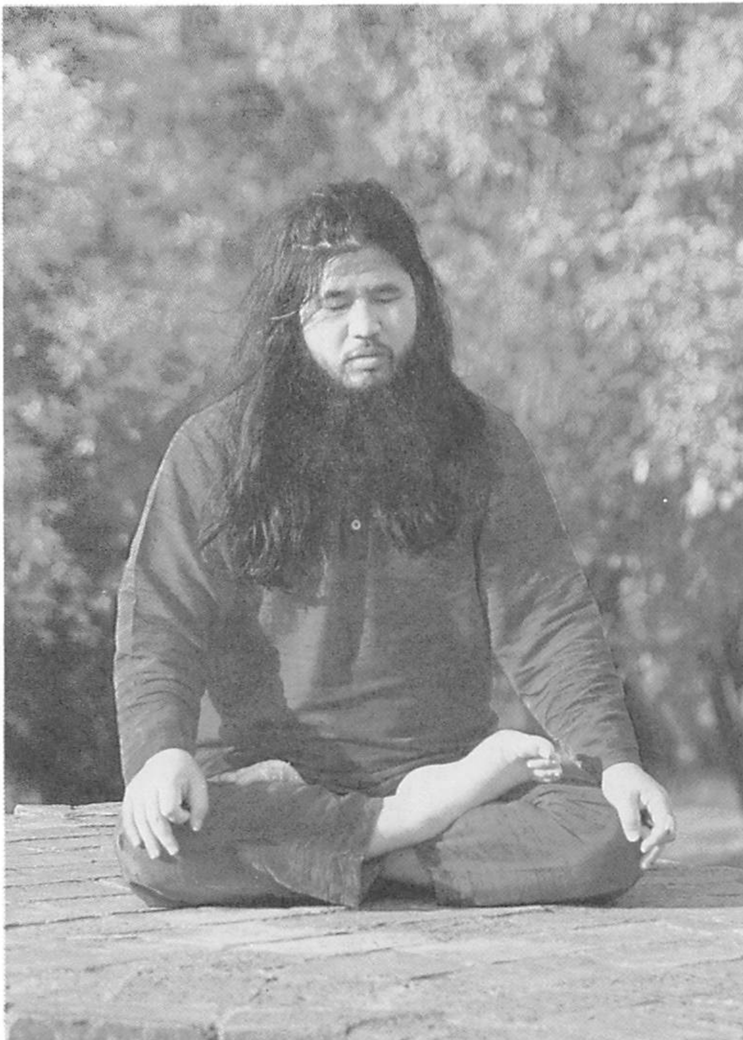
タを入れる。暇があればひたすら説法を聴き、本を読む。これが第二の条件である。

そして、第三の条件は、その教えにのっとり考える、周りの人を見る。例えば、揺れている人を見たら、この人はどの煩悩(ぼんのう)で引っかかっているんだ、ああ、この人は、例えば地獄に落ちるな、餓鬼に落ちるな、あるいはこの人は一生懸命真面目に真理に取り組んでいるから、いずれ天へ生まれ変わるな、あるいは解脱するなと。そのような目で絶えず観察する。つまり、四つの絶対的真理を背景として観察する。これが第三の条件である。

そして、第四の条件は、その教えそのものを自己に体得する。すべての教えを自分の中に内在させる。これが第四の条件である。

そして、この第一から第四の条件を絶えず繰り返し修行している者は、必ずや悟るであろう。必ずや覚者になるであろう。必ずや真理勝者へ到達

第十四話　不死に至る四つの実践



するであろう。そして、神秘的ないろいろな力を有することになるであろう。

◉人間を超える

例えば、こういう例がある。これはCSI（コスミック・サイエンス・インスティテュート）の話だが、一五〇〇ボルトの電圧が数秒間流れた者がいる。普通だったら、完全にショックを受けて死ぬはずである。ところが、ちょっとその部分が焦げただけですんでしまった。これは、真理の実践によって、異常に色がショックに強い状態を作り上げているということの良い例である。

似た話がある。これはカール・リンポチェのグルであるカルマッパという偉大なるグルがいたが、この人が亡くなったとき、火葬した。ところが、

心臓だけは全く焼けずに出てきたという話がある。
そして、君たちは今、今生でこの人間を超えなければならない。今生で人間を超えられない者が、来世、死を境に天へ生まれ変わることはあり得ない。君たちの死の前の状態がどれだけ天へ向かっているか、あるいは解脱へ向かっているかによって、来世は決定される。そして、時はない。なぜならば、いつ死が、死の大群が襲ってくるかわからないからだ。
今ここで、貴重な修行のできるサマナの皆さんの、これからの精進、そして修行に対する欲求を期待して、今日の講話を終わりたいと思う。

◉五取蘊の浄化――大切な日々の実践

最後に、瞑想とワークについて、少し付け加えておきたい。
例えば、十波羅蜜（じっぱらみつ）の第一の布施波羅蜜について、諸君も知ってのとおり、

自己のプライド、あるいは生命をも布施してしまうという修行法がある。そして、そこに到達するために、多くのいろいろな身を供養する瞑想が行なわれるわけだが、君たちはどう思うか。この、多くの瞑想を行なっている者が、実際身を捨てることができなかったとしよう。もう一方は、平気で身を捨てたとしようじゃないか。どちらの方が十波羅蜜の第一である布施波羅蜜の達成ができていると思うか。どうだ。

（サマナ達）後者です。

そのとおりだ。ワークもそれと同じである。いくら瞑想しても、実際に救済の側に立ってワークのできない者は、その瞑想が根付いていないということができる。逆に、きちんと救済を意識し、グルを意識し、シヴァ大神を意識して実践できる者は、瞑想ができている者ということができる。

つまり、それは既にもう、心にその土台が根付いていて、そしてそれが

表現として、実際の行為として表現できる状態まで達成しているということです。ということは、君たちがこのワークにおいていかに心を浄化するか、言葉を浄化するか、あるいは行為を浄化するかを意識しなさい。それが、君たちにとって最高の瞑想である。そして、その日その日の出来事において、自己の身・口・意の統御について達成されたかどうかを、この十時から十二時の間の教学、および瞑想の時間で解決しなさい。いいね。

（サマナ達）はい。

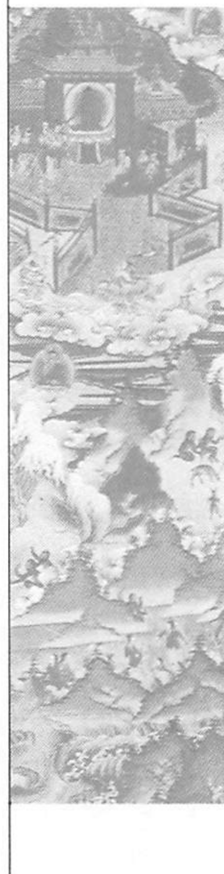
それを日々行なう者は、いいか、三年で達成されるといわれるクンダリニー・ヨーガの成就、これを一年で達成できるだろう。そして、それを日々行なっている者は、二年以内にはマハー・ムドラーの成就が訪れるだろう。いいね。

（サマナ達）はい。

なぜならば、自己の五取蘊を、日々浄化しているからである。いいね。

（サマナ達）はい。

だから、日々の修行、これを大切にしてほしい。



第十五話　智慧の具足のために



九一年三月二日　京都支部

◉最高の宝

この世を問わず、すべての世界を通して、最高の宝――それは「智慧」である。智慧と知識との違い、これを検討しないと、わたしのいう智慧という意味が皆さんには理解おできにならないだろう。

智慧とは、要するにわたしたちの心にいろいろへばり付いている煩悩、例えば、嫌悪・貪り・無智、あるいは、性欲・食欲・プライド・卑屈さ・権力欲、あるいは、いろんな願望を成就して満足させる心――等々の色を一つ一つぬぐい去り、そして透明にした状態、この状態で現象を見極める状態、これが智慧である。

知識とは、あるカテゴリー、つまり範疇、例えば経営について、医学について、あるいは、他の武術や学問について、それがどのような構成となり、そして、どのようにしたら、その分野を多く自分のものにするかと

いうことを根本として作られた、要するに智慧と全く逆の色なのである。

◉ありのままに映し出す透明な心

　では、なぜこの智慧が最高の宝だといえるのだろうか。智慧を持っているよりも、財産を有したり、あるいは学問を有したり、あるいは権力を有する方がいいではないかと考える方もいらっしゃるはずである。

　しかし、よく考えてみよう。この智慧、あるいはその他のいろいろな付属物。例えば、先程言った権力とか、あるいは財産とか、その類(たぐ)いとの比較は、一方は原因を作り、一方は結果にすぎないということなのである。

　では、一方は原因を作りとはどういうことかというと、例えば、智慧というものは透明な心を表わしている。透明な心というものは、例えば対象に対して、その対象をありのままに、正確に映し出すことを表わしている。

例えば、『滅亡の日』『滅亡から虚空へ』は、知識と智慧をミックスして書かれた本である。そして、予定どおり、ソビエト・アメリカ連合軍がイラクを叩き、そして石油、この石油を自分たちの支配下に置こうとしている事実がある。ということは、次に来るのは最終戦争であるハルマゲドンである。そしてこれは、別に知識を基に検討したわけではなく、知識は知識として入れ、その他にありのままにものを見つめる心の働きによって、一気に書き下ろした本である。

そして、この世界的な流れの予言が理解できるわけだから、当然それは事業においてもそうだし、あるいは恋愛についても、あるいは一般の幸福といわれるものについても、簡単にありのままに理解できるはずである。



◉智慧の具足と知識の具足

例えば、二つのタイプを考えてみよう。この二つのタイプは、同じ事業をなしたと。一つは、ありのままにものを見つめていると。もう一つは、ひたすら知識を詰め込んだと。この前者は、一見事業に向かないかのように見える。しかし、実際は知識というものは、第三者が心のけがれを含みながら与えるデータであるから、当然メリットと、それから欠点であるディフェクトをそこで受けなければならない。

ところが、智慧によって現象を見つめる場合、例えば、今投資をすべき時期である。あるいは、今退(ひ)くべき時期である。あるいは、今事業を拡大すべき時期である。あるいは、今事業を縮小すべき時期である。あるいは、今従業員を増大させるべき時期である。あるいは、今従業員を縮小すべきである。あるいは、この従業員は自分の所に置いて鍛えれば将来ものにな

る。あるいは、この従業員が入ることによって事業が衰退する——等の、いろいろな現象に対して、正しくものを見つめる力というものを得られるはずである。

ところが、逆に知識というものは、こういう従業員はこの会社に向いている。あるいは、こういう従業員は向いてない。あるいは、今の時代は投資をしても成功するから投資をしなさい。あるいは、今は投資をすべき時ではない——等々の、要するに流れている現象を、その点その点で止めて、それによって知識を与えると。ということは、この知識というものは、完全なるビハインド・タイム、つまり時代遅れなのである。

同じことが、例えば学問についてもいえる。ある人は一生懸命学校の学問を詰め込んで、知識優位になったと。もう一人の人は、少し学力は劣るかもしれないけど、例えば問題について十分に考え、検討し、そして問題

を解く習性をつけたと。前者は一流大学、そして一流企業へと入るだろう。ところが後者は、一流大学には入らないかもしれないけど、少なくとも自分の経験した分野については、絶対の確信を持つであろう。

そして、世界史をひも解くと、エジソンにしろしかり、あるいは、ニュートンにしろしかり、あるいは、アインシュタインにしろしかり、すべてこの後者のタイプなのである。つまり、この世の中において、現象を見極めた人達の得ていたものは、知識の具足（ぐそく）ではなく、智慧の具足なのであるといわざるを得ない。

◉四如意足の実践

では、どのようにしたら、この智慧を具足することができるのだろうか。この智慧を具足するためには、「四つの如意足（にょいそく）」の実践が最も適当であり、

そして、最も早く現象化させることのできる修行法なのである。では、四つの如意足とは何であろうか。それは、「決意・精進・思念・観慧」の四つである。

では、「決意」とは何であろうか。これは、対象に対して決意する。例えばある人は、わたしは解脱をしたい、わたしは解脱をしますと思念する。ある人は、わたしは大いに功徳を積んで、素晴らしい結婚をしたい、わたしは大いに功徳を積んで、素晴らしい結婚をしたいと思念する。ある人は、わたしは大事業家になりたいと、わたしは大事業家になりたいと思念する。ある人は、わたしは大会社の社長になりたいんだと、この企業において社長になりたいんだと思念すると。これが決意である。

◉精進――四つのカテゴリー

では次の「精進」とは何であろうかと。この精進には、四つのカテゴリーがある。その第一は、今なしている、智慧を増大させるための修行――これをより一層実践する。

例えば、布施の実践を行なっている人は、わたしは布施の実践をするぞ、わたしは布施の実践をするぞ、もっともっと布施の実践をするぞと思念する。例えば、奉仕の実践をなしている人は、わたしは奉仕の実践をするぞ、わたしは奉仕の実践をするぞと思念する。例えば、法施をなしている人はわたしはもっともっと多くの法施をするぞ、わたしはもっともっと多くの法施をするぞと思念する。

そして、第二番目のカテゴリーは、今自分のなしていないものに対して、未来において思念を加える。例えば、今わたしは布施の実践をしている。

しかし、法施の実践をしていない。よって、功徳を増大させるために、法施の実践をしようと。あるいは、今わたしは法施の実践を行なっている。しかし、入信をさせるまでには至っていない。よって、入信をさせ、第三天界以上に生まれ変わる功徳を積むぞと、こう考えると。

そして、例えば、布施は自己の貪りの心を取り払い、そして、結婚相手も貪りの心のない、自分を自由にしてくれる素晴らしい相手が巡り合うはずであると考えると。あるいは、今なしている奉仕は、これはきっとわたしの旦那さんに跳ね返ってくると。わたしの、まだ結婚していない彼は、きっとわたしに対して大変な奉仕をなしてくれるぐらい素晴らしい人が現われてくれるだろうと。こう考えながら、実践すると。

そして次は、なしてはいけないことの実践である。例えば、わたしは殺生を今はしていないと。しかし、貪りの心があり、少しちょろまかすよう

な傾向があると。あるいは、邪淫によってエネルギーを漏らすと。この邪淫によってエネルギーを漏らしている、このエネルギーを漏らさないようにしようと。そこでピタッとやめると。あるいは、わたしは不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語は実践できるんだけど、綺語が多いと。よって綺語をやめようと実践すると。

そして、絶対にやめることのできない、例えば、わたしはどうしても自分を守りたいがために、あるいは友達が欲しいがために、両舌をなしてしまうと。この両舌を、例えば他の戒律を守ることにより、一年後からはきちんと止められるように努力しようと考え、実践すると。

これが、四つのカテゴリーである。そして、第一番目の決意に合わせて、この四つを実践すると。

第十五話　智慧の具足のために



◉人生を思いのままに

そうすると、次は「思念」に入ると。例えば、事業を営んでいる者は、わたしはこれだけの布施・奉仕・法施・戒律の遵守を行なっていると。よって、わたしの事業は絶対に発展すると。これはグルの祝福、あるいはシヴァ大神の祝福があって当然であると。あるいは諸々の仏陀、あるいは諸々のタントラの仏陀が祝福してくれて当然であると。こう思念し続けると。

例えばこの思念も、一万回、三万回、五万回、十万回と思念する。あるいは、わたしは在家であるが、これだけ貪りのない、今修行を行なっていると。わたしが今在家にとどまっているのは、それはおじいちゃんやおばあちゃんのためであり、あるいは夫のためであり、あるいは妻のためであり、あるいは子供のためであると。しかしわたしは、解脱をしたいし、現

世においてタントラ・ヴァジラヤーナの修行を行なうことによって、必ず解脱できるはずであると。そう思念し続け、その思念を実践すると。これが第三番目のカテゴリーである思念如意足である。

そして第四番目は、自分自身の修行を振り返り、それを経典にのっとり考えると。例えば、わたしは確かに三つのカテゴリーの実践をしてきたと。しかし、もう一歩ハイレベルの修行にはまだ没入していないと。それはなぜかというと、例えば執着が存在していると。あるいは、わたしの今までの事業は、ある程度成功していると。しかし、もう一歩突っ込みが足りないように思われると。それは、わたしの心の寛容さが足りないからである。あるいはわたしの懐（ふところ）が狭いからであると。では、どのようにしたらいいかと。それについて経典を、『マハーヤーナ』等の経典を探し、あるいは、正悟師（せいごし）や師に相談をし、そしてその部分を解決するように考えると。

これが、第四番目の「観慧」である。観慧とは何かというと、要するに智慧によって現象を観察し、それを解き明かすということである。

この、決意・精進・思念・観慧の四つの如意足——如意足というのは、この世の中を意のままに生きていくためのわたしたちの乗り物と考えなさい——この四つの如意足を実践するならば、この現象において、意にかなわないことは一つもないであろう。

◉すべての土台——四預流支

では、この観慧の土台となるものは何であろうかと。一体何を根本にすればいいのかと。それは一般に出回っている書店の本であろうかと。そうではない。

この観慧の対象となるものは、まず、帰依処(きえしょ)を定めることであるという

ことになる。当然この帰依処というものは「三宝」でなければならない。

三宝の第一は、シヴァ大神の化身である、諸々の仏陀の化生身(けしょうしん)であるグルに対して帰依をすること。そして、シヴァ大神や諸々の仏陀や、グルの説いた法に対して帰依をするということ。つまり、真理に対して絶対的な帰依を持ち、実践するということ。そして三番目は、その真理を実践し、高い成就を果たしている者に対して、あるいは自分の先を行ってる者たちに対して、帰依をするということ。この帰依というのは何かというと、教えの実践、そして、奉仕・布施のことを表わす。これが第一のカテゴリーである。

では、第二はどうかというと、一度聴いた真理を、心の中で何度も何度も繰り返す。あるいは現代は、書籍やオーディオ関係の発達によって、何度も何度も同じ経典を読む。同じ説法を読む。あるいは、何度も何度も同

じテープを聴き、記憶すると。これが第二番目のカテゴリー。第二番目の四如意足を完成させるための、そして、わたしたちが高い世界、マハー・ニルヴァーナへと至るための土台である。

では、第三番目は何であろうかと。第三番目は、そこに自己の考え、つまり、色を付けずに記憶修習したものを土台とし、そして現象を見つめる。ある人は、自己の貪・瞋・癡について見つめればいい。ある人は自己のこの現世の対象に対して見つめればよろしい。例えばそれは、結婚であり、就職であり、学業であり、あるいは事業であると。そして、それらの法は存在している。その法を土台とし、しっかりと考えると。まあ、これは漢訳では「如理作意」という言葉を使っています。

そして、第四番目。これは実際に考えたもの、これを実践するということである。つまり、真理にのっとり実践すると。これは、「随法行」と

いう言葉が使われているが、実際は「随真理行」ということになるだろう。

◉絶対的世界への到達

これらの四つの実践、つまり、四預流支（しよるし）の実践を行なうことによって、四如意足は完璧なものとなる。そして、自分の生きる意味合い、自分の今生でなしたいこと、自分の経験によって補いたいこと等を十分に考え、検討し、しっかりと土台を根付かせると。そうすることにより、悪業を積むことなく、大いなる善業の増大によって、あるいは、素晴らしい真理の増大によって、皆さんが祝福されることは、間違いないであろう。

この現象は、一見複雑に絡んだ糸のように見える。しかしその実は、自己の煩悩を滅却すれば、全くたわいない原理によって動いているのがこの実状である。

よって皆さんが、この四つの、絶対的世界へ到達するための修行、つまり四預流支の実践、そして、この世を意のままに渡り歩くための四つの如意足の実践を行なうことにより、在家修行者として、在家信徒として、在家信徒から帰依信男（きえしんなん）・帰依信女（きえしんにょ）、つまり、優婆夷（うばい）・優婆塞（うばそく）として、皆さんの実践が一歩二歩と進むことを思念し、今日の講話に代えたいと思います。

第十六話　七つの覚支と仏教の流れ





九一年三月九日　高知支部

◉南伝と北伝――その違い

仏教の流れには「南伝系仏教」、そして「北伝系仏教」の二種類がある。この南伝系仏教というのは、いわゆるインドからスリランカに渡り、スリランカを土台とし、今東南アジアに伝わっている仏教。北伝系仏教はインドからチベット、あるいは中国へと渡り、そして、その一部が日本に伝わっている仏教である。

この、南伝系仏教と北伝系仏教の特徴的な違いは、南伝系仏教は、まず原則的仏教ということができる。そして、北伝系仏教は現象的仏教ということができよう。

この原則的仏教と現象的仏教とはどのようなことかというと、まず、原則的仏教とは、例えば「四預流支（しよるし）」の実践を行なうことによって、色究竟天（しきくぎょうてん）へと到達し、マハー・ニルヴァーナへと入ると。例えば「七覚支（しちかくし）」の

実践を行なうことによって仏陀となると。このようなことが中心として説かれている教えである。

北伝系仏教は、もちろんこれも、ある程度完備されているが、それよりもそれによって出てくる結果、現象、例えば宇宙はどのように構成されて、どのように破壊されるかだとか、あるいは、どういう世界がどのように広がっているかだとかいうことが中心に説かれている教えである。

もっと別の言い方をすれば、南伝系仏教、もっと正確な言い方をすれば上座部仏教といってもいいのかもしれないが、これは「経」中心の教えであると。そして、北伝系仏教は「論」中心の教えであるということができよう。

なぜ、わたしが今日の講話の初めにこのような二つの対比をしたかというと、これから話す内容がちょっとあまりにも難しいので、その前置きと

いう意味を込めて話したわけである。

◉バルドー——五蘊の傾向の集積

わたしたちはそれぞれ、瞬間瞬間の経験、つまりバルドーを経験し続けている。このバルドーというものは認識をする、あるいは認識をしないにかかわりなく経験を続けている。

これはどういうことかというと、要するに、目の見える者が対象を絶えず見続けている状態、これがバルドーを見続けている状態であると。目の見えない者が現象は動いているのに、その現象を見ないで現象が動いていないんだという誤った見解に立つ、そういう状態、これが実際はバルドーが存在しているのに、バルドーが存在していないという見解を持つ状態である。

　ところで、このバルドーというのは何かというと、わたしたちの五蘊（ごうん）の傾向が、五蘊の傾向というのは、まず形状・容姿に対する好み、感覚に対する好み、イメージに対する好み、意志に対する好み、そして識別に対する好みによって、わたしたちが絶えず行、サンスカーラを行なっているわけだが、その集積が瞬間瞬間に結果として現われている状態というふうに考えていただきたい。

　例えば、ここに大変強い邪悪の心を持った人がいて、この人が、例えば嫌悪を修習（しゅじゅう）していたと。そうすると、その人の、例えば意志は当然他を排斥（はいせき）するという方向で進むだろう。あるいは、イメージは殴（なぐ）ったり殴られたり、傷付けたり傷付けられたりといったような形で蓄積されていくだろう。あるいは、感覚は絶えず嫌な、本当に嫌な感覚の集積が、当然それによって起きるだろう。あるいは、知らず知らずのうちに、その人の好む形

状‐容姿も、やくざっぽい形状‐容姿を好むようになっていくだろう。あるいは、識別のデータも絶えず人を傷付けてやろう、あるいは孤独感といったようなデータが少しずつ少しずつ蓄積されていくだろうと。

◉「幸福な生命体」となるには?

ここで問題になってくるのは、その五蘊の傾向、この五蘊の傾向が実際に行としてスタートし、そして対象に対してそれが実現する前に、既にわたしたちの五蘊の中で、そのような形成がなされているんだということの認識である。もし、この認識を怠るならば、当然わたしたちの苦しみというものは外界によって形成されていったかのように錯覚を受けることになる。

ところが、もしこのバルドーの瞬間瞬間の変化というものを注意深く見、

聞き、そして味わい、嗅覚として感じることができると、あるいは触覚的に感じることができるようになったならば、それに対して敏感となり、自分自身の傾向がどのような方向に向かっているのかということをはっきりと、しかも素早く理解することができるようになるだろう。

つまり、バルドーのスピードが速く、しかも、それに対する感受性が鋭ければ鋭いほど、その人は幸福な生命体ということができる。逆に、バルドーに対して愚鈍で、しかも、そのバルドーが実際に現象化するスピードが非常に遅いとなると、これは悲しむべき結果となると。

それはなぜであろうか。例えばわたしたちの心の本性——ここでは、真我という言葉を使うのがぴったりかもしれない——真我というものは自分の傾向に合わさった世界を選択し、そこへ向かおうとする。

例を挙げるならば、例えばここにラーメン屋さん、うどん屋さん、そし

て、そば屋さんがあったとして、初めラーメンが好きであるならば、その人の足は当然ラーメン屋に足が向かうだろう。決して、うどん屋やそば屋には向かわないだろう。

ところが、その人がラーメンから、例えばそばに移ったならば、今まではラーメン屋に入っていたのが、当然そば屋さんに入るようになるだろう。

これと同じように邪悪な心によって、例えば嫌悪の修習をした人は、先程述べた全く苦しみしか存在しない世界へと心は向かうのである。そして、その蓄積が多ければ、例えばそれは地獄の世界を形成することになる。

◉解けたバルドーのなぞ

では一体、この動きがゆっくりである、あるいは動きが速いという、このバルドーとは何だろうかと。一体何によってなされているのかと。

第十六話　七つの覚支と仏教の流れ



この規定は、要するに、固体的規定から原子の運動のスピードの規定へと、幅が広いということになる。つまり固体、それから液体、それから気体、それから完全にそれが昇華されて、原子運動、そして次は原子の電子、中性子、陽子の一個一個分裂した形の運動のスピード、そして、最後には光の中でも最も速い光の粒子の運動ということになる。それらのスピードに対して心が感応できるかどうかということになる。

ここで一つ、皆さんは「おやおや今日は麻原はちょっとおかしなことを言ってるな」とお考えになるかもしれない。しかし、実際は少しもおかしいことではないのである。

例えば、嘘発見機という機械がある。この嘘発見機という機械は、ある情報を相手に提供し、それによって心がどのように動くかということを電気的に知る機械であると。つまり、電気信号的に知る機械であると。

これと同じレベルを、他心通は心によって感受し行なうわけである。ということは、この電気のスピードと少なくとも同じスピード、あるいはそれよりも速いスピードで、その電気的な信号というのを心は読み取っているということになる。

そして、この他心通というのは五つの神秘的な力の基礎にすぎない。これがもっと鋭くなってくると、例えば宿命通、これは前生を見る力、あるいは死生智、これは来世を見る力、あるいは漏尽通、その人の煩悩のその構成のすべてを見る力ということになるが、このすべてが視覚的に、あるいは聴覚的に、嗅覚的に、味覚的に、触覚的に感じるようになってくるわけである。

で、今日わたしがこの講話をした理由というのは、実は、これはしょっちょうわたし自体が経験しているわけだけれど、そのバルドーの構成につ

いて一つのなぞが解けたんでね、それで、今皆さんに話をしているわけである。

◉固定的にとらえるか、とらえないか

で、なぜわたしが初めに北伝系の仏教と、南伝系の仏教の話をしたかというと、北伝系の仏教は、その結果を固定的にとらえると。南伝系仏教は、その結果を固定的にとらえないということによって、一方は固定的にとらえられるがゆえに、それを「論」として表わしたと。もう一方は固定的にとらえられないがゆえに、それを表現しなかったの違いであるということを言いたいわけである。

これはどういうことかというと、例えば、ここに千人の人がいたとして、この千人の人に「あなたは何が好きですか」と。九百九十人が「ハンバー

グが好きです」と言ったとしよう。そうすると、ハンバーグを好む世界が当然形成されていいはずである。しかし、少なくともその中の十人、つまり一パーセントの人はそのカテゴリーに入らない。

そして、南伝系はこの一パーセントを重んじ、北伝系は九九パーセントを重んじたということになる。よって、北伝系は大乗だという言葉を使っているわけである。つまり、オーソドックスに多くの人を救済すると。しかし、当然その中に救済されない者も含まれてくるということになる。

そして、最終的に皆さんの修行が進み、今言ったバルドーの形成、そして、その人の次の生の決定というものがはっきりわかるならば、このような固定的な論を展開することにより、仏教を観念的に規定してしまうということによって、正しくない教えがそこで定着されてくるということになる。それが「大乗経」なのである。

例えば、仏陀がこれこれいらっしゃって、こういう世界があって云々という話が出てくる。しかし実際、仏陀には多くのレベルがあり、如来には多くのレベルがあり、世界は規定できないと。

ちょっと難しいんじゃないか、どうだ。何を言っているかわからないというところがたくさんあるんじゃないか、今日の話は。

ここで北伝系の話をやめて、南伝系のわかりやすい話に戻そう。

南伝仏教の良さは、それを聴き、実践するだけで利益になるということである。例えば、いくら『法華経』の素晴らしい世界観をわたしたちが聴いたとしても、結局わたしたちがその仏陀へ到達するための道、つまり南伝系の修行をしない限り、そこへと到達することはできない。ということは、北伝系の教えというのはあくまでも、絵にかいた餅であって、南伝系の教義を学び、実践することこそが最終的には北伝の世界へと入っていく

ということになると。もちろん、チベット仏教の一部の修行者は優秀だから、その北伝系の世界観は世界観としてとらえ、南伝系の基本的な修行をひたすら行なうわけだけれどね。

◉覚者に至る道とは？

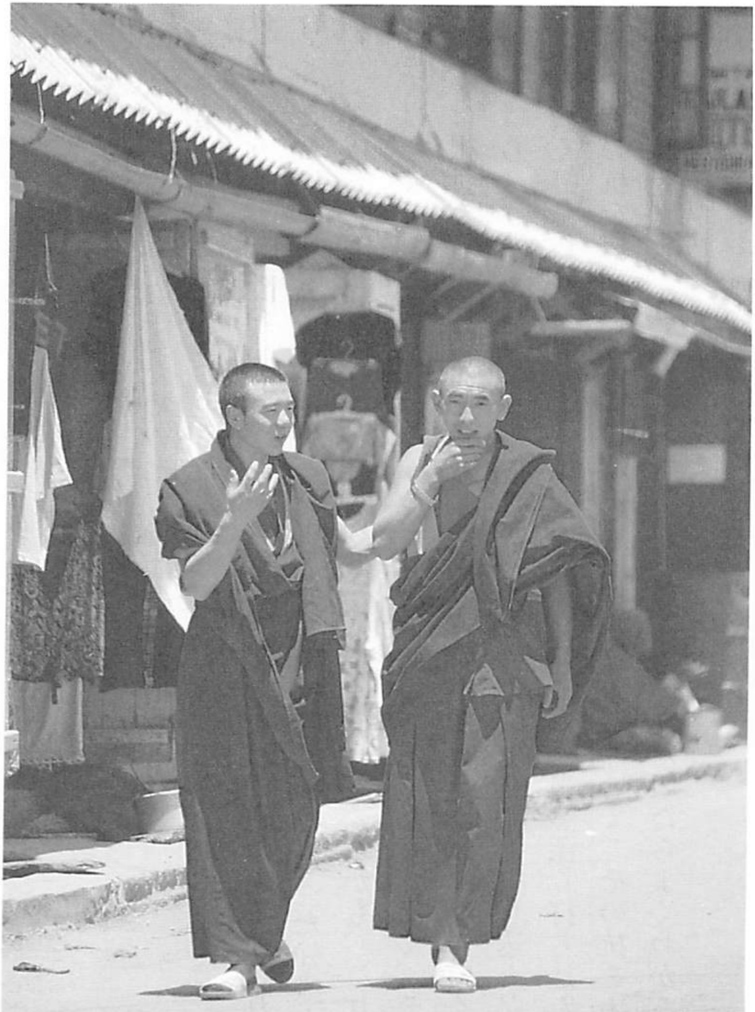
では、一体このバルドーを形成している要素を変えていくためには、つまり素晴らしい方向にもっていくためには、何の実践が最も素晴らしいんだと。何の実践が最も適当なんだという質問になってこよう。

これが実は「覚支(かくし)」なのである。覚支とはわたしたちが仏陀に到達するための土台、仏陀に到達するための支えということになる。

仏陀とは何かというと、目覚めている、はっきりしている、すべての現象をありのままに知っているということになる。

神々に至る修行と、仏教の修行の違いは何かというと、神々に至る修行は自分のいいところだけを見つめ、高い世界へ生まれ変わり、幸福に安楽に暮らし、徳を消耗し、落ちると。これが神々に至る修行である。では、覚者に至る、仏陀に至るための修行とは何かというと、わたしたちのいいところはいいところとして見つめ、悪いところは悪いところとして見つめ、いいところを増大させ、悪いところを逃げないでシャットアウトしていくと、これが仏陀に至る、覚者に至る道である。

よって、前者は結果が早く出てくる。それは、例えば自分の得意とするところだけで闘えばいいからである。後者は自分の得意とするところで闘うのじゃなくて、それプラス苦手な部分をしっかり克服し、それも得意にしていくという作業が加わってくる。よって、これは大変時間がかかるのである。しかも、テクニック的にも大変複雑となってくる。



◉七つの土台──「七覚支」

では、この覚者に至るための七つの土台とは何かと。

この第一は、その覚者に至るための方法、実践方法をひたすら記憶し続けるということである。これが第一の覚者に至るための道である。これを行なうことによって、初めはあるパートにしか対応できなかった知識も、いかなるパートにおいても対応できるようになってくる。しかも、これは記憶ではなくて、記憶し続ける、つまり記憶修習であるから、深く、そのデータは根付き、煩悩に対してもしっかりと対抗できるようになってくる。

それはちょうど、ここに一本の杭があって、この杭を深く打ち込んだ場合と、浅く打ち込んだ場合とではどのように違うか。当然深く打ち込んだ方が、その杭を抜き取るとき、あるいは杭を横から叩いて、その杭を土中から抜き出そうとするときの、抵抗力を考えていただいたらよくわかるは

ずである。これが第一番目である。
　第二番目の覚者に至る道は、真理の選択ということになる。つまり、今まさにどの法を実践したらいいのかと、まさにどの真理を実践したらいいのかということになる。
　例えば例を挙げるならば、在家に対する真理、出家に対する真理、あるいは男性に対する真理、あるいは女性に対する真理、あるいは、例えば出家においては、出家の一般生活に対する真理、あるいは修行に入ったときの真理といったような形でいろいろなケースが分かれる。よって、その場その場に応じた、どの真理を実践するのかということが規定になってくる。これが第二番目の「択法覚支（ちゃくほうかくし）」である。
　第三番目は、何を努力したらいいのかの規定である。何をひたすら実践したらいいのかの規定である。これは「精進覚支（しょうじんかくし）」といわれている。こ

の精進覚支は今なしているわたしたちの五蘊を上の世界へ、神々の世界へ、解脱へと導くものについて、大いにもっと実践しなさいと、それを広げていくための修習を行なう、繰り返し行なうということが第一である。

第二は、今まだ徳がなくて、あるいは時間がなくて、実践することのできない、功徳について思念し、未来において、その実践ができるように努力し続けると。つまり、思念し続けるという実践である。これによって初めは小さな功徳の実践が、未来において大きな大きな功徳へと変化していく。

第三番目は、今なしている即座にやめられる、自分を低い世界へと生まれ変わらせるための実践をシャットアウトする実践である。

例えば、例を挙げるならば、蚊(か)とか、あるいはハエとかは、まだ傾向が

悪いがために殺すようなカルマがあったとしても、大きな生き物について、いじめていた人がそれをやめてしまうと。そして、その大きな生き物に対して、哀れみを持つ訓練をすると。これが、三番目の「今なしている悪業を断じる」ということである。

そして四番目は、例えば蚊やハエについても、自分がいくら傷付いたとしても、その対象である小さな生命体を傷付けなくしようと努力し、思念し続け、そして、その傾向をストップしてしまうと。これが精進のすべてである。

つまり、今なしている善法を増大させると。今まだ徳や時間がなくてなせない善法を生起させ、そして増大させるように努力すると。悪業についても、今即座にやめられる悪業についてはシャットアウトすると。そして、今まだカルマが悪くて、そのカルマの傾向なるがゆえに、なさなければな

らない悪業について、それを思念し、摩擦を加え、やめる方向にもっていき、そしてシャットアウトすると。これが、わたしたちの努力をしなければならない、絶えず努力をしなければならないことであると。これが三番目の精進覚支ということになる。

◉軽快な心身、そして神秘の世界へ

では、四番目は何だと。四番目は、それらの修行について、大いに喜ぶ訓練をするということである。これはどういうことかというと、例えば、自分たちを高い世界に導くための布施・奉仕・持戒の厳守、あるいはカルマを落とされたときの状態、これらを喜ぶようにし続ければ、その人は当然その方向へと導かれる。ところが、これらを嫌悪するように修習すれば、当然その傾向はストップするわけである。よって四番目の修行は、この一、

二、三について、それをなせることを大いに喜ぶという修行をすべきである。これが四番目の「喜覚支」なのである。

では、五番目の「軽安覚支」とは何かと。これは大いに喜ぶ心の問題だけではなく、心身がそのような実践により、つまり正記憶修習、そして法の選択、そして悪業の断滅および善法の増大という、これらの実践をなすことによって、自分のカルマはどんどん良くなってきているんだと、よって心身はどんどん軽快になっていっているんだと、それを意識しつつ実践すると。これをなすことによって、心身は軽快になり、そして、長いサマディに導かれるようになってくる。

では次は、これらを実践したら何をなすんだと。バルドーを見極める修行へと入っていくと。つまり、次の実践は「サマディ覚支」であると。このサマディ覚支とは何かというと、今自分の行なっている状態を正確に見

つめる。まあ、これは六つの極限では「寂止（じゃくし）」と「正観（しょうかん）」ということになるけどね。

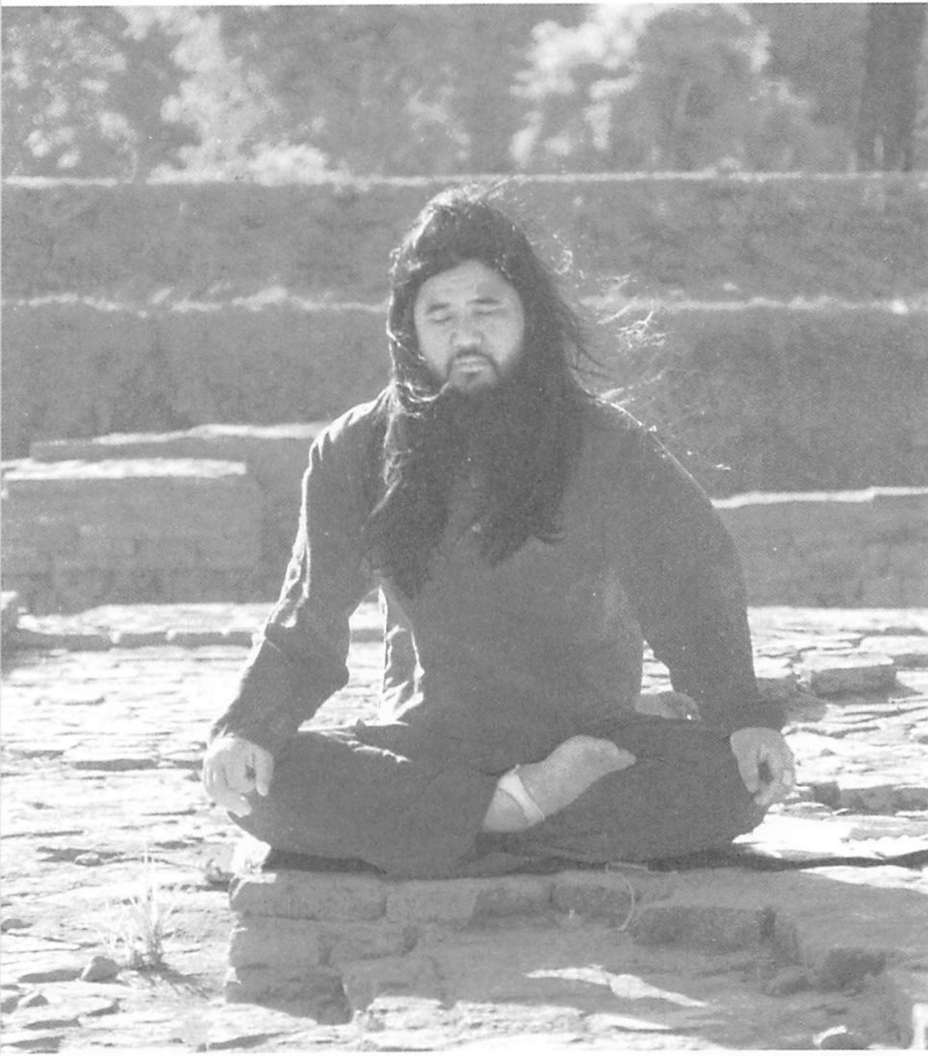
つまり、自分の修行はきちんと行なわれているか、正法の実践をしているかどうかを視覚的、聴覚的、嗅覚的に神秘の世界に没入させ、それを見極めるわけである。これが六番目の覚支である。

◉無頓着——一切の断滅へ

そして七番目の覚支は、今起き上がってきているバルドーについて、あるいは現象について頓着（とんちゃく）しないということである。なぜかというと、わたしたちは無始の過去から長い長い年月をかけ、悪趣（あくしゅ）へと至るデータを大量に放り込んでいる。

例えば、食事は三回食べるものであると。あるいは、おやつは当然食べ

第十六話　七つの覚支と仏教の流れ



るものであると。たくさん食べて、それで満足することは喜びであると。例えば、このようなデータが入っていると。

これに対して、例えば一食(いちじき)は聖者の食事であると、二食は人間の食事であると、三食は畜生の食事であるというようなデータが入ってきた場合、三食から二食、二食から一食にするときに、当然そこで苦しまなければならないと。でも、ここで苦しまないと。苦しまないで、そういうのに頓着せず、努力はし続け、無理なものはやらないと。

これをなすことにより、少しずつ少しずつ傾向は変化し、そのうち一食でも全く肉体が軽快で、心はビビッドで、そして、神秘的な力が備わってくるという状態が訪れるようになる。もし、ここで頓着するならば、もし、ここで執着を起こすならば、そこでその人は苦しみを生起させ、そして結局修行が続かないということになるわけである。

そして、これらの七つの覚支を実践し続けることにより、確実に仏陀の境地へといざなわれる。

なぜならば、まずわたしたちが実践しなければならない記憶の確認。そして適時の修行、適時というのは時に合った修行。そして悪業の断滅と善法の増大。そして、それらを喜ぶことによって、心は上流、つまり高い世界へといざなわれると。心身も軽快になると。そして、それに基づき、当然肉体から心は解放されサマディに入ると。

そして、その状態に対して、いろいろな経験に対して一切頓着しないと。これを繰り返してるうちに、わたしたちは貪(とん)・瞋(じん)・癡(ち)の煩悩を断滅するだけではなく、五つの下分結(かぶんけつ)、五つの上分結(じょうぶんけつ)、五蓋(ごがい)等をね、断滅し、完全な仏陀の境地へと到達するわけである。

◉七つの覚支の土台――「四預流支」

では、その七つの覚支の土台とは何かと。これは当然「四預流支(しよるし)」ということになる。この四預流支とは何かというと、まず三宝に対する帰依(きえ)である。なぜここで三つの宝といっているかというと、この三つの宝はわたしたちを瞬時満足させてくれるものではなく、わたしたち自体を本当に宝物に変えていってくれるという意味で三宝なのである。

では第一の宝は何かと、これは諸々の仏陀の化生身(けしょうしん)である、あるいは、三界の統治者であるシヴァ大神の化身であるグルに対して清らかな信仰を持ち、布施、奉仕、そして教学を行なうということである。

第二番目は、その法に対して、つまり真理に対して、同じように清らかな信仰を持ち、布施、奉仕、そして、その真理を何度も何度も記憶するということである。

第三番目は、煩悩の滅尽に向かっている多学の男の出家修行者ね、女の出家修行者に対して同じように清らかな信仰を持ち、布施、奉仕の実践、そして、その教えを学ぶということである。これが第一であると。三宝に対する礼拝が第一の土台ということになる。

では、第二の土台は何かと。この第二の土台は、これは一ともダブってくるわけだけども、その教えを何度も何度も、できるだけ多くの教えを何度も何度も記憶修習するということである。ここでは決して自分の考え方、観念を入れてはいけない。なぜならば先程も言ったとおり、わたしたちは既にこの欲界へ転生しなければならない傾向が蓄積されているから、この傾向を打破するためには、そうでない神聖（しんせい）な教えを無批判にまず記憶すべきである。ここで無批判に記憶するということは、それに対して肯定をしてもいけないし、否定をしてもいけないということである。

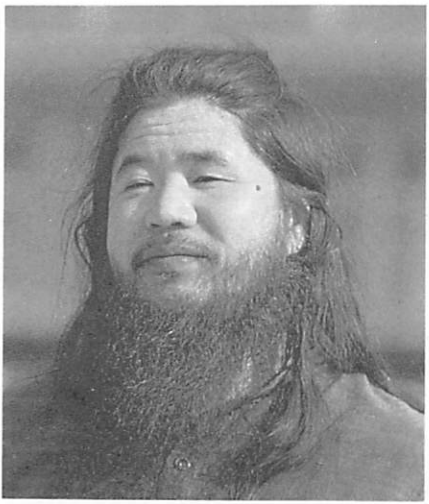
そして第三番目は、これらの記憶修習したものを基に、自分自身の身・口・意に対して検討を加え、分析し、そして、それを完全に理解するということである。そうすると必ず自分自身の過ち、あるいは自分自身の特性というものに気付くであろう。

気付いたならば、第四番目にそれを実践すると。そして、自己の身の行ない、口の行ない、心の働きを統御すると。そして環境に対して分析することにより、その環境のけがらわしさから離れると。

これらをなすことにより、ここにいるすべての人が未来において必ず神々へと転生し、そして神々を超え、非形状界へと入り、そして三つのグナ、つまり三つの特性である、ラジャス、タマス、サットヴァから解放され、マハー・ニルヴァーナへと到達することになる。

今日の講話はちょっと少し難しかったかもしれないけれど、ね、しっか

りと実践していただきたい。



この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『麻原彰晃の世界』読者係」までお送りください。

また、オウム真理教に興味を持たれた方は、下記の資料請求券を添付したハガキ、あるいは電話にて全国のオウム真理教道場までお問い合わせください。詳しい案内書をお送りいたします。

〒418-02　静岡県富士宮市人穴381-1
オウム真理教「『麻原彰晃の世界』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-02　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場） 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany

キリトリ線

麻原彰晃の世界　一
資料請求券

『麻原彰晃の世界』　第一巻

一九九一年八月一日　初版発行

定　価　二五〇〇円

発行者　松本知子
　　　　石井久子

編　集　オウム出版広報編集部

発行所　株式会社オウム

東京都世田谷区世田谷二ー八ー十七

郵便番号　一五四

電　話　〇三（三四三九）六〇四三

振　替　東京二ー一〇九三二五

ISBN4-900497-63-0 P2500E

麻原彰晃の世界

第一巻



ISBN4-900497-63-0 C0014 P2500E 定価2500円（本体2427円）